
仮面ライダーディケイド New Legend

サバイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド New Legend

【Nコード】

N8062H

【作者名】

サバイブ

【あらすじ】

——《創造》は《破壊》からしか生まれない——。

全ての《破壊者》、水野司は全てのライダーの力を所有する。

彼に立ちはだかるのは果たして——？

闇先生やトマト先生など、様々なディケイド小説とコラボする、超弩級のディケイド旅物語！

第零話 『ライダー大戦・始章』 (前書き)

初めてです。お手柔らかにお願いします

第零話 『ライダー大戦・始章』

そこには、何も無かった。

見渡す限り荒野が広がり、命の気配が微塵も感じられない。

そんな場所に彼は居た。

その酷く汚れた右手の中に、一枚のカードが握られていた。

彼の顔は、悲しげに歪んでいた。

少年が居る場所から、数軒離れた場所に、二人の少女と、二人の少年が居た。

一人の少女は、右手に銃を握り、二人の少年は腰にそれぞれ違うベルトを巻いていた。

もう一人の少女のところに、一匹の蝙蝠が舞い降りた。

「^{ひか}司はまだ動いてない。今がチャンスだ」

蝙蝠・・・キバット・バット三世は、みんなに伝えるように少女に告げた。

「司・・・」

古代のベルト・アークルを腰に巻いた少年が、この荒野の向こうに

いる少年の名を呼んだ。

「終わらせる・・・何もかも」

【KAMEN－RIDE】

銃を握った少女は、一枚のカードを装填口に差し込み、前へ押し出す。

ゆっくりと上へ向けて、トリガーに指を掛ける。

それが合図になったかの様に、残りの少年少女たちも、それぞれの構えを取る。

少女たちと遠く離れた場所で、司と呼ばれた少年も、腰に巻かれたベルトのバックルに手に持ったカードを差し込んだ。

【KAMEN－RIDE】

風が吹き、大地が揺れる。

五人の少年少女たちは、それぞれの想いを胸に、一つの言葉を紡ぐ。

『変身!』

全てが破壊される戦場へと・・・

第一話 『Start the Decade』 (前書き)

原典のキャラがたくさん出てきます。また放送終了した仮面ライダーディケイドのキャラも出てきます。出して欲しいキャラがいたらじゃんじゃん言ってください。申し訳ない事に更新は遅目です。スイマセン。

第一話 『Start the Decade』

水野 みずや ツカサ 司は至って普通の何処にでもいそうな高校生だ。朝早くから起きて学校に行くのも怠いし、三年生だからって受験勉強に勤しむのも、正直、面倒臭い。

このまま、就職してしまおうか、と本気で考えている。そんな司にも、楽しみの一つや二つはある。

司は、写真部に所属している。彼にとっての、学校生活においての唯一の楽しみだ。いや、逆を言えばそれしか楽しみがないというのは、寂しいものがある。

とにかく、水野 司は今日まで普通の生活を送って来たのだ。今日までは……。

暖かなオレンジ色の光が漏れているドアを開けると、いつもの朝の様に、朝食を作る音が聞こえて来た。

香ばしい炒めものの匂いが、鼻を擽る。

司は、ブレザーの袖に腕を通しながら、椅子にすわる。「おはよう、義母さん。飯はまだ？」

「おはよう、司。もうちょっとで出来るから、真由と奈津美を起こして来てくれない？」

義母が、キッチンから顔を覗かせる。癖のある茶色まじりのロングヘアが現れる。

「もう降りて来た見たいだよ」

「ふわあ……おはよ、お母さん、お義兄ちゃん にい」

「お早う。わが麗しき母上と義弟 おとうとよ」

「義姉さん……いい加減、それには飽きた」

司は呆れながら、冷静にツツコミを入れる。

欠伸をしながら入って来たのは、真由。司と血の繋がらない妹だ。朝っぱらから、どこかの貴族のような台詞を言いながら入って来たのは、奈津美。これまた、司と血の繋がらない姉だ。

「さあ、みんな席について。朝ご飯が出来たわ。ほら、奈津美、そんなところでいじけてないで、さっさと席にすわる！」

奈津美が、渋々席に座ると母親は皆を見回し、掛け声を掛けた。

「はい、それでは皆さんいただきます。手を合わせて・・・」

「義母さん・・・俺達もう小学生じゃないんだから。こんなこと、恥ずかしくて出来ないよ。」 司は、苦笑しながら力無くうなだれた。

「ええ。だってだって、食べ物を粗末にするなって、おばあちゃんも言ってたしい」

「お母さん、おばあちゃんと会ったこと、無いでしょ」

黙々と、目の前の料理を口に運びながら冷たく言い放った。

「もう。皆、無愛想なんだから。」

いい年こいたお婆さんが、可愛いげに頬つぺたを膨らませる。まあ、結構な童顔なので似合わない事もないが。

「それより、早くしないと学校遅れちゃうよ」

真由は言いながら、せつせとご飯を口の中にほうり込む。熱いのか、時々、はふはふ言いながら食べている。司は時計を見て、慌て始める。

「うお、ホントだ。この時間はヤバイ」

司も、口におかずやらご飯やらを掻っ込む。

「あつ、今日は北岡先生の講義があったんだっけ」

こうしてはいられない、と言わんばかりに奈津美は、物凄い勢いで朝食を食べ終わり、

「行ってきまっす！！」と足早に家を出て行った。奈津美は司の一つ上で、町の中心にある国立大学に通っている。専攻は何なのか未だによくわからないのだが、何か古代文明的な資料を、奈津美の

机の上で見つけたので、そういう関連の学部にでも入ってるのであるろう。

奈津美は、今一人の先生に熱をあげている。確か、北岡 秀一という名前だったような気がする（司はその名前を聞いた時、どこかで聞いた事のある名前だと思った）。昔は超一流弁護士で、彼に弁護をしてもらうと黒が白になってしまふ、というほどのエリート弁護士だったそうだ。何故弁護士を辞めたのかは、教えてくれないらしい。前に、写真を見せてもらったが中々のイケメンだった。奈津美が熱をあげているのも、無理はない。

真由は、司の二つ下で、司と同じ高校に通っている。司も、その整った顔立ちと優しい性格のために、結構モテているのだが、妹からラブレターを配達される事はしょっちゅうある。でも、司は申し出を全て断っている。理由はわからないが、なぜか断ってしまうのだ。自分には、とても大切な人がいたような気がするのだ。

そんな司の惚気はどうでもよい。

真由は、ひそかながらも義兄である司の事が好きだ。こうして朝食を食べている間にも、司のひとつひとつの仕種に、胸がときめきを覚えている。

初めて司が家に来た時、真由は四歳だった。

彼の容姿は周りの男の子よりも遥かにずば抜けていた。学校に行くと、周りに女の子が寄って来て、質問攻めにあっていた。性格も優しく、勉強もでき、スポーツ万能。まさに美男子、という言葉がピッタリの小学生だった。しかし、知らない男の子がいきなり自分の家に住むという環境の変化に、真由は慣れる事が出来なかった。

しかし、ある出来事が真由の心を変える。

司が来て二年後。真由はその日、放課後の校庭で男子のいじめにあっていた。元々、気が強くない真由は男子に物をとられとも、強く言い出す事が出来なかった。しかし、今日取られた物はとても大事な物だった。死んだお父さんの形見、万年筆だった。普段は気の弱い真由だったが、今日は抵抗を強くしていた。

「やあゝい。お前、小学生なのに万年筆なんかもってんの」

「気取ってんじゃないのおゝ」

形見を奪った男子は、ふざけて真由の周りを走って回る。

「返してよ！それはお父さんの大事な形見なんだから！」

「なあんで形見持ち歩いてんだよおゝ」

「無くしても知らないぞおゝ」

男子は調子にのって、手に有る万年筆を茂みに投げるふりをする。

「やめて！」

真由は泣きそうになる。

「うわあ、泣いてやんの」

「だっせー」

げらげらと男子は笑う。真由は、徐々に顔が歪んでいった。それに気付いた少年たちは、余計に囃し立てる。

「うわあ、泣かしたあ。しらねーぞ、俺」

「ええ、僕のせい？泣く奴が悪いんじゃない——」

そこで少年の声は途絶えた。地面を転がっていく少年と、振り切った右足が、真由の眼に写った。

「男がやってはいけない事が二つある——」

右足の持ち主である、先程の少年たちより少し背が高い少年は、けった足を綺麗に揃えて、決め台詞を言い出した。

「女を傷つける事と、食べ物で粗末にする事、ってな」

その瞬間に、真由は司の事が八年間頭から離れなかった。

「行ってきたーす」

「ふいってひまふ」

司と真由は、——司は口にご飯を詰め込んだまま、家を出た。

司は、今日の授業について考えていた。あ、今日現代文あったっけ。予習やってねえ、どうしよう。あの先生厳しいんだよなあ。

などと考えていると前を歩いていた真由が急に止まったので、危うくこけそうになった。

「っと、何やってんだよ真由。危ないじゃ——」

そこまで続けて、真由がすぐそばにあるビルの上を見ている事に気が付いた。

「何、見てんだ？」

「——あれ」

何？

と真由は空の一点を指差した。そこには銀のオーロラのカーテンがあった。

「なんだ？」

司は、真由と同じようにビルの上に注目した。すると、カーテンが後ろに下がっていき、人影が現れた。サングラスをかけ黒いスーツを着ている。やがてサングラスを外すと、ゆっくりと司の方へと視線を向けた。

「……ディケイド」

（いや、俺は司なんですけど…）

「いや、『世界の破壊者』」

は？

と、司は頭が混乱した。

そんな事はお構いなし、と黒づくめの男は言葉を続ける。「世界の崩壊が始まっている」

と、ビルの屋上から男は飛び降りた。そして、何事もなかったように司達の前に降り立つ。

「世界を救ってくれ」

ええ、何この急展開？

司と真由は互いに顔を見合わせて、とりあえず身元確認をすることにした。

「あんた、一体何者だ？」

「ちよっと、お兄ちゃん失礼だよ」

「じゃあ、どうやって聞けってんだよ」

「もっと丁寧にさ…こう」

そんなやりとりをしてる間、男は顔色ひとつかえず、名を名乗った。

「俺の名は…剣崎一真」

その瞬間から、廻り始めた。

『世界の破壊者』

水野 司の運命が……

第二話 『交錯する世界』 (前書き)

登場ライダー

《仮面ライダーガイ》

《仮面ライダーゾルダ》

第二話 『交錯する世界』

「剣崎：一真さん、ですか」

「えっと、兄になにかと用でも？」

司が名前を反復して、真由が一真、という男に用件を聞いた。

「だから、世界を救えと……」

そこで一真は言葉を切り、納得した、という風に何度か頷いた。

「成る程、記憶を失っているという訳か……向こうの《ディケイド》と同じだな」

向こうのディケイド？

と、司と真由は頭の上に疑問符を浮かべた。

「まあ、いい。」

そういうと、一真は懷から何かを取り出した。

それは、白いブックホルダーのようなものと、同色の、中心に丸いガラスが張り付けてある四角いバックルのようなものだった。

それらを、司に渡す。

「……何ですか、これ」

司はそれらを不思議そうに見つめ、それから、再び一真に視線を戻した。

「さっきも言った通り、君は《仮面ライダーディケイド》、又の名を《世界の破壊者》。君はこの世界を救うために、九つの世界を巡り、九人の全てのライダーを破壊しなければならない」

全てのライダーを……

…破壊する？

「あの、一体どういう……」

「全てはこれからわかる……全てな」

そういうと、いまだに混乱している司を無視し、すたすたと歩いて行く。

「あなたも……一真さんも《仮面ライダー》ですか!？」

司は、去っていく背中大声で尋ねた。

一真は立ち止まり、体を少しこちらにむけ、顔をこちらに向けて、もう一度、その名を名乗った。

「俺の名は、剣崎：一真」

そのあとに、先程は言わなかった《その名》を告げる。

「又の名を：仮面ライダー《ブレイド》」

一真は、曲がり角を曲がった。

追いかけるようにして、司がその角をまがると、一真の姿は跡形も無く消えていた。司の手には、さっき渡されたホルダーとバックルが握られていた。

「キヤアアア!!」

真由の叫び声が耳に入り、呆然と立っていた司は、はっとして声が聞こえた方に走って行った。

「真由!？」

駆け付けて見ると、真由は異形の怪物達に、壁際に追い詰められ恐怖で震えていた。

「お兄ちゃんっ!!」

真由は必死の形相で、司に助けを求めている。

「っそ!! すぐに助けるからな!!」

司は、真由に叫ぶと目の前の怪物達を睨んだ。

「お前ら：俺の可愛い妹に手エ出してんじゃねえよっ、と!」

司は、勢い良く怪物達に飛び掛かる。

「ウガアアッ!!」

怪物は、先程まで真由を捕まえていた触手を、真由から離して司に思い切り叩きつけた。

「がああっ!？」

司は、10 m程飛ばされ、地面をゴロゴロと転がった。

「ッ痛!!」

「お兄ちゃんっ!!」

真由は泣きそうな顔で、兄に向かって叫ぶ。

「ッこの!!」

真由は、怒りをあらわに怪物に向かって、そこらへんに落ちていた棒を振りかざす。

「キシヤアアッ!!」

別の怪物が、真由に歪んだ拳を放った。ジャストミートで真由の横腹を射ぬき、そのまま貫通させる。

ズボォッ、という恐ろしい音が、辺り一面に響いた。

「真由……?」

身を起こした司は、真由の体を一本の歪んだ緑色の腕が貫いているのを見て、驚きと悲しみと恐怖が混ざった顔をした。

「真由ウウウウウッ!!」

司の叫びが、どこまでも蒼い空に響き渡った――。

北岡秀一は、《イケメン》、《秀才》、《メガネ》という、奈津美にとって三種の神器を備えている、完璧大学教授だった。

その甘いルックスを振り撒き、女学生から多大な支持を受けていた。廊下を通れば、女学生からの黄色い声援が上がり、講義堂に入れば、またもや黄色い声援が彼を総出で迎える。しかし、その女学生からの人気振りからか男からは極端に嫌われていた。すれ違う時も、ろくに挨拶もせず、ひどい生徒では、睨んで陰口を叩くものもいる。北岡は、余り気にしてはいない用であったが、助教授でほぼ側近に近い由良吾郎は、怒りを静かに押し殺していた。時々、勘忍袋の緒

が切れ、由良が切れそうになった時は北岡が、

「気にしないでよ、吾郎ちゃん。野郎なんかにはなされても悔しくともなんともないからさあ、ね？」

女の子に悪口言われるのは、ちょっと堪えるけどねえ、と呑気なことを言って、由良の気を鎮めた。正直、由良も北岡にはいらつくこともあるが、長年の付き合いなのでその辺は慣れている。

ともかく、そんな北岡の甘いマスクが凛々しい顔になったときなど、もう失神ものだ。今がその瞬間だった。

「ど、どうしたんですか先生」

奈津美は、危うく倒れかけそうになりながら30cm上にある北岡の顔を見上げた。

「始まったか……」

北岡は、依然真剣な顔のまま小さな声で呟いた。

奈津美は、良く聞こえず小さく首を傾げた。と――

キイイイイ……

キイイイイ……

どこからか、奇妙なノイズ音が北岡と奈津美の耳に入ってきた。

「？ナニコレ……？」

奈津美は不思議そうに顔を傾げる。

一方の北岡は、近くにある窓ガラスや鏡など、自分達の姿が写っているものを慌ただしく確認していく。そこにあるのは左右対称になっている自分がいるだけ……。

と、北岡は一枚のガラスの自分達が大きく歪んでいることに気がついた。そう遠くない、わずか5m先の窓ガラス。

――端から何やら、黄金の角のようなものが見えた。

「危ないッ！」

突然、北岡は奈津美に覆いかぶさり、その身を守った。

「え？先生？ちょっと！恥ずかしい……こんな所で……」

奈津美は興奮しすぎて、パニックに陥る。しかし、北岡の肩越しに見えたものを見て、言葉を失う。

パリーーン、という音とともに先程の窓ガラスが粉々に砕け、それとともにメタリックのサイが廊下に飛び込んで来た。着地したサイは、鼻息を荒くしてゆっくりと身構える。

北岡は、振り返りサイを目出確認してから自分の下で怯えている奈津美に声を掛けた。

「大丈夫、先生が守ってあげるから」
ね？、とお得意の甘いマスクで奈津美を慰める。

「は………ハイ！！」

その甘い顔に、一気に復活した奈津美は立ち上がって、銀と金のメタリックザイに対峙する。

「あゝあ、先生ってやっぱムカつく」

サイの後ろから声が掛かり、北岡もゆっくりと立ち上がる。

声の主は、人のようなサイだった。頭に一本角を生やし、顔には騎士のような鉄格子が架かっている。腰に、灰色の機械的なベルトを巻き中心部分には、メタリックサイを模した絵が描かれているデッキケースがはめ込まれていた。

「そうやっていつも女をたぶらかしてさあ、何様のつもり」

サイ人間は、北岡を毒づきながら、ゆっくりとサイの前に出る。

その言い草にムカツときた奈津美は、前に飛び出しサイ人間に向かって怒鳴った。

「ちよっと！あんたこそなにもんよ！！私の先生に罵詈雑言は許さないわよ！！」

「俺はいつから君のものになったんだい？」

北岡は、奈津美の言葉に少し恐怖を覚えた。

サイ人間は、はぁーッ、と溜息をつく。

「そうそう。この態度。先生に絡んだ女はみーんなこうなる。ウザイことこの上なし」

まあ、いいや、とサイ人間は諦めたように肩を竦め、奈津美に向き直った。

「いいよ、教えてやる。ぼくの名は仮面ライダー《ガイ》。その先

生の元仲間で、今は敵……いや、違うな。最初から敵だったわけ。ただ、同じ《世界》にいただけで、その《世界》で争っていたら仲間とは言えないか」

ねえ、先生？と、呼び掛けられ、北岡は溜息をつき、呆れたように形のいい眉をゆがめた。

「成り下がりのゲーマーに仲間なんて思われたくないなあ。俺が仲間とっているのは、吾郎ちゃんと城戸と秋山だけだ」

フン、と仮面ライダーガイと名乗ったものは鼻を鳴らして、北岡に指を向けた。

「お前のその態度もウザいんだよねえ——まあ、いいや。取りあえず君を殺してから、計画を実行しないとね」

「フッ、俺と戦るのか？痛い目みるぞ」

「それは、こっちの台詞だ。ぼくは《あの人》に蘇らせて頂き新たな力を手に入れた——もう、前のぼくじゃないってことを思い知らせてやるよ」　そういうと、腰のケースから一枚のカードを引き抜いた。黄金の翼が描かれ、蒼い風が渦巻いている。

「そのカードは……！！」

北岡は驚愕に満ちた顔をする。

「なんでお前が《サバイブ》を！！《疾風》のカードは秋山——《ナイト》しか持っていないはずだ！」

「これがぼくの新たな力さ。この力を《あの人》がぼくに与えた——このカードでぼくは最強の戦士となった！！」

ガイは、恐竜のような咆哮を世界に轟かせた。

「もう誰にも負けない……もちろん先生にもね……」

そういうとガイは、指でカードを弾き、右肩に付いている挿入口へカードをいれ、左手でカバーをスライドさせて閉めた。

【SURVIVE】

電子音が流れ、ガイの身体を蒼い風が包み込む。

次に現れたのは、変わり果てたガイの姿だった。角は大きく伸び、格子は金色に染まり、体のあちこちに金や青の装甲が張り付いていた。ガイの周りを風が渦巻いている。

「さあ、先生。どっちでやる？こっち？それとも《あっち》」

ガイ《サバイブ》は、窓ガラスを指差した。

北岡は無言でガラスの前に立ち、ズボンのポケットから何かを取り出した。緑色のデッキケースで中心に黄金の闘牛が描かれていた。左手に持ち、勢いよくガラスの自分に向かって突き出す。

ガラスの表面に灰色のベルトが現れ、回転しながら北岡の腰に巻き付く。

北岡は、勢いよく右拳を右肩に持って行った。

「変身！」

叫んで、ベルトにデッキケースを差し込む。カチャツ、という音がして綺麗にはめ込まれる。赤いランプと闘牛の紋章が同時に光り、北岡の周りから白いビジョンが現れ、北岡の身体に集まって行く。

パキーン、という音とともに現れたのは北岡ではなく、緑色の騎士だった。

右腰に銃を提げ、額から二本の触覚が飛び出している。顔にはやはり、横向きの鉄格子が下りていて、ガイと違い、赤い光が行ったり来たりしている。

「久しぶりに見たね、先生のその姿。仮面ライダー《ゾルダ》さん」
ガイサバイブは楽しそうに言った。

「ホント、久しぶりだなあ、変身するの。ま、調子は昔のまんまだけどね」

ガイサバイブとゾルダは顔を見合わせると、静かに窓ガラスに向いた。

「それじゃ、行きますか」

「後悔するなら今のうちだよ、センセ」

ハッ、と北岡は不適に笑う。

「それはこっちの台詞だ」

そして北岡は走る構えをとり、勢いを付けてガラスに突っ込んだ。

「ハッ！」

ゾルダの身体が、ガラスに吸い込まれた。

「ホント…ウザイ」

続いてガイサバイブも、ガラスに突進する。

「ふッ！」

彼の身体も、ガラスに吸い込まれて行った……。

「……って、私完璧に忘れてない!？」

可哀相な奈津美であった……。

「先生のバカァ————!!」

第二話 『交錯する世界』 (後書き)

ども！サバイブです！いやあ、小説書くのって、なかなか難しいですね。僕は余り文章力がないので、ちよつと緊張します(汗)。誤字脱字があったら指摘をお願いしますm(・|・)mこういうのってなかなか自分で気付けないうもんなんですね。今後とも、『仮面ライダーNew Legend』をよろしくお願いします！(へーへ)

第三話 『Break the world』(前書き)

登場ライダー

・仮面ライダーディケイド

・ディケイド カブト

・ディケイド ファイズ

・ディケイド 響鬼

・仮面ライダーゾルダ

・仮面ライダーガイ《サバイブ》

第三話 『Break the world』

「真由ウウウウッ!!」

司の叫び声が、果てしない空へ響き渡る。

怪物は、真由の腹から腕を引き抜き、標的を司に定めた。

他の怪物達も、ぞろぞろと司の方へ歩み出す。

司は俯き、前髪が顔を隠した。

「……さねえ」

静かな声で、言葉を紡ぐ。

「…許さねえッ!」

司は勢いよく立ち上がり、手に持ったバックルを腰に当てた。左側からベルトが飛び出て、反対の右側に装着され、司の腰にフィットした。

ブックホルダーを開き、綴じられているカードの中から、一枚取り出した。

《DECADE》

ブウウウン、という音と共にカードを引き抜く。そのカードを右手に持ち、前に突き出す。

司は、カード越しに怪物を睨み、口を開く。

「変身!!」

カードをバックルに差し込み、左右の出っ張りを中心に押す。

【KAMEN—RIDE. DECADE!】

すると、司の周りに九体のビジョンが現れ、司に集まっていく。バックルの中心部分から、複数の赤いプレートが飛び出し、顔面に突き刺さった。

中心のプレートの先端が光り、それと共に、身体にマゼンタ色が広がっていく。

そこに立っていたのは、司とは全く違う、異形の人型のものだった。

緑色の大きな複眼、マゼンタと白と黒が混ざったボティ、顔面に突き刺さった複数のプレート……どれを取ってもこの世のものとは思えない、ましてや、これが司と同一人物だとは到底思えない、そんなものが司の居た場所に立っていた。

「ギギ……」

怪物は低く唸ると、脱皮したように外殻が剥がれスマートなボディが現れた。

「《ワーム》か……」

司は呟き、しかし、何故自分がこれを《ワーム》だと知っているのか疑問に思ったが口には出さなかった。

「ウゲエエエツッ!」

怪物——《ワーム》は雄叫びを上げ、物凄いスピードで走り去って行った。

「チッ——ちょこまかと!」

いらついたように呟き、司はホルダーからもう一枚カードを取り出し、先程と同じ様にカードの効果を発動させる。

【KAMEN—RIDE. KABUTO!】

司の身体を赤い装甲が包み、顔にあるカブトホーンがゆっくりと

立ち上がる。

【Change BEETLE!】

先程とは違う電子音声が流れ、そのライダーのタイプを告げる。

「ギィエエッ!」

ドガン、という鈍い音と共に腕を叩きつけた柱が砕け散り、破片が司へと向かう。

《仮面ライダーカブト》に二重変身した司は、その瞬間に新たなカードを装填し、効力を発動させる。

【ATTACK-RIDE. CLOCK-UP!】

【Clock Up!】

二種類の電子音声が流れ、司は《ワーム》と同じ高速の世界へ入っていた。

「ハッ、ハッ!」

ホルダーから、柄と刀身をのばしソードモードにきりかえると、動きについて来れずスローモーションで落ちて行く瓦礫を斬り飛ばし、《ワーム》達にその刀身を斬りつける。

「フンッ、ハアッ、ヤアッ!」

「ギアアッ!?!」

「グアアッ!?!」

「ガアアッ!?!」

四体の内、三体に致命傷を与えその場で爆死し、緑色の炎を上げる。

「ヒギアアッ!」

最後の一体が、拳を振り上げてこちらに突っ込んでくるのを目の端で捉え、司は三枚目のカードを装填し、発動させる。

【FINAL—ATTACK—RIDE. KA KA KA KA
ABUTO!】

【Rider Kick!】

二種の音声の後に、《カブト》に変身した司の右足に電撃がほとばしり、エネルギーがチャージされる。

そのまま、カウンター回し蹴りを最後の《ワーム》に浴びせる。

「ギャアアッ!」

当たった瞬間に爆発し、後には緑色の炎しか残っていなかった。

「……なんで俺、このカードを選んだ……?」

そう呟く司の手には、先程装填したカード——《カブト》のカードが握られていた。しかし、先程とは違い《カブト》の絵柄が色を失い半透明になっている。まるで、力を失ってしまったかの様に。

「……ッ! そうだ、真由!」

司は、重傷の真由を思い出し倒れている彼女の傍へ駆け寄った。

「真由、しっかりしろ! 真由ッ!」

真由の肩を抱き、肩を揺さ振る。出血が酷く、真由の口からはヒュー、ヒューという弱々しい息が漏れていた。

「くそッ……どこかで治療しないと……!」

司は、真由を俗に言う『お姫様抱っこ』をしてどこかの病院へ、運ぼうとする。

なぜかその瞬間、真由の口が幸せそうにニタア、と笑ったのに司は気付かない。

「くそッ、こんな所にまで!」

司達は病院の前までたどり着いたものはいいいものの、そこには灰

色の怪人たち——《オルフェノク》がたむろしていた。

「畜生、一体この世界はどうなってるんだ!？」

司が悪態をついたとき、《オルフェノク》がこちらに気付き、歩み寄ってくる。

「：上等だ、やってやるよ」

変身を解いてない司——ディケイドは、真由を安全な場所に降ろし、一人敵に立ち向かって行く。

ディケイドは新たなカードをホルダーから取り出し、バックルに装填し発動させる。

【KAMEN—RIDE. FAIZ!】

【Complete.】

司が身につけているベルトの音声と、違う種類の音声が続番に流れた後、ディケイドの身体に赤いフォトンストリームが模様を描いていく。やがて、激しく発光したかと思うと、銀色のアーマーに身を包み、ギリシャ文字の《Φ》を象った黄色い大きな複眼をした戦士——《仮面ライダーファイズ》にへと姿を変えた。

《仮面ライダーファイズ》へと姿を変えたディケイドは、ホルダーから一枚の、バイクが描かれたカードを取り出し、それを《Φ》が描かれた方に裏返してバックルに差し込み、能力を発動させる。

【ATTACK—RIDE. AUTO—BAZIN!】

ケータイのブッシュ音が鳴り響き、駐車場にあったバイクの前に《Φ》のマークが現れ、バイクに向かって手前に下がる。通過した部分が銀色のバイクに変わり、マークをくぐり終えた瞬間に、身長約2m程の人型ロボットに変形し、背中のブースタを作動させ、《オルフェノク》がいる所へ突っ込んでいく。

「ウオワアアア!？」

「グアアッ!？」

人型ロボット——オート・バジンが撃った機関銃を浴びて、《オルフェノク》達は苦しそうにもがく。

その隙をつき、ディケイド《ファイズ》はオート・バジンに駆け寄り、左ハンドルであった部分のスイッチを押しながら、本体から左ハンドル引をき抜いた。丸く、長い刀身がその身を朱く光らせる。
「——ッ、ヤアアアッ!」

ファイズエッジを右手に構え、ディケイド《ファイズ》は《オルフェノク》の群れへ、突っ込んでいく。

「フンッ! ハアッ! セヤッ!」

斬りつける旅に、バチイイッという音がして、灰色の身体に致命傷を与えてゆく。

「ギニヤアアアッ!」

残った一体が、虚しくも銀色の戦士にがむしゃらに突っ込んでいく。

それを華麗に身を翻してかわし、ディケイド《ファイズ》は、仕上の一枚をバツクルに差し込む。

【FINAL—ATTACK—RIDE. F A F A F A F A I Z!】

【Exceed Charge.】

二つ目の音声と共に、フォトンストリームを伝って最大までチャージされたエネルギーが右腕に集結してゆく。

「ッハアッ!」

ディケイド《ファイズ》は、右手に持ったファイズエッジを構え

て、下から上へと切り上げて斬撃を《オルフェノク》に向かって走らせる。

「ア……ガ……ガ」

斬撃は円筒形のロックオン枠となり、怪人の動きを封じる。

「ハアアアアア……」

腰だめに構えて、そこから一気に走り出す！

「ヤアアアアッ！ハアアッ！」

上下と怪人の身体を斬りつけて最後に後ろに向き振り切る。

《オルフェノク》は青白い炎を上げて燃え、最後に大きな空集合のマークが灰の上に浮かび上がった…。

「ハア…ハア…ハア、真由、太ったか？」

背中で気を失っている真由に、変身を解いた司は、息を乱し、眉をしかめながらおどけるように話し掛ける。

「もうちよつと…もうちよつとで家だぞ…頑張れよ…真由」

励ますように、真由に話し掛ける。

先程、玄関前を《オルフェノク》に占領されていた病院は、中も酷い荒れ様だった。数匹の《オルフェノク》達が中に潜入していて、患者や医者を殺していた。

そいつらを《ファイズ》の力で倒し、必要な薬や包帯をもって、司は病院をあとにした。本当なら、埋めるなりなんなりして死体の人達を吊ってあげたいのだが、瀕死の真由を放って置くわけにもいかず、渋々その場をあとにした。

這いつくばる様にして家にたどり着いた司は、自分の部屋に行き、そこにあるベットに真由を寝かせて服をめくった。本人の了承なしでめくるのはなんだか気が引けたが、緊急事態なので仕方ないと、腹を括った。

「し、失礼します……」

恐る恐る、Tシャツの端を掴み、脇腹の部分をめくりあげてゆく。
「……ッ！ウグッ？！」

そこから視線を外し、吐きそうになるのを堪えて、もう一度、ゆつくりとそちらに顔を向ける。

「ツくっそ……思ってたよりも大分酷い……」

顔を向けるのが精一杯、という感じで、司は声を押し出すように呟いた。

真由の脇腹は、内蔵が刎れ骨が飛び出し、胃が見えかかっていた。これでは、応急処置だけでは持ちそうになかった。案の定、真由の息は先程よりも弱々しくなっていた。

「クソッ……真由……」

司は、真由を守れなかった悔しさとこれから妹を失う恐怖感で、身体が震えていた。

「……つくしよおおおおおっ！！」

司は、この世界に響き渡るぐらいの大声で哭いた。
自分の無能さに。

真由への申し訳なさに。

「はあ、はあ……！　そういえば」

涙も枯れ果てて、ようやく心が落ち着いた頃、司はある重要なことに気付く。

「……義母さんは？」

そういえば、司達が家に帰って来てからまだ一度も見えていない。今の時間帯ならまだ家に居てもおかしくないのに。

「それに義姉さんも……皆無事なのか？」

まさか……と司の中に一つの最悪のイメージが浮かぶ。

「もう——皆殺されて——」

バリーイイイ————ン

それを口にだそうとした瞬間、妖怪が窓を突き破って司達の家に侵入してきた。

「なっ——」

司は余りのことに驚き、自分を庇う事が出来なかった。真由の身体に無数の硝子が突き刺さり、その衝撃で真由は息絶えた。

「真由っ?! そんなっ?!」

司の顔が、悲しげに歪み、次に怒りへと変わり妖怪達を睨みつけた。

「てめえら……よくも真由——」

そこまでいって、司は妖怪の一匹が何か口に加えているのに気付いた。

それは…人間の手だった。

そこまでならまだいい。その手の薬指にはキラツと光るシルバーリングがつけてあった。

—この指輪はねえ、お父さんが私にプロポーズした時にくれた指輪なのよお—

幸せそうにデレデレしながら、そう義母が教えてくれたのを司は思い出していた。

その時見せてもらった指輪と、今、目の前に見える指輪とは認めたくないほど、よく似ていた。

「……くも」

震えて涙を流しながら、司は腹の奥から声を出した。

「よくも義母さんをつ——！！！」

【KAMEN—RIDE.】

【DECADE!】

司は怒りのままに姿を変え、その大きな複眼で、目の前にいる妖怪——《魔化魍》を睨み付けた。

「おまえ達は……死んでもゆるさねえ……！」
ライドブッカーから、カードを一枚引き抜き、バックルに装填する。

【KAMEN—RIDE.】

開いているのを中央におし戻して、再び《変身》する！

【HIBIKI!】

ディケイドの額に、鬼面が浮かび上がり身体を青紫色の炎が包んで行く。

「————セイヤツ！」

掛け声と共に、腕が振り払われ、それと共に炎も吹き飛び変身し

たディケイドの姿が現れる。

———D響鬼———

【ATTACK—RIDE. ONGEKI BOU—REKKA!】

音声と共に掌を、パンパンッと合わせて、背中から《音撃棒・烈火》を取り出す。先の石に鬼火が宿り、灼熱の色に燃える！

「——うおおおおあああああっ！！」

音撃棒を振りかぶりながら、外にいる《魔化魍》軍団に、司は身を投げて戦い始めた——。

一方、ミラーワールドでは…。

「フンッ、そおらっ！」

「クッ、ハアアッ！」

緑の騎士と青と黒銀の騎士が、死闘を繰り広げていた。

「ヨッ、ほいつ！」

「うぐっ?! がはっ!!」

優勢なのは《ガイサバイブ》のほうだった。《疾風》のカードで強化された《仮面ライダー》は13人いる中でも最強の力を得ることになる。

《仮面ライダーゾルダ》は、お得意の遠距離系爆発型の攻撃が全く歯が立たず、苦戦を強いられていた。

「あゝあ。ぜえゝんぜんつまないやあ。先生、弱くなったんじゃないの？」

ゾルダを《ストライク・ベント》で吹っ飛ばしたガイサバイブは、余裕しゃくしゃくといった感じで、右手についた《ストライク・ベ

ント》の角を撫でた。

「前はもつとしつこかったのになあ、何度倒しても立ち上がるし。やっぱブランクってゆーのがあんのかなあ」

ハハッ、とガイサバイブは鉄格子で隠れた口から嘲るような笑いを漏らした。

「昔みたいにはいかないかあ、ね。き・た・お・か・セ・ン・セ・イ」

あっはは！、と今度は心底可笑しそうに身体をのけ反らせて大声をあげて笑う。

「……調子に乗るのもいい加減にしてよ」

瓦礫に身を沈めたゾルダは、ゆっくりと立ち上がり、右手に持った機召銃・マグナバイザーのマガジンスロットにカードを装填して武器を召喚する。

【SHOOT VENT.】

無機質な音声の後に、ゾルダの両肩に巨大な大砲が取付き、照準をガイサバイブへとあわせた。

「――！！」

狙いが定まり、その直後、二つの大砲から弾丸が飛び出し、真っ直ぐガイサバイブへ飛ぶ。

「ハッ、ちやちな攻撃」

ガイサバイブは鼻で嘲笑うとバックルのカードを一枚取り出し、左肩についている召喚機、メタルバイザーに投げいれ、効果を発動させる。

【CONFINE VENT.】

音声が流れた直後、ガイサバイブへと飛んでいた二つの弾丸が消え去り、ゾルダの両肩についていた大砲も消えていた。

「忘れちゃったのお？ 僕がこーゆーカードもってるの」
フッ、とガイサバイブは鼻で笑う。

「……………」

【STRIKE VENT.】

ゾルダは動じず、無言のまま新たなカードを装填し、武器を召喚する。ゾルダの両手に、バツファロー型モンスター、《マグナギガ》の角を象った、《ギガホーン》が取り付けられる。

「ハアア―ヤアアッ!!」

ゾルダは武器を構えて、ガイサバイブに向かって勢いよく走り出した。

「だからあ、何度やっても同じだって」

【CONFINE VENT.】

ガイサバイブは二枚目の《コンファイン・ベント》を使い、ゾルダの武器を消し去ってしまう。

「学習能力がないのお？ ばかだなあ、全く」

「今のが最後なんだろう？」

【SHOOT VENT.】

ゾルダは不敵に笑い、もう一枚の大砲のカードをベントインする。すると、ゾルダの右側に大砲が現れ、それをキャッチする。

トリガーをひき、大砲から一発の弾丸が発射される。

「なっ?! うわあああ!!」

余裕をこいてたため、守りのカードも発動できず、ガイサバイブに直撃する。

「ふう…………でも、これで終わりとは思えないからね。念のため…」

そう言う、ゾルダは新たなカードを取り出し、マグナバイザーにベントインする。

【FINAL VENT.】

音声のあと、地面からマグナギガが浮き上がって来て、両腕の大砲を構え、胸のアーマーが開き格納されていたミサイルやレーザー砲が露になる。ゾルダはマグナギガの背中にマグナバイザーを装着する。いつでも引けるようにトリガーに指を掛ける。

ガイサバイブがいた場所は、砂埃が舞い上がっていて、奴の安否が解らない。と――――。

【FINAL VENT.】

ゾルダの発動したカードと同じ種類の音声が聞こえ、メタルゲラスの肩に乗り、地面と並行になりながらガイサバイブがこちらに突っ込んでくる。手にはメタルホーンがつけてあり、当たってしまったら再起不能の威力を持っていた。

「死ねえエエエえ!!」

叫びながら徐々に距離を詰めてくる。

ゾルダは、フツと鼻で笑い、静かに人差し指に力を込めた。

「俺は、もう二度と死なない…」

カチ。

全ての破壊兵器が、ガイサバイブに集中する。

「う、うわああああっ?!」

ガイサバイブは先程までの勢いを無くし、身体に至る所が爆発していく。ゾルダの必殺技、《エンドオブワールド》は威力が強すぎ

る為、周りも巻き込み当たり一体が爆発する。

やがて、この場所に残ったのはゾルダ只一人となった……。

「もう、二度と………」

第三話 『Break the world』(後書き)

次回、仮面ライダーディケイドNew Legend!

「爆裂強打ア!!」

「なんなのよお、これはあ?！」

「もう忘りたい…こんな世界」

「ならば…忘れさせてやろう」

「結城……丈二?」

「お前は…仮面ライダーだ」

第四話 『失われた記憶』^{こころ}

全ての力を、解き放て——！！

第四話 失われた記憶（こころ）（前書き）

登場人物&ライダー

・水野司

《仮面ライダーディケイド》

・水野奈津美

・結城丈二（劇場版）

《???》

・北岡秀一（龍騎）

《仮面ライダーゾルダ》

（ ）内は原典名です。

第四話 失われた記憶（こころ）

「ギャアアアッ!!」

ある廃場に、《魔化魍》と呼ばれる妖怪達が暴れまわっていた。そこら中のものを壊し、その快感を喻ぶように、ギャアギャアと咆哮をあげていた。と――。

「ギニャアアアッ!？」

突然、その中の一匹が叫び声をあげ、爆発死した。周りの《魔化魍》達は驚いたように飛び上がり、何が何だか解らないといったように辺りをキョロキョロと見回した。

すると、どこからかシュルルルルという音と共に、無数の火の玉が飛んで来て、《魔化魍》達に直撃した。直撃した《魔化魍》達は、跡形もなく爆死した。

「フン、ハアッ!!」

《魔化魍》達と数百メートル離れたところで、ディケイド《響鬼》は先端に鬼火の点いた《音撃棒・烈火》で《鬼棒術・烈火弾》を連発していた。全て《魔化魍》達のいる方向へとんでゆく。

「――ツヤアッ!!」

少し溜めて打った《烈火弾》が全ての《魔化魍》達にヒットし、一気に排掃する。が、空を飛ぶ《魔化魍》が一匹残っており、ディケイド《響鬼》に向かって襲いかかってくる。

「……………」

ディケイド《響鬼》は、それを無言で見詰めて、ライドブッカーから必殺の一枚を取り出しバツクル、《ディケイドライバー》に装填する。

【FINAL—ATTACK—RIDE.】

バックルを両手で閉じて、必殺技を発動させる！

【H I H I H I B I K I !】

するとディケイド《響鬼》は、何処からともなく《音撃鼓・火炎鼓》を取り出し、それを《魔化魍》へと投げ付けた。すると、掌サイズだった《音撃鼓》が大太鼓の大きさまで大きくなった。

「ハアアッ！！」

ディケイド響鬼は、その《魔化魍》の所まで飛び上がり、《烈火》を構えた。

「音撃打、爆裂強打アッ！！」

声と共に《音撃鼓》に《烈火》を二回叩きつける！

————爆裂強打————

ダンダンッと音撃の音が響き渡り、《魔化魍》の身体中が震撼する「ギイイイアアアッ！！」

《魔化魍》は断末魔をあげながら、地面に墜落していった……………。

「ちよっとお、なんなのよこれはあ？！」

奈津美は、未だ大学の中をうろうろしていた。《ミラーモンスターⅠ》が、学校中で暴れ回り、なかなか身動きが取れないでいるのだ。「北岡先生も私ほったらかしにして鏡の中、入っちゃうし……ていうかなんで鏡の中に入れんの?! しかもその中で戦ってたっぽいし……なんか、凄い爆発してたし……ああ、もう意味解んない!! 取りあえずこっから出よ!!」

一人で落ち込んだり、怒ったり、イロイロ忙しい奈津美である。(もう、ホントに意味解んない! どうなちゃってんの、この世界は!?)

などと考え事をしていると、突然、すぐその窓から北岡が飛び出してきた。

「ふー、やれやれ。流石に《サバイブ》相手だと結構疲れるなあ」
あゝ、凝った凝ったと北岡は肩を回して、ちらと奈津美の方を見た。

「…あれ、まだいたの」

早く逃げろよ、といった感じの視線をこちらに投げってくる。

「だって、あれが……」

奈津美は焦りながら、向こうにいる《ミラーモンスター》達を指差した。

「なあゝるほど、そっかそっか。全くしょうがない」

やれやれという風に北岡は首を横に振り、奈津美に向き直って優しく言った。

「ここは俺に任せて、弟さんのところにいつてあげな」

「え? ど、どうしてそれを……」

少なくとも北岡には自分の家族構成を教えたことはない。

「俺は、司とはちょっとした関係があるんだ。それが何なのかは言えないけどね」

北岡は小さくウィンクをした。

「多分、司は今頃途方に暮れているだろうから、行って慰めた方がいい。場所は君の家のすぐ近くにある廃場だ」

そういうと、北岡はカードデッキを取り出し、窓ガラスに向ける。ガラスの中にベルトが現れ、北岡の腰に巻き付く。

「今は君がたった一人の家族だ。彼を送り出すのは君しかない」

「?それってどういう……?」

北岡の言った事が理解出来ず、奈津美は首を傾げる。

「細かい事は気にしないでいい。とにかく、今は司のところに行つて、彼を導いてやるんだ。今、君がすべき事はそれだけだ」

そういうと前と同じ動作をして、合図をかける。

「変身!」

カチャッ、という音がしてカードケースがバックルに綺麗にはめ込まれる。バックルのランプが赤く輝き、北岡の身体に鏡から出たビジョンが集まって行く。

パキーン、という音ともに《仮面ライダーゾルダ》が北岡のいた場所に現れた。

「っしゅあ!一丁やったるか!」

北岡は声を出して気合いをいれると、《ミラーモンスター》の群れへ身を投げていった。

「……………先生」

惚れ直した、という言葉は飲み込んで、奈津美はさっき北岡に言われたように司の元へ行くべく、その場所をあとにした。

「……………」

変身を解いた司は、先ほどまで戦っていた場所で呆然と立ち尽くしていた。司に倒された《魔化魍》達は枯れた木の葉となり、辺りに散乱していた。司の足が僅かに動くだけで、カサカサと音を立てる。

この場にいる人間は、司ただ一人だった。回りにいるのは死体に

なってしまった人間だけで息をしてるのは、司だけだった。死体には、恐らく《魔化魍》にやられたのであろう、酷い裂傷の痕があった。

「……真由……」

司は、もう死んでしまった妹の名を呼んだ。

この世界に、もう真由はいない。

そう考えるだけで、胸がくるしくなり、吐き気を覚えた。自分の無力さに腹が立つ。

「……つくしよおおお!!」

司は跪ずき、地面をおもいきり殴りながら力の限り叫んだ。

「なんでっ…なんで真由が……!」

真由を守れなかった、その悔しさと悲しさに司は胸が張り裂けそうになった。

気がつくつと、地面にいくつつかの染みが出来ていた。これが自分の涙であるということに気がつくのには、大して時間はかからなかった。

「…もう……嫌だ……」

俯いたまま、涙を流しながら消え入りそうな声で呟いた。

「真由が……義母さんがいない世界なんて……」

気付けば、司の瞳から涙が零れ、地面に染みを作っていた。

「こんな世界……忘れてしまいたい……こんな、せかいっ……!」

とうとう司はうつぶせになって、声を押し殺しながら泣き始めた。

「うつ……うああ」

そしてそれは、悲しみの叫びに変わってゆく。

うわあああああ———。

やがて世界に、一人の少年の悲しみが満ちた。

「ハァーハァー」

奈津美は、司を探しながら廃墟となった住宅街を走っていた。一時間ほど前まで立ち並んでいた家は、柱とコンクリートの燃え滓に変わり果てていた。滓のなかに、人骨が覗いていた。

「司——ハァー司は？」

走りながら辺りを見回し、弟である司の姿を捜す。

「確か、先生の話だとこの辺りに——」

奈津美は足をとめ、北岡に言われた自分の家の近くにあった廃場に目を凝らした。すると、その真ん中にひざまずいて地面に手をつけている人影が見えた。

「司——？」

自分が考えている人かどうか確かめるために、奈津美は人影に走っていきこうとする。しかし、奈津美より先に人影に近づく人物を見つけ、踏み出していた足をとめる。

「誰——？」

司は、自分に歩み寄ってくる足音を聞きながらゆっくり顔を上げた。
た。

姉さん——？

そう期待したが、その人物が目に入った瞬間、期待はボロボロと崩れ落ちていった。

「……あんだ、誰だ」

司は警戒しながら、その人物に尋ねた。

「…ディケイド」

しかし、その人物は答えず、逆に司に質問を返した。
「忘れたいか？」

そう尋ねられ、司はキョトンとした顔付きになったが、つぎの言葉でその表情が悲しみに染まった。

「この世界のことを……」

「……………」

司は歯を食いしばりながら、涙が流れるのを堪えた。

もう司は、死んでしまいたいと思っていた。こんな最悪な世界から、死んで早く離れてしまいたかった。奈津美も生きているかどうか――生きているが司には解らないのに、二人も家族を失っているので、そう思いつくのも当然だった。

そんな司に謎の男は、希望を叶えてやると言わんばかりに司に告げた。

「俺は結城丈二」

その男は、いきなり先ほどの司の質問に答えた。

「結城：丈二？」

「俺はお前の記憶を消すことができる。お前が望めば、今ここで、《今》の記憶も――《過去》の記憶も消せる」

謎の男――結城丈二は淡々とその事を司に向かって告げた。

「過去の……記憶？」

自分にはそんなものはないと思っていた司は、不思議に思い問い返した。

「そう《過去》の――お前が刻んでいる、最悪の記憶だ」

司を変わらぬ視線で見つめながら、結城丈二はゆっくりと《それを口に出した。

「世界の崩壊が始まった今なら、そろそろ戻るころだろう」

そう言ったと同時に結城丈二は司に向かって一歩踏み出した。司は、ただ結城丈二を見つめていた。が、次の瞬間、頭を襲った強い痛みはその場にうずくまった。

「う……ぐあああっ!？」

司の頭に次々とイメージが流れ込んでくる。

この手で首を締め、人を殺し――この手に刃物を持ち、また人

を殺す——ただただ、ひたすらに人を殺している自分のイメージ——いや、《イメージ》ではなく、この名を名乗る前の自分がした数々の数え切れない罪の《記憶》だった。

数え切れない死体を前にして、《記憶》のなかの司は身体を深紅の液体に身を染めながら、狂ったように笑っていた。まるで、人を殺すのを愉しみ、弄んでいるかのように——。

「こ……れが……俺の……記憶……」

絶望し、身体を震わせながら呟く司に、無情の一言が浴びせられる。

「そう。それがお前の《記憶》だ」

結城は、いつまでも変わらない冷酷な表情で司に言葉を投げ付ける。

「お前は破壊者——ディケイドとして人を殺し、世界を壊した。償いようのない罪をお前は犯した」

決められた台詞のように、結城はするすると言葉を紡いでゆく。

「やがて、《彼女》によって目覚めたお前は自分の罪を恐れ、その《記憶》を封印し、自分の時間を戻す事によって、自分の世界から逃げて行った」

そこで結城は一旦区切り、司の答えを待った。

「……どうする、ディケイド」

相変わらず冷たい視線で、しかし何か含んだように司を見つめ結城は催促した。

「もう時間がない。もう一人のディケイド——《門矢士》は再び九つの世界へ旅に出た。いずれこの世界も他の世界も崩壊が始まってしまう」

少し声に苛立ちを滲ませながら、結城は再び司に言った。

「……」

司は俯いたまま黙っていたが、やがてゆっくりと立ち上がると顔をあげて答えをだした。

「消してくれ——《今》の記憶も《過去》の記憶も——」

ただ——と司は結城に最後の《記憶》を尋ねた。

「俺は一体……なんなんだ……？」

その《記憶》に、結城丈二は至極あっさりと答えた。

「お前は……仮面ライダーだ」

やがて司と結城丈二は、目の前に現れた銀色のカーテンに向かって歩き出した。その様子を見ていた奈津美は、慌ててその場所を飛び出し、司のいる場所まで駆けて行った。

「つかさああ！！」

司の名前を叫びながら、奈津美は一生懸命走る。だが一瞬遅く、司は奈津美に気付く事なくカーテンの向こうに消えて行った。

「っはあ——はあ……ったく、あの馬鹿弟は！！」

少しお姉さんっぽく怒鳴りながら、奈津美は息を整えた。

「はあ……はあ……あれ？」

剣崎一真が現れた時には、すぐに消えたカーテンが今はまだ残っており、奈津美は首を傾げた。しかし、まだ司の後を追えることを理解すると、パンパンッと頬を強く叩くと、顔をカーテンの向こうに向けた。

「待ってなさいよお……つかさあ」

その言葉が聞こえたあと、この場に人間は一人もいなくなった……。

——やがて、ビシビシと世界に亀裂が入って行き、一つの世界が消滅した……。

次回、仮面ライダーディケイド New Legend！

「司！起きなさい司あ！」

「あんた…誰だ」

「結城丈二…貴様の好きなようにはさせない！！」

「変身ッ！！」

【Turn Up!】

「えっと……？」

第五話 『Journey through the Decade』

全ての力を解き放て——！！

第四話 失われた記憶（こころ）（後書き）

どもーV（＾O＾）サバイブです！

久しぶりの更新……遅くなってすみませんm（・|・）m

僕は思い付いた時に一気に書くタイプなので、少し遅目になってしまします（へーへ；

これからはもっと小説に精進出来るように頑張ります！！

そしてそして！なんとナント！

トマト先生に《仮面ライダーディケイドReturn》のコラボの許可をいただきました！

いやぁ…この小説を始めた時から思っていたので、とっても嬉しいです！この話にも早速出してます！

トマト先生、ホントありがとうございますm（・|・）m

そして読者の皆様、これからも《仮面ライダーディケイドNew

Legend》、よろしくお願いします！

第五話

『Journey through the Decade』

(前書き)

登場人物&ライダー

・水野 司

《仮面ライダーディケイド》

・水野奈津美

・結城丈二（劇場版ディケイド）

《????》

・剣崎一真
ブレイド

《仮面ライダーブレイド》

・紅 渡
キバ

《仮面ライダーキバ》

・紅音也
ディケイド

《仮面ライダーダークキバ》

・BOARD社長
ディケイド

《仮面ライダーカリス》

・海東 兄
ディケイド

《仮面ライダーグレイブ》

・謎の少女

《仮面ライダーディエンド》

・
一条ルリ

第五話 『Journey through the Decade』

かさ——つ…さ——つかさ

な…んだ？

つかさ——おきなさい——つかさ

嫌だ…まだ寝ていたい

——つかさ——つかさ——

だいたい…つかさってダレダ

——おきなさい——

ちえっ…わかったよ…おきればいいんだろ…おきれば…

——つかさ——つかさ——

「司！起きなさい司あ！！」

起きてみると俺は知らない女の人に、がくがくと揺さ振られていた。

「ちょ——やめ——」

「生きてる？生きてんなら起きろお！！」

知らない女の人は、さらにがくがくと俺の肩を揺さぶる。

「うおおああ——だ、か——ら——やめ——れ——」

「おーきーろおー！！…って、アラ？」

謎の女性は、俺の口から泡が噴き出ているのを見てようやく揺さ振るのをやめた。

「ゼイ…ゼイ…」

二人ともゆっくり息を整えた後、俺達は向かいあった。

「とりあえず…大丈夫？」

これが大丈夫に見えんのか、これが…と言いつことになるのをぐつと堪え、俺は質問にだけ答える。

「まあ、何とか…」

「そっか…その、えっと…ゴメン」

謝られたので、今回は許してやることにした。

ん？今回『は』って…？

前回もあつたっけ？

…まあ、あまり気にしないでおこう。そんなことより。

「えっとそれより…」

俺は今一番気になっていることを尋ねることにした。

「あんた…誰だ？」

………。

……。

…。

「え？」

「いや、だから」

どうやらこの女性ひとは質問の意味がわかっていないらしい。仕方なく、俺はもう一度質問を繰り返した。

「あんた、誰だって…」

「………」

たったそれだけを聞いたただけなのに、女性はいろんな感情の入り交じった顔をした。

…俺、なんかいけないこと聞いた？

その顔をみていると、俺はそんな気持ちが沸き上がって来た。

謝った方がいいのかな？と口を開きかけたがそれは女性に遮られ

た。

「まさか…もう、記憶を消されて…？」

…記憶…？

そういえば、俺は何も覚えていなかった。自分の名前も、おそらくは知り合いであろう、この女性の招待も。ただ、一つ覚えていることは……。

「俺は…俺は」

「お前は仮面ライダーだ」

いきなり聞こえた第三者の声に驚き、俺達は声のした方に振り向いた。みるとそこには、一人の怪しい雰囲気を漂わせた男がいた。

「あんた…誰だ？」

本日三回目の同じ質問。

「………」

その男は暫く黙って俺の顔を見つめていたが、やがて視線を外した。

「完璧に消えているな。成功だ」

心なしか、声に嬉しさが滲んでいる。

「あんたがッ！」

突然、俺の側にいた女性が立ち上がり、謎の男に叫んだ。

「あんたがッ、司の記憶をつ！」

今にも殴りかからん勢いで、怒りをあらわにしている。

（……怖エ）

口に出したら殺されそうなので、心に留めておく。

（…？　そういえば……）

俺は新たな疑問の答えを探すために辺りをキョロキョロ見渡す。

（俺、どこにいるんだ？）

周りにはいろんな機械がところせましと並んでいた。結構な部屋の広さで、奥には人が余裕で入れる水槽があり、中に培養液のようなものが入っている。水槽の脇に、いろんなケーブルが差し込んであるヘルメットが置いてあった。

「ディケイドが望んだことだ。それに世界を救うためには仕方のないこと……」

ディケイドとは、多分俺のことだろう——そう直感的にわかった。何故わかったのかはわからない。ただそんな感じがしたのだ。

「司が……望んだ？」

女性は、顔を絶望の色に染めた。それを見た瞬間、胸にチクリと痛みが走った。

「そうだ。例えば望んでいなくともこうなる運命だ」

男は冷酷に、無機質に喋っていた。

「これからディケイドには旅に出てもらおう。世界を破壊する旅に」
世界を……破壊する？

「すでに《門矢士》は新たな旅に出ている。一刻の猶予もない」
そういうと謎の男は俺の方に歩みよって来る。

「さあ、旅にでるのだディケイド。全てのライダーを破壊す——」
俺の方に手を伸ばし、捕まえようとした瞬間、何者かが部屋の壁を突き破り、侵入してきた。逆光を浴びている三人の人影が見えた。ゆっくりとこちらに歩いてくる。やがて、俺達の数メートル離れた場所で立ち止まった。三人の顔があらわになる。二人は男、一人は女だった。

「結城丈二……貴様の好きなようにはさせない!!」

一人の黒づくめの男は、謎の男に怒鳴ると、銀色のバックルを取り出しそれに一枚のカードを差し込んだ。

「?」

その様子を、俺と女性は不思議そうに見つめた。

バックルを腰にあてると、カードを差し込んだ方とは反対側から何枚ものランプが並んで腰に巻き付き始めた。カチャリ、とバックルに嵌め込まれる音と同時に、ベルトの待機音が流れ始めた。男は右手を掌をうえにして人差し指を伸ばし、後の指を曲げて独特の形を作り左斜めへゆっくり移動させる。顔の高さまで持っていくと、手を反転させて掌を正面に向ける。

「変身ッ!!」

叫び声と同時に、右手と左手をクロスさせ、右手でバックルのレバーを引き、左手は右手のあった場所に持っていく。

【TURN UP!】

機械音とともにバックルの中心部分がひっくり返し、スペードの紋章が現れ、そこから青いスペードのエースのゲートが回転しながら飛び出る。

「ウウウオオオオ!!」

男はそのゲートにむかって走りだし、突き抜けた身体に銀と青の鎧を纏っていた。

「……仮面ライダー」

俺は何故かそいつの名前を知っていた。

「ブレイド……」

なんで俺、こいつの名前を知ってるんだ……?

「剣崎さん……貴方は気が短すぎる」

三人組の中のもう一人の男は呆れたように呟いた。

「……」

女の方も黙って頷く。

剣崎と呼ばれた青の戦士——仮面ライダーブレイドは、俺達に手を伸ばしてきた男の数歩手前で立ち止まり、左腰に下げていた剣をホルスターから抜き取り男に突き立てた。

「結城丈二：貴様にディケイドは渡さない。ディケイドがお前の手に渡れば、純粋な破壊者しか産まれない」

結城丈二、と呼ばれた男は表情を変える事なく、右腕をブレイドの方へ向けた。すると、その右腕が緑に発光し、次に見えたのは変わり果てた異形の腕だった。

「っ!!」

ブレイドと後ろの二人はとっさに身構えた。先程まで呆れた顔を

した二人も真剣な顔に戻り、結城丈二を睨み付ける。

「……！」

女はどこからか青い銃と一枚のカードを取り出す。

「キバット！！」

もう一人の男が叫び声を上げるとそれに応えるように一匹の蝙蝠が飛んで来た。

「よっしゃあ！キバツて行くぜ！！」

（うお、蝙蝠が喋った…）

男が手をうえに挙げると、その掌に機械的な蝙蝠が収まる。

「ガブッ！」

その蝙蝠に、男は自分の手を噛ませた。すると噛んだ場所から男の身体にステンドグラスのような模様が走る。と同時に腰に鎖が巻き付き、それは一瞬にして赤いベルトに姿を変える。俺はその光景に奇妙な既視感を覚えた。

男はキバットと呼ばれる蝙蝠を前に突き出して、あの呪文を唱える。

「…変身！」

直後、男は手に持ったキバットを上下反転させながらベルトまで持って行き、キバットの足をベルトの上部分にある止まり木にとめ、そのままベルトに装着する。すると、キバットから波紋が広がり、男の体を透明の鎧が包む。やがてその鎧がパキーンと弾け、同じ形状の赤い鎧がその姿を晒す。

赤い胸には黒い血管のような模様。ハロウインのカボチャの目のような、大きな黄色い複眼。まるで吸血鬼を彷彿させる容姿に俺の隣の女性は思わず目を見張った。そして、俺は先程のブレイドのようにそいつの名を知っていた。

「仮面ライダー……キバ」

その呟きに応えるように、キバはゆっくりと酔拳に似た構えをとる。

「……………」

銃を持った女は、左手に持ったカードを凄い速さで銃の装填口に装填し、ポンプアクションの要領で前へ押し出す。

【K A M E N－R I D E.】

そして銃口を上に向けながら、ゆっくりと右腕を上げていく。

「……変身っ！！」

頂点まで昇り切ったところでやはりあの呪文を唱え、同時に銃のトリガーを引く。

【D I－E N D！】

空に向かって何かが打ち出され、空中で停滞する。女の周りを三体の影が移動しながら、徐々に女へと集まっていく。全てが集まると上に停滞していたいくつものプレートがスーツを纏った女に突き刺さる。中心を挟む二枚のプレートの先端が赤く光ると同時にスーツに色が走っていく。

やがて、そこには先程までの少女とは全く似て非なる、シアン色の《仮面ライダー》が立っていた。しかし、俺はそいつの名前はわからなかった。

「……………」

シアン色の仮面ライダーは、左腰につけているカードホルダーから二枚カードを取り出し、一枚目を装填して、ポンプアクションの要領で押し出す。

【KAMEN-RIDE. IXA!】

音声が流れた後、装填口を後ろに引き戻し、もう一枚を先程と同じように装填する。

【KAMEN-RIDE. DELTA!】

そして、トリガーを引いて《仮面ライダー》を召喚する！

「その命…神に返しなさい！」

「へえ、楽しそうだねえ。僕も混ぜてよ…」

二人の仮面ライダー、《イクサ》と《デルタ》は、それぞれ思い思いの言葉を口にし、結城丈二に向かって走る。

一方の結城丈二は、右腕にエネルギーらしき力を溜めていた。右腕の先が怪しく光り輝く。

「…………ッハア！」

結城丈二は気合いを入れると、ほとばしるエネルギーを一直線に放つ！

「っ?!」

「グッ?!」

キバとブレイドは辛うじて避けたものの、肩や脇腹を掠め、わずかながらダメージを受ける。

しかし、召喚されたデルタとイクサはその攻撃をもろにくらってしまい、何もできないまま爆発する。

「ぐわああっ!?!」

「うわああっ!?!」

二人のあげた断末魔の後には燃え盛る炎しか残っていなかった。二人のライダーを召喚した仮面ライダーは、二人に当たった事でビ

ームの威力が相殺され、当たることはなかった。

「邪魔をするモノは…全て潰す！」

謎の男、結城丈二はそう呟くと再び右腕にエネルギーを溜め始めた。

「させんっ!!」

ブレイドは、手に持っている剣からカードを一枚抜き取り、読み取り部分にラウズする。

【MACH!】

更に立て続けに二枚、一気にラウズする。

【THUNDER!】

【KICK!】

【LIGHTNING SONIC!】

コンボ技の音声が流れると、ブレイドは剣を上に掲げ、その周りを三枚のカードが回る。それら全てがブレイドの体に吸収される。

「ハアアア…ヤアッ！」

ブレイドは、超スピードでかけていき、結城丈二の10メートル手前で地面を蹴り、5メートルほど、一気に跳び上がる。

「ウエエエエエー！」

叫び声をあげながら、超スピードのまま一気に蹴りを突き出す！
「……………」

結城丈二は、だまっただまま、スウ、と左腕をあげた。すると結城丈二の目の前に銀色のカーテンが現れ、それがブレイドの攻撃を防ぐ。

「なっ!？」

ブレイドやキバ達は攻撃が防がれた事に驚き、より一層警戒を強める。

「フン……やはりその程度か」

結城丈二は、ブレイドの攻撃を鼻で笑うと、銀色のカーテンに向かって話し掛けた。

「殺れ」

するとカーテンの向こう側から三人の人影が現れた。

一人は、白いビジネススーツを着手おり、顔には不敵な笑みをうかべている。手にハートのマークが描かれたバックルを持っている。一人は、黒地に白のストライプのスーツを着手おり、愉快的笑みを携えている。茶色のくせのついた髪型が印象的だ。

最後の一人は、黒髪のいかにも優しそうな顔をした執事だ。白い手袋を嵌めており、左手には黄金のバックルがにぎられている。

一人目の男が口を開く。

「恐怖と安心のバランスは私が決める……」

そう言うと、バックルを腰に当てた。ベルトが浮き上がり、男の腰に巻き付く。

「この、仮面ライダーカリスの力でなあ!」

男は、一枚のカードをバックルにラウズする。

「変身!」

【CHANGE!】

すると、男の体を水が包み、鎧を形成する。やがて、パシヤアンと弾け、鎧の全貌を晒す。

ハートの形をした大きな複眼、全体的に黒いボディ、ハートを模したアーマー……仮面ライダー《カリス》がそこに立っていた。

「私の名前が知りたいか？」

二人目の男は、唐突にそんなことをいいだすと、優雅な腰つきでくるりと回転した。

「知りたいなら教えてやろう…知りたなくても教えるがな」

結局、教えんのかよ…。

「私の名は、紅音也」

そう名乗り、男——紅音也は恭しく頭を下げた。

「えら〜い人だ♪」

優雅に腰を上げながら、紅音也は右腕を天高く持ち上げた。音也の自己紹介に、キバがピクツと反応した。

どこからかキバットにそっくりな黒い蝙蝠が飛んで来て、音也の掌におさまる。音也は、キバが変身したときと同じように手を噛ませて、体に模様を走らせる。

「ガブリ」

黒キバットから怪しい笛の音が鳴り響く。音也は、黒キバットを前に突き出し、キバと同じく合図をかける。

「…変身」

黒キバットを反転させながらベルトにとりつける。やがて音也は、キバに似ている緑色の複眼のライダー——仮面ライダー《ダークキバ》に姿をかえた。

「私は…14（フォーティーン）様の為だけに尽くす」

最後の一人は、そう言いながらバックルにカードを差し込み腰に当てる。ベルトが形成され、閉じているバックルの扉を、右手で押し開く。

「変身」

【OPEN UP!】

すると執事の前にブレイドと同じような黄金のゲートが現れ、執事に向かって下がる。そして、執事がぐぐり抜けたあと、そこには黄金の戦士——仮面ライダー《グレイブ》が立っていた。

「さあ、ライダー大戦の始まりだ…」

結城丈二の宣言と同時に、結城側のライダー達が、ブレイド達に攻撃を仕掛ける！

「……一瞬で」

ブレイドは、左腕についている《ラウズアブソーバー》のスイッチを押しながら、呟き、キバがその後に続く、

「ケリをつける！——タツロッド！！」

「イエーイ！テンション、フォルティッシモ！！」

キバの呼び掛けに応え、小さな竜がキバの左腕にとまる。

「変身！」

その竜が叫ぶと、キバのショルダーアーマーが開き、翼に変わり無数の黄金の蝙蝠が飛び立つ。

「——ッハ！！」

キバが腕を振り払うと、そこには変わり果てたキバの姿があった。複眼は赤く染まり前よりも鋭くなっている。全体的に黄金になり、赤いマントを翻している。右手には、《ザンバットソード》を握っている。

【ABSORB QUEEN…】

ブレイドは、アブソーバーから抜き取った二枚のカードの内一枚をセットし、もう一枚をアブソーバーにラウズする！

【EVOLUTION KING！】

すると、ブレイドの剣から13枚のカードが飛び出し、次々にブレイドに張り付く。張り着いたカードは黄金の鎧に変わり、ブレイドを覆う。やがて、全てのカードがブレイドの力になったとき、ブレイドの左腕に黄金の大剣――《キングラウザー》が現れた。

「……！」

シアンの仮面ライダーは、もう一枚カードを取り出し、装填する！

【FINAL—ATTACK—RIDE. D I D I D I D
I—END!】

そして銃口を、黄金の戦士^{グレイブ}に向ける！

【ROYAL STRAIGHT FLUSH!】

「ウェイクアップ！」

ブレイドとキバも、それぞれの必殺技を、ブレイドはカリス、キバはダークキバに向かって放つ！

「ううううう…ハアアッ！！！」

「ハアアアア…ヤアアアッ！！！」

「…………ハッ！」

黄金の矢のような斬撃、赤い三日月状の斬撃、碧い巨大な銃弾が三人のライダー達を襲う！

「「「グアアアッ!?」」」

三人のライダー達は、何もすることなく爆発してしまう。

「結城丈二：次は貴様の番だ」

ブレイドは、キングラウザーの切っ先を結城丈二に向けながら歩いて行く。

「っ!!！」

すると結城丈二はいきなり走りだし、俺のところまで走って来た。「うおっ!？」

突然、やってきたので俺は心臓が口から飛び出しそうになった。

「こっちへ来い……!!！」

そんなことはお構いなしで、結城丈二は俺の腕を掴み、強引に引っ張っていく。

「っ!司!」

すると、今まで一言もしゃべらなかったシアンの仮面ライダーが初めて口を聞いた。

「渡、急がねえと!」

「ああ!」

キバットに、渡と呼ばれたキバはザンバットソードを構えて、こっちに走って来る。

「クソッ!待てエッ!」

ブレイドもキングラウザーを振りかぶりながら走って来る。「ちよっとお!弟を離しなさい!」

女性も、恐ろしい殺気を放ちながらこちらへやってくる。

(うわぁ…怖え)

逆に来ないでほしかった…。

「のおわぁあっ!?!」

少女はいったん立ち止まり、真剣に考えている。その間、約2分……。

「…帰ってから考えよ、っと」

いいアイディアが思い付かず、諦めて再び歩き出した。

彼女の名は、一条ルリ。

つい最近に両親を無くし、身寄りのないところを父親の仕事仲間であった海原聡かいばらとみねが拾ってくれた。聡は元医者でこの近辺にいるホームレス達の診断をやっている。しかし、ホームレスはお金をもっていないため、診療所は貧乏暇なしを地で行っている。しかし、なぜか診療所はそれなりに切り盛りできているので不思議だ。

「♪♪…ん？」

ルリは、診療所の前に人が倒れているのを見つけ、慌てて駆け寄っていった。

「だ、大丈夫ですか！？しっかりしてください！」

ルリがその男の肩を揺さ振ると、ゆっくりと瞼を開けた。ルリはホッと息をはくと、その少年をまじまじと見つめた。少年は上半身裸で胡座をかいて座っている。綺麗な顔立ちをしていて、ルリの同級生はこの人をみたら間違いないく騒ぐだろうとルリは思った。目が虚で、今の状況をうまく把握出来ていないらしい。辺りを見回しながら、

「ここは……？」

と呟いた。

とりあえずルリは、名前を聞いてみることにした。

「えっと……？」

しかし、思うように言葉が出てこない。柄にもなく緊張しているようだ。ルリはすうー、っと息をすい、思い切って尋ねた。

「えっと、あなたの名前はなん…ですか？」

すると、男性はこちらにむき、驚いたような顔で答えた。

「分からない……多分、《ツカサ》だと思う」

多分て…どうということ？

「ここはどこだ？俺はさっきまで…一体、何があったんだ？」
ツカサ、と名乗った少年は頭を抱えその場にうずくまってしまった。

……何か事情がありそうね……

ルリはそう思うと、ツカサに声をかけた。

「よかったら……入りませんか？」

運命の物語が、はじまった

次回、仮面ライダーディケイド New Legend!

「俺は…何だ？」

「お前達のような悪がいる限り、俺は何度でも蘇る！」

「何だ、こいつら!？」

「変ん n…身っ！」

第六話 俺は太陽の子…！

全ての力を解き放て——！

第五話 『Journey through the Decade』 (後書き)

ども、サバイブです！

やっそこ第五話……サバイブはいま疲労で前が見えme@★o?j:

ホント、疲れました（

頭の中、もうパンパンです（笑

今回は、全くのオリジナル展開でいってみました！（少し仮面ライ

ダーSPIRITSを参考に）

さあ、いよいよ司くんは別の世界に旅立ちます！

次はなんと、初っ端BLACK-RXの世界！

この世界で司は自分の正体に気付きます。そして、これから自分が

どうあるべきか、大変悩みます。

これからジャンジャンライダーを出して生きたいので、楽しみにして下さい！

P・S・ BLACKも出します（^O^）g

第六話 『俺は太陽の子……!』 (前書き)

登場人物&ライダー

・水野司

《仮面ライダーディケイド》

・一条ルリ

・海原聡

・????

《仮面ライダーBLACK-RX》

・ワームソージ(ディケイド)

《仮面ライダーザビー》

・アラタ(ディケイド)

《仮面ライダーガタック》

・ジャーク將軍

第六話 『俺は太陽の子……!』

「あの…お茶、どうぞ」

コト、と置かれた熱い緑茶の注がれた湯呑みにをチラと見て、ツカサ、と名乗る少年はすぐに前に視線を戻した。

（余計…だったかな？）

湯呑みをお盆に乗せて持ってきた少女——一条ルリは少し不安になった。しかし、ツカサという少年がチラチラと湯呑みを気にしているのをみて、安心感が広がり、何を躊躇っているのかと声をかけた。

「あの…飲んでも良いですよ？」

声をかけられたツカサは罰が悪そうに髪の毛を掻きむしりながら、湯呑みに手を伸ばした。

「悪い……いただく」

そう断りをいれると、ツカサという少年は少々ぎこちない手つきで湯呑みを口に持っていく。ルリはその様子を、じいっと見つめている。

やがて、ゴクンとツカサの喉をゆつくりと緑茶が流れていく。

「……あ、えっと…おいし——」

「ああ何だ、お茶がもう入ってたのか。だったら貰おうかな」

——い、とツカサが言い切る前に少し野太い声が横から入り込んで来た。最後まで感想が聞けなかった事に、ルリはむうと頬を膨らませる。

声の主は、この診療所の医師を務めている——というか一人しかいない医師、海原悟^{かいばなご}だった。何でも、昔は有名な化学研究者だったらしく、診療室の片隅にノーベル賞受賞の際に貰ったトロフィーが

飾ってある。それほどの実力の持ち主なのにどうして化学者をやめてしまったのかは、ルリが何度尋ねても教えてくれなかった。

「さてと……」

そう言いながら、聡は湯呑みに口をつけ――。

「アツチャアツ!!」

途端に、口から湯呑みを猛烈な勢いで離す。相当、熱かったようだ。

「~~~~ッ! ルリい、これ熱すぎるよお」

舌をべーつとだして、ハアハア言いながらルリを恨めしげに見る。
「ああっ、すいません! えと、す、すぐにいれなおしますっ!」

ルリは慌てた様子で、聡の手から湯呑みを取り上げる。

「もゝ、しっかりしてよ……って、アラ? ツカサ君は熱くないのかい?」

「……? いや……」

見ると、ツカサは猛烈に熱いはずの緑茶を平気で飲み切っていた。舌を火傷した様子も微塵も感じられない。

（すご……）

（すごいな……）

ルリと聡はツカサの様子に感心し、しばしツカサを見つめていた。

「……ああ、そんなことより! ツカサ君の診察だっけ!」

「……? ……ああ、よろしく頼む」

聡は慌てて机の上に置いてある聴診器を掴む。それを肩に掛けながら、ツカサをチラと見て質問をしていく。

「じゃあ、始めるよ……名前は?」

「……ツカサ」

「苗字は?」

「……分からない」

「年齢は?」

「……分からない」

それから聡とツカサは一問一答を繰り返していき、20分位した

ところで、聡がふう、と息をついた。

「本当に何も覚えていないようだね……苗字がわからないんじゃあ、親族とか搜索のしようがないなあ」

うーん、と聡はボリボリと頭を掻きむしった。どうやら癖のようだ。

すると、今まで黙っていたルリが怖ず怖ずといった感じで口を開いた。

「あの……身分証明書とかでわかるんじゃないですか？」

それを聞いた聡は、それだ！とツカサに向き直り、明るい口調でツカサに尋ねる。

「何か、身分証明が出来るものを持っていないかね？」

尋ねられたツカサは、ズボンのポケットに手をつ込みごそごそと中を探った。カリっ――――。

(……………?)

ツカサの手に”何か”が突っ掛かった。恐る恐る、ツカサはその”何か”を抜き取る。

「それは……………」

それは一枚のカードだった。トレーディングカードのようで絵柄は何も書かれておらず、何のカードかもわからなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

三人はそのカードを、ただただ見つめるばかりだった――。

結局、そのまま何もわからずツカサとルリは聡の言葉通りに街をぶらぶら歩いていた。

『まあこのカードだけじゃ何もわかんないから、とりあえず街を歩

いてきたらどうだ。少し歩き回れば、少しは手掛かりが見つかるかもしれない』

（そんなこと言ったって……一体何を話したらいいのおくくく！？）

ツカサとルリはさつきからお互いに気まずい雰囲気でだんまりと街を歩いている。あからさまに、変だ。

（ああ、どうしよう。私、嫌われたりしてないかな）

ルリは何とか話題を持ち出そうとして、ツカサの方を向くのだが、何故かツカサも同じタイミングでこちらを向くので、視線ががちあわせになり、慌てて顔を逸らしてしまうのだ。先程からそれを何度も繰り返している。

（はああ、どうしよう……何とかしないと）

ルリは意を決して、バツとツカサの方へ顔を向ける。だがツカサは別の方向に顔を向けている。

「？」

気になって同じ方向へ顔をうごかす。

ツカサが見ているのは、すぐそこにある電気屋の店頭にあるテレビだった。ちょうど臨時ニュースをしており、アナウンサーが切羽詰まった様子で原稿を読み上げている。

「……あれは」

ツカサが不意に口を開いてルリに話しかけた。

「ふえ？」

いきなり話し掛けられ、ルリは少し驚く。そんなルリに申し訳なさそうにツカサは言葉を続ける。

「えっと……あれは、何だ？」

え、テレビわからないのかな？と一瞬思ったが、ツカサが指しているのはニュースの内容についてだとすぐに理解した。

「ええっと、あれはですねえ……」

テレビに近づきながら、ルリは答えていく。

「ああ、最近話題の仮面ライダーですね」

「仮面……ライダー？」

答えを聞いたツカサの様子に、ルリは怪訝そうな顔をする。

「知らないんですか、……ってああごめんなさい！ 私ったらこういう
っかりして——」

「構わないから続けてくれ。仮面ライダーとは、何だ？」

そのツカサのせつつく様子に内心驚きながらも、ルリは話を続ける。

「ええっと、詳しい話は知らないんですけど——つい一ヶ月ぐらい前に、太平洋の中心にUFOが着陸したんです。中から宇宙人が出てきて、それが勝手に太平洋沖に国を作ったんです。確か、クライシス帝国だったかな。それでいきなり一番近場にある日本を占領する、とか言い出して日本に乗り込んで来たんですよ。そこに現れたのが仮面ライダー、なんです」

とそこまで一息に説明して疲れたのか、ルリは息を継ぐと再び説明を始めた。

「最初は、みんな仮面ライダーを敵かと思ったんだけど、クライシスから人間を助けるのをみて、味方だとみんな思ったんです。私も、何だか憧れちゃいます。仮面ライダー」

ね？とルリはツカサを振り返った、が、ツカサの様子がどこかおかしかった。テレビの中の仮面ライダーを吸い込まれるように見つめている。

「あの、ツカサさ——」

「こいつは今、どこにいる？」

急に尋ねられて、一瞬何のことかわからなくなったが、すぐに理解して、テレビをみる。

「えっと、生中継だし……多分向こうの公園かも知れませんか？
ここ」

とルリはテレビに写る場所を指差す。

「でも、何で——」

とツカサを振り返ると、そこにはツカサはいなかった。公園の方

へ歩いていってる。

「ちょ、ツカサさん！どこへ——！！」

ツカサは、声にも振り向かずただただ公園を目指す。

「仮面……ライダー」

ツカサは、眩きながら公園へ走って行った——。

「フンッ、ヤアッ！」

「デエイッ、トアッ！」

先程の公園では、二足歩行のロボットと黒と深緑の赤い複眼の戦士が取っ組み合いをしていた。すでに人の姿はない。

「ドリヤアッ！」

「ウガアッ!？」

ロボットが手につけているアームで黒の戦士を吹き飛ばした。吹き飛ばされた黒い戦士は、色が薄れていき、人間の姿に戻った。

「ウッ、クッ……クソオッ！」

「フンッ、どうだRX！我がクライシス帝国の力は！我らを前にしたお前の力など、恐れるものではないわぁっ！」

グワアッ、ハッハッとロボットは身をのけ反らして笑う。

「クッ……！」

黒の戦士だった人間は悔しそうに、舌打ちをする。

しかしすぐに立ち上がり、右手を天高く突き上げる。手を縦向きにしてゆっくりと下に切るように下ろす。

「ほう……まだやるか」

腰の前まで下ろした瞬間に、回す様にして腰へ持って行き、左腕を同じ様にして、身体の横で拳を握る。

「変ん n……身っ——！」

「ハア…ハア…」

息を整えながら、ツカサは先程の光景を思い返していた。

『変身』と叫んだ男は、ベルトの発した光に包まれて、みるみる内に姿を変えた。黒いボディ、真っ赤な瞳——仮面ライダーと呼ばれるものがそこにたっていた。

「例え何度倒れようと、お前達のような悪がいるかぎり、俺は何度でも蘇る！」

仮面ライダーはそう叫んだ後に、右腰に右拳を構え、左手の人差し指と中指でロボットを指差して、己の名を名乗る。

「俺は太陽の子…！」

右手と左手をクロスさせ、台詞を続ける。

「仮面ライダーBLACK！」

右腕を、右斜め上へ突き出す。

「RX！」

右腕と左腕で《RX》の文字を描き、最後に左腕を前に構え、拳を強く握る。

「…それで正義の味方気取りですか…甘いんですよおっ…！」

ロボットは、その巨体から生み出せない程のスピードで走りBLACK-RXに銃を向ける。

「リボルケイン！」

BLACK-RXは、左手をベルトの前に翳し、ベルトの《サンライザー》によって生成された《リボルケイン》を引き抜く。

「フンッ、トオッ！」

飛んで来た銃弾を、リボルケインで薙ぎ払う。

「チッ、小賢しい……だったらこれでどうです…！」

ロボットは、銃を二丁にしてBLACK-RX目掛けて撃つてくる。

「ハアッ、タア——グアッ!？」

さすがにリボルケインだけでは防ぎ切れなかった様だ。いくつもの銃弾をあび、BLACK-RXは苦しそうにもがく。

「ハッハッ！ ちゃんな攻撃じゃ、このジャーク將軍には勝てんぞ？」

「……………」

BLACK-RXは黙って立ち上がると、彼の身体を光が包んだ。

「RX！ ROBO-RIDER！」

光が晴れるとそこにはBLACK-RXとは違う、機械的なライダーがたっていた。

「ボルティックシューター！」

キunkンキunkン、と機械ライダー——ロボライダーの握っている銃からいくつもの雷弾が撃ち出される。

「ウグアアッ！？」

ジャーク將軍は、雷の弾をくらいその場を後ずさる。

まさに死闘だった。

その死闘を、いつまでも見つめているツカサは頭の中で何かを掴みかけていた。

「俺は…何だ？」

自分もこのBLACK-RXの様に、何かを守っていたんじゃないのか？ そんな気がしてならない。

とそのとき——。

「！？」

「ぬおおっ！？」

今まさにロボライダーとジャーク將軍が拳を交えんとしたとき、それは突如現れた銀色のカーテンに阻まれた。

（あれは……！！）

ツカサには見覚えがあった。前の世界で結城丈二がライダーを呼び出したときに現れたもの——それがいままさにツカサの目の前にある。

やがて、カーテンが消滅すると、そこに二人の男がいた。

二人とも戦闘員のような服を来ていて、一人は眼帯をしている。

やがて、二人の元に青いクワガタと黄色いハチが飛んで来た。

「……フン」

「よっしゃあー!!」

二人はそれをキャッチして、ハチを持った眼帯の男は、ハチを左手首の《ライダーブレス》

に持って行き、威勢のいい青クワガタを持った男は腰のベルトにクワガタを持って行く。

「…変身」

「変身!!」

【HENSHIN!】

【HENSHIN!】

それぞれの場所にそれぞれの《ゼクター》を装着すると、ベルトから六角型の甲殻が積み上がっていき、鎧を形成していく。やがて鎧が完成され、男たちは次に《脱皮》をする。

「…キャストオフ!」

「キャストオフ!!」

腕についたハチを360度回転させ、クワガタの角を逆方向へ倒す。

【Cast Off!】

【Cast Off!】

纏った銀の装甲が吹き飛び、ハチを装着した方は黄色の鎧、クワガタを装着した方は蒼の鎧を身に纏っている。二人の男——仮面ラ

イダー《ザビー》と《ガタック》は、それぞれ、対峙しているBLACK-RXとジャーク將軍を眺め、それぞれの言葉を紡ぐ。

「クロックアップできぬお前等など……俺の敵ではない」

「よっしゃあ！どこからでもかかってこい！」

言われたBLACK-RXと、ジャーク將軍は、咄嗟に身構える。するとジャーク將軍が、機械の口で大声を上げる。

「お前達は一切何者です？まさか、新たな仮面ライダーですか！」

そういうやいなや、ジャーク將軍は二人の仮面ライダー目掛けてレーザー砲を放つ。青白い閃光がザビーとガタック目掛けて飛ぶ。しかし――

「ふ……甘いな……クロックアップ！」

【Clock Up!】

「クロックアップ！」

【Clock Up!】

二人は、ベルトの左側のスイッチを叩くと高速の世界に入り、レーザーを難無くかわした。

「んなあつ!？」

ジャーク將軍は驚きの声をあげると共に、一歩後ずさる。

「ふっ……」

ザビーは、ジャーク將軍を鼻で笑うと、必殺技を発動する。

【R i d e r S t i n g .】

「ハアアッ!!」

《ザビーゼクター》から発射された針の弾がジャーク将軍に飛ぶ!

「グハアアッ!？」

ライダースティングをもろに喰らったジャーク将軍は、火花を散らしながら、その場に倒れ込む。

「グッ……おのれえ……」

苦しそうに、うめき声をあげる。

そして、よろめきながらもなんとか立ち上がり、レーザー砲をザビーに向ける。

「ライダーは……未来永劫葬り去るのです……」

少しずつ、エネルギーが腕に溜まっていく。が……

「おおりゃあああ!」

【R i d e r K i c k !】

ガタツクが放ったライダーキックがぶち当たり、致命傷を負う。スパークを散らしながら、最後の断末魔を叫ぶ。

「帝国にい、栄光あれえええ!」

そして、ジャーク将軍は大爆発を起こして、命が尽きた。

「……………」

「……………」

その様子を、ツカサとBLACK-RXはただ見つめていることしか出来なかった。と……

「次は、お前か」

ザビーがBLACK-RXの方を向き、静かに呟くとBLACK

—RXに狙いを定め走っていく。

「おっしやあ、次だ次い！」

ガタツクも、BLACK—RXに目を付けたのかBLACK—RXの方へ走っていく。

「……………!？」

BLACK—RXは、驚いたように身構え二人のライダーを迎え撃つ。

「な…何だよ、これ…」

それを見守っていたツカサは、今の状況に混乱を覚えていた。

ここで今戦っているのは、仮面ライダー——なぜかその事実がツカサには理解できた。

「俺は…何だ？」

「ツカサさあん、待ってえ〜」

そこでツカサに遅れをとっていたルリが、ツカサに追い付いた。

「ハッ、ハッ…ツカサさん…急に…走り、だす…から…見失う、じゃ…ない…」

息絶え絶えに、ルリは言葉を吐き出す。しかしツカサがこちらを見ずに、違うところを見ているのに気付いて、ルリは少し怒った。

「ちよつとツカサさん！人の話を聞いてああ!？」

ツカサはルリの言葉を最後まで聞かずに、戦っているライダー達の元へ走り出した。

（俺は…俺は!）

何かを掴みかける、その時にツカサの頭に一つの言葉が聞こえた。

お前は、仮面ライダーだ

その言葉と同時にツカサの右手に、白い四角いものが現れた。

「これは……………」

そう呟くと、ツカサはその四角いもの——ディケイドライダーを自分の腰にあてがった。ドライバーの左側からベルトが飛び出し、ツカサの腰にフィットする。

「ツカサ、さん……？」

ルリは、その様子を不思議そうに見つめている。

ツカサは、ポケットに仕舞っていたカードを取り出した。柄のなかったカードに、色が着いていく。

やがてカードには一人の《破壊者》が映し出されていた。かつて、九つの世界を巡り、世界の融合の元凶でもあった、仮面ライダー……

「……」

ツカサは無言でカードをゆっくりと前へ突き出していく。

そして、叫ぶ。

「変身！」

カードを裏返し、ドライバーに差し込み、シックスエレメントの部分を中心に押し込む。

【KAMEN—RIDE. DECADE!】

音声の後、ツカサの周りに九つのクレストが現れツカサに集結し一つのスーツへと結晶化する。そして、バックルから数枚のプレートが飛び出て回転しながらスーツの顔面へ突き刺さる。中心のプレートの先端が光と同時にスーツにマゼンタ色が駆け抜けていく。

やがてそこには、緑色の複眼、マゼンタと黒のスーツを纏った《仮面ライダー》……ディケイドが立っていた。

戦っていた三人のうち、ザビーがこちらに気付き歩み寄ってくる。
「ディケイドか……お前には一つ借りがある……ここで仇を晴らすのも悪くはない」

そういうとザビーは、ディケイドに向かって《ザビーゼクター》の付いた左腕を向けて、ライダースティングを発射する。

「……………」

ディケイドは、ザビーが発射した瞬間に目にも留まらぬ速さでカードを装填し、発動させる。

【ATTACK—RIDE. SLASH!】

そして、ライドブッカーに格納されていた柄を伸ばし、剣のように構えると、反対側から刀身が伸び、刃を朱く光らせる。

「——ツヤアアッ！」

それを一降りし、朱い軌跡を刃が描くと発射された無数の針が切り落としされ、辺りにバラバラと散らばる。

「フン、さすがはディケイド——なかなかやるな」

ザビーは攻撃を防がれたことに全く同じず、新たな攻撃に入ろうとしている。

「……………」

ディケイドも次の攻撃に備え、刃に指を滑らせる。シュイン、と綺麗で滑らかな音が二人の間を行き交う。

ルリはその様子を固唾を飲んで見守る。

「ツカサさん……………」

「キャアア!？」

「何だ、こいつら!」

と、急にディケイド達のいる公園の周りが慌ただしくなった。

そこには——

「ウガアアッ！」
「シャアアア！」

——銀色のカーテンから現れる無数の怪物達がいた……。

次回、仮面ライダーディケイド New Legend！

「あ、悪魔だぁ！！」

「俺が……悪魔？」

「10年前……奴は現れた」

「お久しぶりです、ディケイド」

「通りすがりの仮面ライダーだ…！」

第七話 「Wake up, the hero!
全ての力を解き放て……！」

第六話 『俺は太陽の子……!』 (後書き)

次回、紅渡登場!

どうも、深夜執筆中のサバイブです!

今回、渡くんには一回登場して貰っているのでどういう役回りにしようか迷いました。本編で重要な役割を果たした渡くんは、BLA CK-RXの世界でどんな活躍をするのか、乞うご期待……!最後に、この小説を読んでもいただきありがとうございます!今後ともよろしく願います!

第七話 『Wake up the hero!』 (前書き)

今回は、闇先生のオリジナルライダーが出てきます！

第七話 『Wake up the hero!』

―

「キャアア!？」

「何だ、こいつら!」

ルリはその叫び声にはっとし、その声がした方向へ向いた。

見るとルリ達のいた公園の周りに銀色のカーテンが現れ、その向こう側から、何体もの怪物が恐ろしい殺気を放ちながら、街の人々を見回していた。

「グルル……」

「シャアアア……」

荒い息を吐きながら、おののく人達にじりじりと歩み寄っていく。

「チィ…早過ぎるぞ」

怪物を見ながら、ザビーは忌ま忌ましそうに舌打ちをした。BLACK-RXと戦っていたガタックも怪物が現れたのをしり、慌て始める。

「おいおいおいおい! どうなってんだよ! 予定ではもつとあとに――」

「トオッ!」

ガタックが大声をあげている隙に、BLACK-RXは高く跳躍し鋭いパンチを繰り出す。

「ハアッ!」

「ウグッ――チィィ!」

ディケイドもザビーが怪物達に気を取られている間に、ライドブ

ツカーの刃を切り付ける。

「早く済ませたほうがいいな——クロックアップ!」

【Clock up!】

「じゃあねえ、クロックアップ!」

【Clock up!】

ザビー達は、苛立ちながら高速の世界へ突入する。それぞれの標的に向かって、勢い良く走り出す。

「だあっ!?!がはあっ!?!」

「ぬあっ!?!ごほおっ!?!」

ディケイドとBLACK-RXは、着地する暇も与えられず、次々に殴られて、宙を舞う。二人の体に刻々とダメージが積み上がっていく。

「これで最後……!」

ザビーは、ゼクターのついた左腕をディケイドに向け、必殺の針を飛ばそうとする。が——

「ぐああっ!?!」

ザビーの左腕を青い銃弾が捉え、有らぬ方向へ弾き返す。

「グウウ……」

「誰だ!?!」

腕を押さえてうずくまるザビーを、ガタツクは匿いながら銃弾が飛んで来た方向を睨む。

「な、何だ……?」

ガタツクからの超高速攻撃から解放されたBLACK-RXは、ガタツクと同じ方向を、訝しむように見る。

「……………」

ツカサも、黙ってそちらの方向に視線を向ける。

そこに立っていたのは――

「司に手出しするやつは……だれであろうと……許さない！」

くると、青い銃を構えたのは、黒い長髪の《女の子》だった。華奢な身体に密着する戦闘服を着ており、すばやそうな身格好をしている。反対の手には一枚のカードが握っており、指の関節が白く成る程拳を固くしている。

「おいおい、莢さや。ちよつと落ち着けて」

莢、と少女の名前を呼びながら飛び出して来たのは、機械の蝙蝠だった。翼をカチャカチャ言わせながら、莢の周りをくるくる飛び回る。

「……………」

莢は、蝙蝠を煩わしそうにしつと手で払いのける。

「うお、何だよ！扱いが酷いなあ。なあ、渡う。何とか言ってくれよ」

蝙蝠は、悲しそうに目尻を下げながら（そう見えた）、後ろにいる人物に助けを求める。

「……………」

蝙蝠に渡、と呼ばれた人物は困ったように肩を竦め、蝙蝠の言葉をスルーした。首から白いマフラーを垂らし、同色のカーディガンを羽織っている。

「チィィ……貴様らは」

腕を摩りながらゆっくりと立ち上がったザビーは、静かに現れた二人と一匹を睨んだ。

「紅 渡……それに海東莢……裏切り者達めが……」

ザビーは吐き捨てるように呟いた。それに応えるように、渡とい

う青年が涼しい顔をしながら前へ進み出た。

「確かに、貴方たちからしてみれば僕たちは悪かも知れませんが：貴方たちの仮面ライダーとしての姿勢の方が、よっぽど悪です」

「ガブっ！」

渡は、蝙蝠——キバット掴み、自分の手を噛ませた。キバットから怪しい笛の音が溢れ出す。それをそのまま上下反転させ、腰のベルトに装着する。

「……変身」

すると、キバットからエネルギーの波紋が広がり、渡の体を透明の鎧が包む。

パキーン、と鎧が弾けると、同型の赤と銀の鎧が、その姿を青空の下に晒した。

続いて、莢という女の子も左手のディエンドライバーにカードを装填し、ポンプアクションの要領で装填口を前に押し出す。

【K A M E N R I D E .】

電子音の後に、キュウウウン、キュウウウンという待機音が流れ始める。莢は、ゆっくりと銃口を上に向けながら、ディエンドライバーを持ち上げる。

「……変身っ！」

と、叫んだ後にトリガーに指を掛け、一気に絞る。

【D I — E N D !】

すると、銃口から縦線が並んだようなクレストが飛び出し、等間隔に広がり空中に停滞する。それと同時に莢の周りを三体のビジョ

ンが行ったり来たりして、莢の身体を無色のスーツで包み込む。そして、上に停滞していたプレートが莢の頭に突き刺さっていく。

シアン色に染め上がっていくのは、仮面ライダーディエンド。青い銃口を、二人の邪悪なライダーに向ける。

「……何なの、コレ」

離れた所で見えていたルリは、今の状況にただ混乱するだけだった。とりあえずわかることは

「仮面ライダーが…六人？」

たったそれだけだった。

しかし、その直後もうひとつだけ、わかることができた。それは

――

「私の身に――」

ルリの後ろで、怪物達が低い唸り声をあげる。

「危険が迫っているうゝゝ？！」

いやああああ――と泣き声か悲鳴かわからない声をあげ、ルリはツカサの元へ走っていった。

一方のツカサ達は、公園のど真ん中で手に汗握る大バトルを展開していた。どこかのカンフー馬鹿に引けをとらない数々のアクションにその場の空気に戦慄が走る。

「ふっ！破アッ！」

「ッ破！でええいっ！」

蝙蝠をベルトに付けた仮面ライダーキバと、シアン色の仮面ライダーディエンドは、それぞれザビーとガタックを相手に互角以上の戦いを繰り広げている。

「ぐおっ！がはあっ？！」

「のおおあ！げぶっ？！」

ザビーとガタックの身体には強烈なパンチやキックが決まり刻々

とダメージが蓄積されていく。

ツカサ達も、突然現れた怪物達に必死の応戦をしていた。

「ハアッ！ ヤアッ！」

「トオッ！ ヌオオッ！」

ライドブッカードリボルケインが、怪物達の身体を縦横無尽に切り裂いていく。

「お、おい！ 見ろよあれ！」

と、誰かが今まさに戦っているツカサを指差して、恐がるように叫んだ。

「あの顔……十年前の悪魔だあ！！」

すると、他の避難しようとしていたひともし立ち止まり、ディケイドの顔を見ては、異口同音に口を揃える。

「あ……悪魔だあ！！」

「とうとう現れやがった！」

「十年前の予言通りだわ！」

「日本はおしまいだあ！」

公園の周りの至る所から、ツカサの顔を見ては恐怖の声をあげた。

「俺が……悪魔？」

ツカサは、刃を止めこちらを向いて叫び声をあげる人達を見つめた。その口から二度と無駄口を叩けぬようにしてやる！ と思ったわけではない。ただ、自分をそんなふうによぶ皆をみて、改めて自分という存在に恐怖したのだ。

自分は一体この人達にどんなことをしてきたのか、それを知るのがただ純粹に怖かった。だいたい予想はつく。だが、はっきりとわかりたくなかった。

「ツカサさあーくん！ たーすーけーてー！」

そこに、怪物達に追われているルリが駆け込んで来た。息をつき、顔をあげてツカサを見た瞬間、その表情が一気に氷点下－50度まで下がった。

「つ、つか……そ…の顔」

身体がぐくぐくと震え、ずり：ずり：と少しずつ下がっていく。

「あ……悪魔……」

僅かに開いた口から洩れた言葉に、ツカサはピクツと身体を揺らした。やはり、そうなのか……知りたくない現実を突き付けられ、ディケイドは少なからず肩を落としたのだれる。

「やはり、そうなのか……俺は、悪魔……なのか」

「違う」

そう言ったのは、先程までザビーと乱闘をしていたシアンライダー、ディエンドだった。ディエンドにこてんぱんにやられたザビーは胸を押さえて、苦しそうに仰向けに転がっている。

「司は悪魔なんかじゃない……」

真剣な目つき（なのだろう）で、司を見つめている。ルリのことなど眼中にもないようだった。

「司は……私の仲間……そして、私の……たった一人の大切な」

そこまで言って、ディエンドの言葉は途切れてしまった。ガタツクにやられたキバが、そこに吹き飛ばされて転がってきたのだ。キバは、苦しそうに呻いた後、忌ま忌ましげに舌打ちをする。

「やはりカブトのライダーは戦い憎いですね……相性が悪すぎる。

……ディエンド」

キバは立ち上がると、ディエンドに少し頭を下げる。

「頼みます」

ディエンドは邪魔されたのが気にいらぬのか、少し雑に二人のライダーに向けて銃を撃つ。しかし狙いは正確で、綺麗にガタツクとザビーの左腰にヒットする。ガタツクは、撃たれた場所を押さえ、呻き、ザビーは痛みを感じながらも何とか立ち上がった。

「チィ……舐めやがってえ……！」

怒気の孕んだ声色に周りの空気が揺らめく。

「ライダーアステイイング……！」

【Rider Sting!】

タキシオン粒子がエネルギー変換され、青い稲妻となりザビーゼクターより溢れ出す。そのまま照準を定め、ゼクターから無数の針が打ち出され、ディケイド達を襲う!

「……くそったれ」

ディエンドは、女の子らしからぬ言葉を口にするとうるさくについているカードを一枚抜き出し、ドライバーに装填する。

【ATTACK RIDE. BLAST!】

そして、トリガーを引き無数の銃弾をライダーステイングにぶつける。

威力が相殺され、針はその場で炎上する。

「チィー!」

ザビーは舌打ちをして、ここから一旦退こうと走りさろうとする。
が――。

「イタッ!!」

「なっ!」

何者かにぶつかり、そのままスッ転んだ。

「いててて……あれ?ここは、どこ?」

ぶつかった相手、茶髪の青年は辺りをキョロキョロ見回して、戸惑っている。

「……なんだ?」

ディケイドは、その様子を不思議そうに見つめている。が、青年がこちらを向き、己の顔をみると目を大きく見開き、指指した。

「ツカサ!なんで此処に!?!俺は消えたんじゃないのか!?!」

何で、と言われてもツカサは答えに困る。第一、この青年とは初対面だ。

「お前……誰だ？」

「え？俺だよ俺！カズマ！剣立カズマ！」

けんだて……カズマ？

初めて聞くその名に、ツカサは再び首を傾げる。

「まさか……あの《ツカサじゃないのか？この世界のツカサ？」

その言葉を聞き、ツカサはますます混乱した。《あの《ツカサって、俺じゃない俺がまだ他にいるのか？そいつも《悪魔》と呼ばれているのだろうか——様々な疑問がツカサの中に浮かんてくる。

すると、傍らで黙っていたキバが唐突に口を開いた。

「いい所に現れましたね、もう一人の《ブレイド》」

いいながら、蝙蝠をベルトからはずし変身を解く。

「任せましたよ」

そう言って、カズマの肩を叩く。

「は？任せるって……何を？」

カズマは渡の言葉の意味が分からず、ていうかあんたダレ？という目で渡を見る。

「ウオオオオ!!」

怪物が叫び、カズマはそいつを見て驚きの声をあげる。

「アンデット!!何で!？」

「カブトのライダーは逃がしてしまいましたが……アンデットと魔化魍を放っておくわけにはいきません」

という訳で、と渡はディケイドとルリ、ディエンドに向き直る。

「我々は一旦退きましよう。後の始末は、ブレイドが何とかしてくれます」

「俺一人で!？」

「いえ、もうじき《響鬼》も来ると思いますから、二人です」

「……ちえ。分かった。例えば《士》じゃなくてもディケイドは一緒に進化していく仲間だ」

そういうとカズマは怪物——アンデット達の方をむく。

「グウウ……ア、ア、あ」

アンデットは、咽を鳴らしてカズマに近付いていく。

カズマは、後ろから銀のバックルを取り出し、それにスペードのカテゴリA《CHANGEBee tle》のカードを差し込んだ。バジユウという音がしたあと、バックルを腰に当てる。するとトランプがカズマの腰に巻き付き、ベルトを形成する。

カズマは、人差し指を伸ばした右手をゆっくり斜め上へ持ち上げる。

「変身っ！」

右手を反転させ、それを左手とクロスしバックルのレバーを引く。

【TURN UP！】

バックルから、青いスペードのゲートが飛び出し、カズマに向かって後退する。

「ウオオオオオオアアア……！！！」

カズマは叫びながらゲートに向かって走り出した。身体がゲートを通過すると、カズマの身体を青と銀の鎧が包んだ。

ブレイド——。

それが、剣立カズマのもう一つの名前だった。

「あの人も、仮面ライダー！？」

カズマの変身を見て、ルリは驚いたように声をあげた。

そのルリに渡は顔を向け

「そうです。彼はブレイド——あなたと」

それから変身したままのBLACK-RXに顔を向ける。

「あなたにもきてもらいます。この世界の運命がかかっています」
そういうと渡は、その場から離れて行った。

ツカサとルリは、しばらく呆然としていることしかできなかった。

「来てもらうって……」

ここ、私が住んでるところ……と、ツカサの隣に腰掛けているルリはそう小さく呟いた。

あれから渡が向かった先は、ルリとツカサが寝入りしている海原博士の診療所だった。キッチンでは海原がお湯を沸かしている音が響いている。

ルリはチラ、と隣にいるツカサの顔を盗み見た。すると、ツカサも同じタイミングでルリを見て視線ががちあってしまった。ルリは慌てて視線を外し、ツカサも気まずそうに頭の後ろを掻いた。

（ツカサさんのあの姿……）

ルリは昼間見た光景を思い出す。

ツカサの変身した姿——確か、デイクイドと言ったか。あの姿は、ルリにとって忘れたくても忘れられない顔だった。だってあの顔にルリの父は——。

「はい、お待たせ」

カチャ、と目の前に湯呑みが置かれルリは、はっと我に帰る。

「全員緑茶にしたけど、よかったかな？」

少し笑いながら、海原はバツが悪そうにいった。その様子を見て
莢がすかさずフォローを入れる。

「いえ、全然大丈夫です。ありがとうございます」

そう言ってニコツと笑う。

「はは、ありがとう——それでは改めて自己紹介を」

コホン、と咳ばらいをして海原は座っている一同を見渡す。

「この診療所で診察をしている海原悟だ。まあ、『先生』とでも呼んでくれたらいいよ」

そう言うのと、海原はルリにアイコンタクトを取る。

「あ、えっと……一条ルリです。ここに居候させて貰ってます！……えっと、終わりです」

続いて、誰が自己紹介するのか分からなくなる。しばらくして、渡が沈黙を破った。

「紅渡です。まあ、これといってプロフィールのようなものはありませんので本題にはいらせて貰います」

と渡は湯呑みを置いて、きりりと真剣な顔つきになる。横で莢が

「……私は？」と、渡を睨む。

「お久しぶりです、ディケイド。と言っても貴方にとって別れたのはつい2、3時間程度だと思われませんが」

ごめん、余り覚えてない……とツカサは心の中で謝しておく。

「さっきから気になるんだか……」

とここでBLACK-RXに変身する青年が口を挟んだ。

「君達は一切どういふ関係なをだ？ 一方的に知り合いを装っているようにしか見えんのだが……」

彼——南光太郎は、腕を組み訝しげにツカサと渡を交互に見る。ツカサは困ったように渡を見つめるが、渡は少しも動揺せず、事実を淡々と述べていった。

「僕たちはディケイドと因果関係で結ばれています。僕たちの世界が誕生し、その世界の『歪み』の集まりがディケイドなのです」

「僕たち？ じゃあ俺達以外にも仮面ライダーがいるというのか？」

「そうです。ディケイドが誕生したことによって強烈な『歪み』が発生し、また新たな世界を造るのです」

渡の台詞と合わせたかのように、診療所の部屋を暗闇が呑み込ん

でいく。

「うわっ、何だ!？」

「暗くなった!？」

「?!?!？」

「何をするんだ!!」

莢と渡以外の四人が、暗闇の中でじたばたと手を動かす。

「御心配なく。これはただの映像です。新たな九つの世界の誕生が今まさに始まろうとしている——」

すると、ツカサ達の頭上に地球が現れた。

それは段々数を増やし、気がつけば九つの地球が出来上がっていた。

「……ディケイド。貴方は全ての仮面ライダーを《破壊する者》です」

地球の明かりに照らされた渡は、立ち上がりツカサに歩み寄る。

「《想像》は《破壊》からしか産まれない……すでに、貴方の生まれた世界は破壊されています」

そういうと、暗闇が晴れもとの部屋の姿に戻った。

「門矢士は既に新たな旅を始めている——彼に追い付く為にも、水野司。貴方には旅をしてもらう」

ツカサ——司を真剣な瞳で見つめる。司は、同じ目つきでその《瞳》を煌めかす。

「……それが俺のやるべきことなのか」

渡は黙って、頷く。

「ちょ、ちよっとタンマ——!」

そこで制止の声を上げたのは、今まで黙っていた海原だ。

「話が良く見えないんだけど……要するにツカサ——司君は旅をしなくちゃいけない訳だよね？」

確認するように、渡に話し掛ける。

「そうです。それがこの世界、そして、あらゆるライダー世界を救う唯一の方法……」

渡は、単純明解に答える。

「そうだよ。それで今の流れからすると司君はこの世界に来たのは今回が初めてなんだよね？」

でも——、と海原はチラとルリを見る。

「10年前に司君、かどうかは解らないけど、来てるんだよ——
ディケイドが」

その言葉に渡、そして莢が不信に眉をしかめる。

「……10年前」

と、ここで黙っていた広太郎が語り始めた。ルリも、その辛辣な顔を上げる。

「奴は現れた……」

司達が診療所で和んでいる頃、公園にいるアンデット達と戦っていたブレイドは、少し息が上がって来ていた。

「破アッ!! ヤアッ!! クソッ、何て数だ!!」

先程から、アンデットは倒しても倒しても湧いて出て来ているかのように、数が減っている気が全く感じられない。

「それに、何なんだあいつら! あんなやつみたことない!」

アンデット達の向こうにいるのは、日本古来の妖怪の容貌をした魔物——魔化魍が暴れ回っていた。彼らは特殊なエネルギー波、《音撃》によってしか破壊されないため、ブレイドのスト攻撃はダメージこそ与えたものの息の根を止めるまでには至らなかった。

「とりあえず、アンデットを何とかしないと……!」

今はブレイドに全ての殺気が集中しているが、いつ周りの人間達に気が行かかわからない。

「……よし、あれを使うか!」

そういつてカズマがベルトから取り外したのは、キバとブレイド

の世界が交わり、互いのライダー同士の戦いの際、ようやく完成したパワーアップラウザー——《ラウズアブソーバー》だ。キバのライダーに対抗するために研究段階だったこの装置を急速に開発にまでピッチをあげたのだ。

【ABSORB QUEEN…】

アブソーバーのカードホルダーから一枚、カテゴリークイーンの《Absorb Capricorn》をインサート・ライダーにセット。更にもう一枚、アブソーバーからカテゴリージャック、《Fusion Eagle》を抜き取り、スラッシュ・ライダーにラウズする。

【FUJION JACK!】

音声の後、アブソーバーから黄金の羽根が散りブレイドの周りを舞う。胸のスピードの紋章に鷹が刻まれ、金の装甲に身を包む。背中には、鷹のような羽根が提げられている。

「行くぞ!!!——ハアツ!!!」

ブレイドは、アンデット達に向かって勢い良く駆け出し、一歩手前で地面を蹴った。翼が風を捉え、そのまま宙に浮かぶ。

「これで…終わりだ!!!」

腰に提げた醒剣ブレイラウザーを抜き、カードホルダーを展開して、そこから二枚抜き取る。

【THUNDER.】

【SLASH.】

その二枚、カテゴリー2《Slash Lizard》、カテゴリー6《Thunder Deer》をラウズし、組み合わせ技を発動する！

【LIGHTNING SLASH!】

黄金のブレイラウザーの刃に蒼い稲妻がほとばしる。

「アアアア……」

それを空中で腰だめに構え、アンデット達に狙いを定める。

「——うおおああああ!!」

鋼の翼で加速し、急降下をする。アンデット達の間を縫うように飛行し、擦れ違う旅にその切っ先を走らせる。その度、碧の炎がアンデットから燃え上がる。

「グガアアア!!」

「イギイイイ!!」

アンデット達の断末魔が、辺りに響き渡る。この攻撃でアンデットは残り1匹まで減った。

「ラストオ……」

【KICK.】

ブレイドは新たな技を発動させるべく、カードホルダーからカードを選ぶ。と――

「!!このカードは……!!」

そう言ってブレイドが抜き出したのは、カテゴリ6《Fire fly》――ブレイド世界のライダー、ギャレンのカードだった。

「……よし!!」

カズマはギャレンが託した想いを込めて、ファイアのカードをラウズする。

【FIRE】

【BURNING BLAST!】

「ううおおおおおお!!」

そのまま蹴りを繰り出し、最後のアンデットに当てる。

「ギニャアア!!」

アンデットは、赤い炎を上げて四散した。

「ふう……しかし、あいつらどうしよう……」

そう言って、ブレイドジャックフォームは未だ暴れ回る魔化魍達のいる所をみた。ブレイドの力では、魔化魍を倒すことはできない。ダメージは与えられるものの、致命傷を与えるまでには至らないのだ。

「畜生……一体どうしたら……ん？」

カズマが悪態をついていると、公園の中心に光の粒子が、どこから現れ一つに集約していった。

「な、なんだ？」

それは、だんだん人の形を作り、実体化していく。やがてそこに一人の少年が、現れた。

「ここは……?」

少年は不思議そうに辺りを見回す。青い着物を着ていて、帯には紐にぶら下げたCDのようなもの——アニマルディスクをつけていた。反対側には、折り畳まれた変身音叉《音角》をぶら下げている。「僕は確か、士さんや師匠と一緒にアポロガイストを倒して、それで……それで」

そこで、はっとしたように顔をあげブレイドに気付くり。

「君は……アスム君か?」

「貴方は……剣崎さんですか?」

二人の声が重なり合う。

「いや、俺は剣立だけど……」

「え、じゃあカズマさんなんですか?」

少年——アスムは驚いたように声をあげる。それもそのはず、カズマはアスムより先に《ライダー大戦》の世界から消滅したのだ。

「何で、消えてしまったのにこうして僕たちはここにいるんでしょ……」

「さあ、それはわからない……あ、そうだ!!」

ブレイドは、何か閃いたらしく装甲を身に纏ったままでアスムに歩み寄っていく。

「アスム君は、確か《響鬼》だったよな?」

「え、あ、まあ、はい。そうですね」

「じゃあ……あいつら頼めるか?」

そう言ってブレイドが指を向けたのは、怪物《魔化魍》達。それを見てアスムは、顔を驚愕の色に染める。

「な、何で魔化魍が!? しかも、こんなに多く!!」

その叫びに、ブレイドは仮面をアスムに向ける。

「俺もさっきまで物凄い数のアンデットと戦ってたんだ。何とかアンデットは殲滅できたけど、魔化魍は俺の力じゃ倒せない……君の力が必要なんだ」

表情の見えない仮面の下で、カズマは真剣にアスムを見つめる。

アスムは、仮面の顔を見返すと《音角》を取り出し、折り畳まれているのを伸ばす。

「当然です。僕は響鬼ですから」

言いながら、指で音叉を弾く。キーン、という澄んだ音の波が音叉から広がる。アスムはそれを額の前に持っていく。するとアスムの額に鬼面が浮かび上がり、アスムの身体を紫の鬼火が包み込む。炎の中でアスムの身体は徐々に屈強なものに変わり、鬼火と同じ紫色の体表に変化する。

「アアアア——ハアアッ!!!!!!」

腕を振るい、身に纏う全ての鬼火を薙ぎ払う。するとそこに現れたのは、元のアスムよりも遥かに身長が高い、紫色の《鬼》、否、仮面ライダー《響鬼》であった。

「カズマさん、援護、お願いします!!」

「えっ、ちょ、待っ!!」

ブレイドの制止も聞かず、響鬼は《音撃棒・烈火》を構えて魔化魍達の元へ走り出す。

「ハアアアア——!!」

響鬼が気合いをいれると、《烈火》の先端の鬼石に深紅の鬼火が燃える。それを近くにいた魔化魍に叩き付ける。

「タアアッ!!」

ドン、という音と共に魔化魍の身体に巨大な《音撃鼓》が打ち込まれる。

「ウガアアアッ!!」

音撃を叩き込まれた魔化魍は、断末魔をあげたあと爆発して木葉に変わって散って行った。

「す、すげえ……」

響鬼の音撃打の余りの美しさに、ブレイドはしばし見とれていた。が、すぐに気合いを入れ直すと黄金のブレイラウザーを構えて、魔

化魍に向き合った。

「よっし、やるぜ!!」

カチャ、と醒剣が音を立てる。カズマの咆哮が、辺りに響きわたる。

「ウオオオオおおお!!」

「……………そうか」

一通り話を聞き終えた司は、相槌を打ちながら椅子の背もたれに腰を預けた。

「俺は……………ここで、この世界でそんな事を…」

手を組んで、その上に顎を乗せる。

「……………でも!!」

司の斜め向かいに座る莢が、必死に声をあげる。

「でも、まだ司がやったと決まったわけじゃない!!」

「そう、確かに貴方はディケイドです」

しかし、と続けているのは渡。そのまま、皆の注目を集めながら、渡は言葉を続ける。

「並行世界を旅するディケイドはまだ他にもいます。10年前、ここにやって来たのが貴方だとは限りません」

その言葉に、苦しい表情をしていたルリはほっと顔を綻ばす。

「しかし、こいつが破壊者には変わりないのだろう。だったら、このまま俺達の世界にいられては困る」

そう言ったのは、南光太郎。彼は破壊者である司をまだ認めてはいないようだった。

「……司君は覚えていないのかい。前にここに来たとか」
真剣な顔をして、海原が尋ねる。しかし、司はかぶりを振って答える。

「分からない……」

「……そうか……」

それきり、部屋の中は誰ひとり喋る事なく沈黙が周りを包み込んだ。

「……………!」

「……? どうした?」

突然、光太郎の隣に居た莢が立ち上がり、何かを警戒するかのよう窓を覗んだ。

「……来る……!」

「……もうですか」

莢の呟きに、渡はさっと立ち上がり緩んでいた顔を引き締め、司と光太郎を見つめる。

「時間がありません。あなたが認めようが認めまいが、破壊者であろうがなかりうが、いずれにせよ、仮面ライダーには代わりないことです」

渡は、その綺麗な黒い瞳を輝かせ二人に語りかける。

「どうしますか? デイクイド」

渡の問い掛けに、司はぐっと顔を引き締める。

「……俺は、破壊者だ。だから――」

すっと立ち上がり、渡に宣言する。

「この世界を壊す奴らを、全て《破壊》してやる!」

しばし見つめ合う二人。視線の中にそれぞれの想いが交差する。
司は渡の瞳に、彼の想いを見た気がした。そして――

「……戦いが、始まります」

最初に口を開けたのは、渡だった。光太郎を見つめ、問い掛けるように彼の前に立ちただかる。

「どうしま——」

「戦うさ」

渡の言葉を遮り、光太郎もすっと立ち上がる。その瞳には決意の炎が激しく燃えていた。

「俺達は仮面ライダーだ。破壊者であれどうであれ、守るべきものを守る……それを解っているのなら、俺達は同志だ」

そういうと、光太郎は司に笑いかけた。司も、ふっと微笑むと、渡に視線を戻す。

渡は二人のライダーを見て、キバットを呼んだ。

「そろそろ《支配者》も来る頃です。生憎、僕はやることがあるのでここで失礼しますが……」

そういうと、渡は一拍置いて続ける。

「最後に一つだけ……ディケイド」

「貴方は一体、何なんですか」

その問いに、光太郎もルリも海原もキョトンとする。莢は祈るように手を組み、司を見つめる。そして、司は——

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ……」

それから光太郎、莢、そして司は、前の公園に向かっていった。ブレイド達に応戦するためだ。その道中、司は考え事をしていた。（俺は……本当にこれでいいのか？破壊者である俺が戦っても、本当にこの世界が救えるのか？）

先程とは違い、否定的な考えばかりが浮かぶ。しかし、司はそんな想いをふりきり、足を早めてずんずん進む。

（後の事を考えても仕方がない……今は目の前にある大切な何かを守る為だけに戦うんだ！！）

その背中を見つめながら、莢と光太郎は微笑み、後を追った。そして、一行は目的の公園にたどり着く。そこでは、ブレイドと響鬼が無数の怪物達に押されっぱなしの光景が広がっていた。

「あれは……クライシス！！」

「ファンガイアにグロンギか……変身」

【KAMEN RIDE・DECADE！】

司は早速デイケイドに変身して、ステンドグラス怪物——ファンガイアにライドブツカーの刃を切り付ける。

「破アッ！！」

「……抜け駆けはダメ」

【KAMEN RIDE・】

「変身っ！」

【D I — E N D !】

莢もディエンドに変身して、ディエンドライバーの銃弾を全ての怪物にぶちあてる。

「うわっ、何だってツカサあ!!」

「え、ツカサさん!?!それに師匠まで!!」

ディケイド達に気付いたブレイドのと響鬼は、驚きの声をあげる。

「……知り合いか？」

司はディエンドに聞くが、

「知らない、あんな役立たず」

即答されてしまった。

「俺を無視すんなっ!!」

「変ん……身っ!!」

光太郎もBLACK-RXに変身する。ここに、五人のライダーが揃った。

「よし……いくぞ司!って何だ、アイツら」

BLACK-RXは、公園の入り口を指差した。ディケイドもディエンドもその方向に向く。そこにいたのは――

「あゝめんどくせえ。何で俺がこの世界の散策なんか……」

「まあまあ、そう言わず。それが私と司の運命なのだよ!」

「優希さん…僕との運命は……」
「ない」

『ガーンΣ（□□；）』

「落ち込んだじゃダメよ、明良君。新たな出会いなんてそこらへんにごろごろ転がってるわよ」

「理沙さん……」

「何なら私と——」

「ほ、本当に!？」

「ウソ」

『ガーンΣ（□□；）』

「お前ら、うっせえぞ……」

何やら楽しげにコントをしている男女の集団だった……。

「……ん？なんだこりゃ。すげえ数の怪物どもだな」

優希という少女に司と呼ばれた青年は公園を見渡し、怠そうに呟く。

「うわ、本当だ。グロンギまでいるよ」

「ファンガイアもいますね」

「魔化魍もいるし……怪物のオンパレードってどこかしら？」

『司』に続く一行は、それぞれの反応を見せる。

「こいつらを知っている……?」

ディケイドは訝しげに、一行を見つめる。

「あ、ディケイドだ」

一行の中の一人、理沙という少女がディケイドを指差した。

「ブレイドに響鬼にディエンド……あの黒いのは?」

優希が、BLACK-RXを指差して不思議そうに首を傾げる。

『司』は、じーっとBLACK-RXをみる。

「……まあ、黒飛蝗でいいんじゃないか?似てるし」

「だ、誰が黒バツ——」

「ま、そんな事より」

そんな事って……とBLACK-RXは力無くうなだれる。それ

を全く意に介さず、『司』は続ける。

「あんたら困ってるみたいだな」

「え、まあ…困ってるよな、アスム」

「え、はい、まあ……」

ディケイドの代わりに、ブレイドと響鬼が答える。

「だったら…助けてやるよ」

そういうと『司』は黒いディケイドライバーを取り出し腰に装着する。

「えっ、今司、助けるっていった!?!」

「うわあ…天変地異が起こりかねませんね」

優希と明良が、驚いたように身を引く。

「っせえな!! お前らもやるんだよ!!」

「解ってるわよ。ダーリン♪」

【K A M E N R I D E .】

理沙はディエンドライバーに似た銃に《DEFEND》と描かれたカードを装填。ポンプアクションの要領で前に押し出す。

「変身ッ!」

銃口を上に向け、引き金を引く。

【D E — F E N D !】

すると、銃口から紫のクレストが飛び出し空中に停滞する。理沙の体は無色のボディスーツが包み込み、頭部にプレート化したクレストが突き刺さる。中心を挟む二枚のプレートの先端が朱く光り、

スーツに薄い紫色が走る。仮面ライダーディフェンド……それが彼女のもう一つの名前だった。

「じゃ、私も♪」

そういった優紀は、腰に両手を当てた。すると、彼女の腰に銀のベルト《アークル》が出現する。

優紀は右手をバツと前に突き出し、左手をベルトの上に添える。

「変——身——!!」

声と共に、右手を右に左手を左腰にスライドさせる。そして右手を左手の上に重ね、ベルトのスイッチを押す。アークルのアマダムが回り、優希の力を覚醒させていく。やがてそこに現れたのは、紅い鎧に身を包む仮面ライダークウガだった。

「キバット——!!」

「おう——!!」

明良は、メカニック蝙蝠——キバットを呼び出した。

「よっしゃあ……キバって行くぜ——!!」

キバットを掴み、左手を噛ませる。

「ギャブツ——!!」

噛まれた所から、ステンドグラスのような模様が明良の身体に走り、キバットから妖しい笛の音が漏れる。そして、掴んだキバットを前に突き出す。

「変身……!!」

キバットを反転させ、腰のベルトに装着する。するとキバットから波紋が広がり明良の身体をガラスの鎧が包み込む。そして現れたのは、仮面ライダーキバ。

「お前ら……最初ッからそうしとけ——!!」

『司』は、黒いライドブッカーから《DECIDE》と描かれたカードを取り出す。

「——変身——!!」

【KAMEN RIDE. DECIDE!】

ディケイドと同じように変身して、『司』の身体を紫色のスーツが包み込む。彼の名は――

仮面ライダーディサイド……

次回、仮面ライダーディケイド New Legend!!

「司が……二人？」

「俺達は、通りすがりの仮面ライダーだ!!」

「痛みは一瞬よ？」

【FINAL ATTACK RIDE.
DEDEDE!】

全ての力を、解き放て——！

第七話 『Wake up the hero!』（後書き）

（おせえぞ、この唐変木！さっさと更新しろ！by 莢）

スイマセン、遅くてホントスイマセン。サバイブです。

ただ、今回は15ページにわたる大スペクタクルなので、多分内容は濃いです。濃いですよね……？

それから、闇先生。

オリジナルライダーの案、ありがとうございます。先生の小説を読んで、他のキャラも良かったので出させていただきました。勝手に申し訳ありません。

読者の皆様、今回も仮面ライダーディケイド New Legend

を読んでいただき、ありがとうございます。

これからも、作者共々、よろしく願います。

サバイブでした。

オリジナルライダー募集！&番外編（前書き）

ライダー募集&真由のお話です。

オリジナルライダー募集！&番外編

どうも！御愛読いただきありがとうございます。
サバイブです。

今回は、タイトルの通り皆様のオリジナルライダーを募集したいと思います！

変身者の名前、性別、性格、ライダーの容姿、特徴、必殺技などを御明記の上、じゃんじゃん応募してください。感想の所に書いてもらえると嬉しいです。

それでは、続く第八話でお会いしましょう！

サバイブでした！後は字稼ぎで番外編をやりたいと思います

New Legend ｝あなざーSide｝

???

「♪♪♪♪♪」

いま、鼻歌を歌っている上機嫌な女性……それは、水野真由！作者によって惨殺の道をたどってしまった、悲劇のヒロインである！

真由

「♪♪♪……あの糞作者、どうやって殺してしまおうか…」

???

「へい、そこのお嬢さん！」

真由

「縛って……蠟燭垂らし……爪を一枚一枚……指を一本一本……」

????

「…………怖」

真由

「なんか言った？」

????

「ひいひい！？言ってますん、言ってますん！！その笑顔が逆に怖いですう！！」

真由

「あっそう……で、あんた誰？」

????

「（キャラが崩壊してるよ……）オホン。では、改めて」

????

「俺の名は、オルタナティブ・ゼロ。ダークライダーの一員でスカウトをやっている」

オルタナティブ

「君のその復讐心の強さは、わがダークライダーの装着者に相応しい……どうだい？我らと一緒に復讐を果たそうじゃないか！」

真由

「……もし、ダークライダーになったら、私にも出番があるの？」

オルタナティブ

「いや、それは保障できない……かなあ？」

真由

「なあ~~~~にい~~~~?」

オルタナティブ

「ひいひいひい!?! スイマセン、スイマセン!! お許しください……
ってあれ? なんかおかしいぞ? なんでライダーである俺がただの人間に怯えなきゃならんのだ? ……そうだ、俺。もっと自信を持て!
ダークライダーだぞ! 悪の化身ともあろうものがこんな事でどうする! というわけでお前! 調子に乗っていると痛い目見るぜ、ってええええええ!?!」

真由

「変身……」

【H E N S H I N !】

【C h a n g e B E E T L E !】

オルタナティブ

「なんでダークカブトに変身してんのおお!?!」

真由

「…飛んで来た」

オルタナティブ

「認められてんの!?!」

真由

「…うつせえぞこの劣化品が」

オルタナティブ

「れ、劣化品……？（T-T）」

真由

「てめえ、知ってるか？オルタナティブってのはな、直訳すると代替って意味なんだよ。代替。要するにお前の代わりなんていくらでもあるってことなんだよ……！」

オルタナティブ

『ガーンΣ（□；）』

「それは……それだけは言われたくなかったのに……orz」

ダークカブト

「というわけで…死ね♪」

オルタナティブ

「そんな軽々しく死ねないよ!？」

ダークカブト

「大丈夫、灰は海に捨ててやる」

オルタナティブ

「嫌じゃい!!彼女つくっていちやいちゃしたいんじやい!!」

ダークカブト

「え、キモ。そんなんだからモテねえんだよ!!」

オルタナティブ

「な、何故解った？俺が彼女いない歴15年だとゆーことを……」

ダークカブト

「いや、自分でいっちゃってるし」

オルタナティブ

「ちくしょお……なあ、どうやったらモテるんだ？教えてくれよ
お」

ダークカブト

「……………（何と言うか…哀れ）」

ダークカブト

「よし、だったら教えてやるよ。この天才美少女真由ちゃんの恋
のレッスンABCをなあ……」

オルタナティブ

「はっ、ハイ……ダークカブト様……」

ダークカブト

「師匠と呼べ。師匠と」

オルタナティブ

「はっ、ハイ師匠……」

ダークカブト

（ふっ……師匠か。なかなか悪くないわね……）

果たして、
ダークカブトこと真由とオルタナティブの運命やいかに
！？

オリジナルライダー募集!&番外編(後書き)

ありがとうございました!

第八話 『旅立ち』 (前書き)

ようやく、BLACK-RXの世界から出ます。

第八話 『旅立ち』

「ディサイド……？」

突然、現れた自分そっくりのライダーに司はただ呆然となるだけだった。これが、渡の言っていた平行世界を旅する別の『ディケイド』……いま、それが司の目の前にいた。

「さあ、私はグロンギをと！」

そう言って、赤い鎧の戦士、仮面ライダークウガは怪人達の元へ走っていく。

「ああ、優希、待って……」

そして、キバもクウガの後を追うように、ガラスの怪物ファンガイア達の所へ、走っていく。

「あいつら……大丈夫かよ」

ディサイドは、そんな二人を見て呆れたように溜め息をつく。

「ちょっと不安ね……ま、そういうときこそ♪」

そう言った薄紫のディエンド——仮面ライダーディフェンドは、二枚の黄色いカードをホルダーから取り出し、一枚目、二枚目と順番にドライバーに装填する。

【FINAL FORM RIDE. KU KU KU KU
UGA!】

【FINAL FORM RIDE. K I K I K I
VA!】

音声が流れた後、ディフェンドは銃口を、キバとクウガに向ける。
「痛みは一瞬よ♪」

そういうと、ドライバーの引き金を引く。二つの銃弾がそれぞれ、クウガとキバを貫く。

「キャッ!？」

「うわあっ!？」

銃弾に貫かれた二人は、クウガは重装甲のクワガタ、キバはキバットを象った大きな弓に変形する。

「いたた……ちよつと!!やるならやるって言ってよ!!びつくりするじゃない!？」

ブーン、と羽音を響かせるクウガが変形したクワガタ——《クウガゴウラム》はゆつくりとディフェンドの方を向きながら、元の優希の声で文句を垂れる。

「ホント、ビックリしたあ……」

そう呟くのは、キバットを象ったキバが変形した弓——《キバアロー》だった。

「だあって、敵が多いと面倒じゃない？ねえ、ダーリン♪」

「それはそうだか……そのダーリンとか言うのをやめろ!」

ディサイドは、ライドブッカードからカードを取り出しながら、ディフェンドに向かって怒鳴る。

「そう言いながら、やる気満々じゃない?」

ウフ♪と、見透かされたように笑いかけられ、ディサイドは全く面白くない。

「……ああ、もう!なんでも良いからやるぞ!」

言いながら、腰のバツクルにカードを装填する。

【KAMEN RIDE. KUUGA!】

電子音声が流れた後、ディサイドの身体を黒いオーラが包み、黒と黄色いラインの入った鎧を形成していく。

やがて、ディサイドは黒い瞳の四本角のクウガ——《アルティメットクウガ》に姿を変えた。

「フフ……それでこそ司ね」

ディフェンドはそう呟くと、新たなカードを取り出しドライバーに装填する。

【FINAL ATTACK RIDE. KIKIKI KIVA!】

装填した後、ディフェンドはキバアローを掴んだ。そしてじりじりと矢を引いていく……。

それが最大まで引かれたとき、キバットの口が開く。

「キバって、行くぜええ!!」

声と友に鏃が弾け、キバの《ウェイクアップ》状態になる。

「ハッ!!」

一気に弓を放ち、エネルギーの矢をファンガイア目掛けて射る!!

「「ヌウアアアア!!」」

矢に貫かれたファンガイア達は、ガラスの破片となり辺りへ散って行った。

「よし……負けてらんねえな!」

そういうとディサイドは、クウガゴウラムの上に飛び乗り、カー

ドをバツクルに装填する。

【FINAL ATTACK RIDE. KU KU KU KUGA!】

「行くぜ、優希!!」

「オツケー、司!!一発、かましたれえ!!」

ディサイドを乗せたクウガゴウラムは、角に炎を宿すとグロンギの群れに突っ込む。

「ダアアッ!!」

加速に乗った所で、ディサイドクウガは空高く飛び上がり、キツクを繰り出す。その足先に稲妻を宿した炎が燃える!!

「ハアアアアアアア!!」

ディサイドクウガとクウガゴウラムの攻撃がグロンギ達に命中。

そのまま大爆発を起こし、グロンギ達を全て消滅させた。

「す、凄い……」

「何なんだよアイツら……!」

戦いながらも傍観していた響鬼とブレイドは、その余りの力の差にただ呆然とするしか出来なかった。

「……………」

「……………」

ディケイドとBLACK-RXも無言で驚いている。

「……私達も、負けてられない!」

そう言ったディエンドは、先程のディフェンドと同じようにホルダーから二枚のカードを取り出し、ディエンドライバーに装填する。

【FINAL FORM RIDE. B B B BLADE!】

【FINAL FORM RIDE. H I H I H I
BIKI!】

そして銃口をブレイドと響鬼の方へ向ける。それに気付いた二人は慌てて逃げようとする。

「お、俺達もするのか!？」

「ま、待ってください!!まだ、心の準備が!？」

しかし、そんなことなど気にしないといった様子で、引き金に指をかける。

「……我慢しろ」

カチ、と引き金がひかれ二つの銃弾がブレイドと響鬼を貫く。

「うおお!？」

「わっ!？」

そして、ブレイドと響鬼は先程のクウガとキバのように、その身を変形させていく。

ブレイドが変わったのは、《ブレイラウザー》を模した巨大な大剣——《ブレイドブレード》であった。そして響鬼の変形は、デイスクアニマル《アネタカ》を模した大鳥——《ヒビキアネタカ》に姿をかえた。

「……司」

そしてディエンドは、ディケイドに一枚のカードを放る。ディケイドはそれを見事にキャッチ。一体何のカードが見る。

「これは……?」

「……行くわよ、司」

そういうとディエンドは、新たなカードをドライバーに装填する。

【FINAL ATTACK RIDE. B B B BLADE!
E!】

ディエンドは、ブレイドブレードを掴み、上段に振りかぶる。ブレイドブレードの刃が青白く発光する!!

「……ハッ!!」

そのまま振り下ろすと、一直線の斬撃が魔化魍達に襲い掛かる。

「「ウグアアア!!」」

魔化魍達は、苦しそうに呻くが破壊はされない。

「……司、今!!」

「お、おう!!」

ディエンドに急かされ、ディケイドは急いでカードを装填する。

【FINAL ATTACK RIDE. H I H I H I H I B I K I!】

すると、今まで低空飛行をしていたヒビキアネタカが魔化魍達の真上に飛び上がり、その姿を巨大な太鼓——《ヒビキオンゲキコ》に変え、空中に停滞する。

「——タアッ!!」

そこに向かって、マゼンタ色の音撃棒を取り出したディケイドは勢いよく飛び上がる。力を溜めて、叩きつける!!

「ヤアアッ!!」

ドンドンッ、とオンゲキコが響き音撃の波が魔化魍に降り懸かる。

「「ギイヤアア!!」」

断末魔の叫び声をあげて、魔化魍達は木の葉に変わる。

「残るは……」

「クライシスのみ……!」

BLACK-RXは、きつく構えて白い戦闘員達と対峙する。すると――

「久しぶりだなあ、RX」

「な、お前は……!？」

「ふっふっふ……覚えてるかな？」

そこにいる白い《怪人》は、不敵に笑うとBLACK-RXを見遣る。

「ん？なんだなんだあ？」

「どうしたの？司あ？」

「あ、優希！そんなにべったり司にくっつくな！」

「あんたら……ちよつとは空気を読みなさい!!」

そこに、デイサイド一行が集まってくる。

「お、おい。光太郎？」

「……?」

「おおい！何やってんだあ？」

「一体、何があったんです？」

同じく、デイケイド、ディエンド、ブレイド、響鬼も集まってくる。

こうして見ると、なかなか壮観な光景だった。

「お前……ノブヒコ!!」

「チッチッチ……その名前はもう捨てたよ」

指を優雅に振り、腰に手を当てる怪人。その仕種は、まるで上流貴族のような繊細な仕種。見るものの心を奪うような――。

「我が名は、シャドームーン――改め、月光の子、シャドールX」

呟きながら白い怪人――シャドールXは、背中から赤い刀身のリボルケインに酷似した剣を取り出す。

「さあ、滅びるのだ、ライダー達よ。貴様達に存在意義などない！」
そして、赤いリボルケインを縦一閃させる。赤い斬撃が、地を走
っていく。狙いはBLACK-RX。

「くっ!!」

そのあまりのスピードに、BLACK-RXはかわす時間がない。
真紅の斬撃が、BLACK-RXを切り裂――

【ATTACK RIDE. SLASH!】

「ハアアアアッ!!」

斬撃が、BLACK-RXに到達する少し手前でディケイドのラ
イドブツカーの刃が受け止めた。

「う、ぬうう!!」

ディケイドは全体重を刃に乗せて、斬撃からBLACK-RXを
守る。

「お、お前……」

B L A C K - R X は、死から逃れられた事の安堵と守られた事へ
の驚愕で、一步も動けないでいる。

「ふっ、無駄なあがきを……何故貴様達ライダーは、そこまでして
戦うのだ？人間に、そこまでの価値があるのか？」

「――るっせえ!!」

ディケイドは、踏ん張りながらもシャドーRXに向かって、咆哮
をあげる。

「俺達是他人の為に戦うんじゃない、自分の為に戦うんだ！誰かに
必要とされる……それが嬉しくて、俺達は戦うんだ！大切なものを

守ることができる……それが、嬉しくて俺達はライダーになるんだ！」

「その通りだぜ……？」

気がつけば、ディケイドの横にディサイドがライドブツカーの刃を、ディケイドのライドブツカーに上乘せしていた。

「例え、仲間を失ったとしても離れているわけじゃない……そいつらはずっと《心》の中で一緒に戦ってくれている！そう信じているから、俺達は皆を守るんだ！！」

「「うおおおおお！！」」

二人は、剣を薙ぎ払い斬撃を左右に別れさせる。

「ちっ……何だ、貴様達は！？」

シャドーRXは、忌ま忌ましそうに舌打ちをして、二人を睨む。

「……行くぜ、《破壊者》さん」

「……ああ」

二人は頷きあうと、シャドーRXに、彼らの《答え》を返す。

「……俺達は」

「通りすがりの――」

「仮面ライダーだ！」

「仮面ライダーだ！」

「覚えておけ……」

最後にディケイドが締めると、彼のライドブツカーから一枚のカードが飛び出し、手に収まる。色を失っていたカードに、《力》が宿る。そのカードは――

「……行くぜ、光太郎！！」

「おお!!」

そういうと、ディケイドはバツクルにそのカードを装填する。

【KAMEN RIDE・BLACK!】

ディケイドが姿を変えたのは、黒く光るボディ、赤い複眼の仮面ライダー《BLACK》だった。「ヌウウ…クソがああ!! 調子こいてんじゃねえ!!」

先程までの優雅さはどこへやら、シャドーRXは叫びながら剣を振るい、幾つもの斬撃を三人のライダーに放つ。

「ふっ、余裕だな」

ディサイドは必殺のカードをバツクルに装填する。

【FINAL ATTACK RIDE・DE DE DE DE ECIDE!】

「フンッ!!」

BLACK-RXは手を地面に打ち付け、ジャンプの体勢に入る。ディケイドBLACKもすかさずカードを装填する。

【FINAL ATTACK RIDE・B B B BLACK K!】

そして、三人は同時に空高く跳躍する!!

「フンッ！」

「ハアッ！」

「トオッ！」

それぞれの《想い》を、その右足に乗せて放つ！！

「だああああ！！！」

「ハアアアアア！！！」

「ヤアアアアアア！！！」

「ぬ、ぬおおおおあああ！！？」

シャドーRXは、最後の叫び声をあげて爆発した……。

「も、もう行くんですか？」

「ああ……世話になった、ルリ」

戦いを終えた司達は、新たな旅にでるためにルリ達に別れを言いに、一旦診療所に戻っていた。

「そ、そうですか……あの、そちらの方達は？」

ルリはそう言うと、不思議なものをみるめで『司』達を見る。

「あっ、はじめましてえ〜。私、司の彼女の古代優希で〜す。ユキリンって呼んでね♪」

「彼女じゃねえ！！初対面の奴に変なこと吹き込むな！！！」

「そうよお〜？司のワイフは、私ただ一人なんだからあ〜☆」

「それも、違う！！！」

「ゆ、優希、僕もユキリンって呼んで——」

「嫌、キモい」

『ガンΣ（□□；）』

「そ、即答……」

「ああ、もう理沙！いい加減離れろ！——って明良、大丈夫か？」

「死にたい……」

ルリに見つめられている『司』達は、またしてもコントを繰り広げている。

「え、えっとお……？」

そんな四人を見て、ルリは少し困っている様子だ。しかし、何かに気付いたように司の顔を見上げる。

「《司》って…同じ名前？」

「らしいな。性格は全然違うけど」

アハハッ、と司は楽しそうに笑う。それを見たルリは——

（……良かった）

自然に、顔が綻ぶ。

（司さん……笑ってる）

ルリが初めて司とあったとき、彼は泣いていた。そして、診療所に寝泊まりするようになって一度も笑うことは無かった。

それが、今は笑っている。

「司さん……」

「ん？」

「私……」

そこで一旦切り、司の眼をじっと見つめる。美しい、黒い瞳を輝かせて。

「司さんに会えて、良かったです」

その言葉に、司は一瞬驚いたがすぐに笑顔に戻る。

「俺も……ルリに会えて良かったよ」

二人の間の空気がピンク色に——

「いやあ、青春だねえ」

その空気の読めない声に、ルリはズルッとずっこける。

「は、博士え」

「いやあ、スマンスマン。最後のお別れだから挨拶しようと思って」
「ワハハ、と笑う海原聡。」

「ワハハじゃないです！」

「ハハ、ごめんごめん。それより、司君。旅に出るんだって？」
聡の質問に、司はしっかりと頷く。

「……はい」

「一人で？他の…莢さん、とかは一緒じゃないの？」

「いや、彼女は……」

戦いが終わった後、莢はカズマとアスムを連れて、この世界からいち早く出ていった。

『やるべきことがある……大丈夫、また会えるから』

そう笑って、銀色のカーテンに消えていった。

「…先にいったみたいです」

「そうか……じゃあ、そっちのご一行は？」

「ん？ああ、俺達？」

理沙と格闘していた『司』は、司達のほうを向くと微笑んで答える。

「まあ、破壊者と一緒に旅をするのも悪くねえけど……生憎、家の広さ的に定員オーバーだな。ま、もう会えないってこともないし、別々に旅をしたほうが楽しいと思うぜ？」

「それに司との恋路を邪魔されたくないしね♪」

「そうそう♪」

「ゆ、優希は僕とのラブロマンスが——」

「「「いや…ない」」」

『ガーンΣ（□□；）』

「皆に否定された……」

明良は、その場に四つん這いになり首を垂れる。

「……ああ」

（俺もいつか、こいつらみたいにな……）

そこで、二人の『司』はそれぞれの旅路に着いた。
再び、あいまみえる時まで——。

「ところで司君は、どうやって旅をするの？」

聡にそう聞かれ、司ははっとしたように振り返る。

「それを聞いて無かった……」

「あちゃー、やっちゃったね」

聡は顔に手を当てて、痛そうな顔をする。

「はああく、どうしょ——ん？」

そこで、司はポケットに何か入っているのに気付いた。取り出してみると、それは何かのメモのようだった。

「………？」

開いてみると、何かが書いてある。

「何て書いてあるんですか？」

ルリが司の手元を覗き込む。そこに書いてあったのは——

『その世界で出来た仲間の《居場所》が、貴方の住むところです』

「つまり……」

「この診療所が……」

「俺の、新しい家？」

要するに、そういうことになる。

「え、でも、この建物に次元移動装置とか、そういうのはついてないよ?」

「ていうかついてたら逆に怖い……」

聡とルリが顔を見合わせて話をする。その傍らで、司は――。

「なんだ、コレ……」

頭に流れてくる声に、困惑していた。それは、よく聞くと歌にも聞こえてくる。

その歌は――――。

「クウガの、世界……」

空っぽの星

時代をゼロから始めよう

恐れるだけの

歴史をゼロに巻き戻す

「次の世界は、クウガだ」

次回、仮面ライダーディケイド
New Legend!!

『未確認生命体出現!!』

「雄介、聞こえる？」

「何だこりゃ……?」

「変、身!!」

第九話 「空我」

全ての力を、解き放て——！

第八話 『旅立ち』（後書き）

どうも、サバイブです。

今回は、ディケイドが使えないはずのBLACKのカードを使っていますが、僕の設定では、彼は全てのライダーの力を所有しているので、どんなライダーにも再変身できるという訳です。でも、だからといってナイトや威吹鬼のようなサブライダーのカードを持っている訳ではないので、その辺りはご容赦ください。

さあ、今回も闇先生のオリジナルライダー、ディフェンドとディサイドが大活躍しました！

通りすがりとしての使命もまっとうし、司君も立ち直りました。

これからも、仮面ライダーディケイドNew Legendをよろしく願います！

サバイブでした！

お知らせ&番外編？

あけましておめでとうございます。サバイブです。

今回はお知らせ、という事で、新しいフォームを考えて見ようと思うんですが……名前しか思い付きません！

我ながらボキャブラリーの無さに、哀しいかぎりです…（T-T）
というわけで、皆さんに新しいフォームの容姿や能力等の案を募集したいと思います。名前は《ディケイド・バーストフォーム》です。これ以外でもいいので、感想にアイディアを書いていただけると嬉しいですよ！

よろしく願います！

次は番外編です！

〈あなざーSide《SUPER BADAN》〉

ある世界に、ある一つの組織があった。その組織に今、一人の人物が帰って来た。その男の名は……

???

「待ちくたびれたぞ、結城丈二」

結城丈二

「申し訳ありません、JUDO様。予定外の干渉がありまして……」

JUDO

「予定外？ 剣崎一真のことか？」

結城丈二

「それもありますが……」

JUDO

「なんだ、勿体振らずに申せ」

結城丈二

「……《ドラス・ドール》が接触しました」

JUDO

「……………何だと？」

結城丈二

「これは我々の予想を遥かに越えています。このままでは……」

JUDO

「ちっ、鳴滝め……余計な事をしてくれた……まあ、安ずる事では無い。時の神は我々に味方をしてくれている。《村雨良》との人格交換は着々と進んでいる。これが成功すればあと一歩なのだ……結城、あれを起こせ」

結城丈二

（……………とうとうこの時がきたか）

「承知」

JUDO

「……………消えたか……………」

結城丈二

（ふん、JUDOめ、俺が裏切っていることも知らないで……《奴》と破壊者の血を分けたものを巡り合わせれば、俺の計画は実行段階に移る。そのために、破壊者の妹を蘇らせたのだ。あれは義妹などではない……正真正銘、ディケイドの妹なのだ……）

ゝあなざーSide 真由ゝ

オルタナティブ

「ねえ、師匠お。いい加減、機嫌直してくださいよおゝ」

真由

「……………」

オルタナティブ

「師匠おゝ…そんな落ち込むことないじゃないですかあ。たかがベルト一本ごときい。しかも、デルタをちよつと強くしただけでしょゝ」

サバイブ

「おい！失礼だ！」

オルタナティブ

「ん？誰……って誰もいない……まさか、ゆーれい！」

真由

「ぎゃあぎゃあうるせえんだよ、この童貞ザコ」

【One, Two, Three.】

【Rider kick!】

オルタナティブ

「スイマセンスイマセン許して下さい何でも言うこと聞きますからライダーキックだけは勘弁してくださいくださいクロックアップですきなだけ殴っていいですからどうぞライダーキックだけはあああああ（T-T）」

真由

「死ね」

オルタナティブ

「ひぎゃあああああ!!」

真由

「まったく……おちこんでるんじゃないねえっつの」

真由

「司……お義兄ちゃんと同じ名前……会いたいよ、お義兄ちゃん……」

????

「真由……」

真由

「……ふえ?」

???

「……会いたかったよ、真由」

真由

「あ、あ、ああ……」

真由

「お義兄ちゃん！」

???

「つと！おいおい、急に飛び付くなよ」

真由

「だって……だって！」

ツカサ

「……ごめんな。本当はすぐに会いたかったんだけど、あの人に待てって言われて……」

真由

「ううん、大丈夫。私、新しい力を手に入れたから、全然不安じゃなかった……」

ツカサ

「そうか……」

真由

「うん……あ、そうだ！私、お義兄ちゃんと一緒の名前の人とあつ

たよ」

ツカサ

「……どんな奴だ？」

真由

「え？あ、えと、確かデイスайдとか言ってたような……」

ツカサ

「ドールか……よし、真由。そいつじゃ無い《司》に逢いに行こう」

真由

「え、そいつじゃ無い、って……？」

ツカサ

「まあ、俺の分身……偽物ってやつかな。そいつに逢いに行く」

真由

「……私、お義兄ちゃんと一緒ならどこにでも行ける！いろんな意味で！」

ツカサ

「コラコラ」

オルタナティブ

「し、師匠……俺を、置いて、行かな、いで……」

【力尽きました】

お知らせ&番外編？（後書き）

ツカサは、本編に出て来る《司》とは別人です。

読んでいただき、ありがとうございました！

お知らせ「新フォーム！」

ボンジュール、ごきげんうるわしゅう→
妙にハイテンションなサバイブです（笑）

先日、新フォーム募集ということで皆さんから意見をいただいたのですが、わたくし個人的に闇先生の案が一番気に入りました……闇先生に考えて頂いたフォームをベースにわたくしサバイブが少々アレンジを加えて、新フォーム《メビウスフォーム》を完成させました！

イエーイ！

パフパフ！（↑ラッパ音）

アイディアを出してくださった皆様、そして、《メビウスフォーム》を考えて下さった闇先生、本当にありがとうございました！

これからも作者共々、仮面ライダーディケイド New Legend
ndをよろしく願います！

次から、新フォームの紹介です

《メビウスフォーム》

・性能

コンプリートフォームの1.5倍

・容姿

黄色い複眼。胸の模様が黄金の縁取りの青い翼になっており、シヨルダーアーマーや足の裏にもメビウスの輪のマーク。赤と銀を基調としたスーツで、マントを羽織っている。

・武器

剣型のパワーアップアイテム《メビセイバー》

・能力

メビセイバーにディケイドの仮面ライダーカードを上部の装填口に装填してフォームチェンジ。装填した際の電子音は

【SET UP!】

剣の左側にケータッチのようなタッチパネルがついており、各ライダーのマークをタッチして《F/K》のマークを押すと、下部のライドホルダーから、そのライダーの最強フォームの描かれたカードが出て来る。それを抜き取り、ディケイドライバーに装填することによってそのライダーに再変身する。

・装填例 クウガ

マークを押す。

【KUGA!】

《F/K》を押す。

《クウガアルティメット》のカードが出て来る。
ディケイドライバーに装填。

【KAMEN RIDE. ULTIMATE】

《クウガアルティメット》に変身!

メビセイバーが、クウガの武器に変化する。

・必殺技

それぞれのライダーの必殺技は発動すると、そのライダーファイナルフォームライドが出現、またはメビセイバーが変化し、それを武器に必殺技を繰り出す。また、任意でそのライダーの通常の技も発動可能。（通常の必殺技の説明は省略させていただきます）

装填例 ブレイド

ブレイドのファイナルアタックライドのカードを装填。すると、《キングラウザー》に変化したメビセイバーが、更に《ブレイドブレイド》に変化。そのまま《ロイヤルストレートフラッシュ》を放つ。

次ページからは、各ライダーの装填例です。

・仮面ライダークウガ

《クウガアルティメット》に変身。メビセイバーを、《ライジングドラゴンロッド》《ライジングタイタンソード》《ライジングペガサスボウガン》、いずれかに変化させる。

・必殺技

《アルティメットゴウラムアサルト》

デイクイドクウガアルティメット（以下からDと略）の横に《クウガゴウラム》が出現。武器を変形させていない場合、クウガゴウラムと敵を挟み撃ちにしてキックを決める。武器の場合、クウガゴウラムに敵を掴ませ、そこに各々の必殺技を叩き込む。

・仮面ライダーアギト

《アギトシャニング》に変身。メビセイバーを《シャニングカリバー》に変化させる。

・必殺技

《シャニングトルネイダートルネード》

Dアギトシャニングの横に《アギトトルネイダー》が出現。それに乗って、敵に接近。前に現れるアギトの紋章とディケイドのマークを通過して、二つの力を合わせたシャニングスラッシュを決める！

・仮面ライダー龍騎

《龍騎サバイブ》に変身。

メビセイバーを《ドラグバイザーツバイ》に変化させる。

・必殺技

《サバイブドラグレッダードラグーン》

《ドラグランザー》と《リュウキドラグレッダー》を呼出し、ドラグランザーが、ブレスで相手の動きを封じ、その隙に《D龍騎サバイブ》が《リュウキドラグレッダー》のドラグブレスと共に《サバイブライダーキック》を決める！

・仮面ライダーファイズ

《ファイズブラスター》に変身。メビセイバーを《ファイズブラスター（武器）》に変化させる。

・必殺技

《ブラスターブラスターフォトン》

《ファイズブラスター（武器）》に変化したメビソードが《ファイズブラスター（FFR）》に変化。Dファイズブラスターのフォトンストリームを伝ってエネルギーを注入。敵をロックして、巨大なビームを浴びせる！

・仮面ライダーブレイド

《ブレイドキング》に変身。

メビソードが《キングラウザー》に変化する。

・必殺技

《キングブレードエッジ》

《キングラウザー》に変化したメビソードが《ブレイドブレード》に変化。それを武器にして《ロイヤルストレートフラッシュ》を、敵全体に浴びせる！

・仮面ライダー響鬼

《装甲響鬼》に変身。

メビセイバーが《装甲声刃》に変化。

・必殺技

《アームドアナタカウェイブ》

《ヒビキアナタカ》が出現。敵全体に体当たりを喰らわせたあと、空中で《ヒビキオングキコ》に変形。そこにD装甲響鬼が飛び上がり、《鬼神覚声》を《ヒビキオングキコ》で増幅させて、浴びせる！

・仮面ライダーカブト

《ハイパーカブト》に変身。

メビセイバーが、《パーフェクトゼクター》に変化。

・必殺技

《ハイパーゼクターメテオ》

《パーフェクトゼクター》に変化したメビセイバーが《カブトゼクター》に変化。《カブトゼクター》が敵を取り押さえ、そこにハイパークロックアップ状態の《Dカブトハイパー》が、超高速で《ハイパーライダーキック》を何度も浴びせる！

・仮面ライダー電王

《電王ライナー》に変身。

メビセイバーを《デンカメンソード》に変化させる。

・必殺技

《ライナーモモタロスライナー》

D電王ライナーの横に《デンオウモモタロス》が出現。《モモタロスカード》をもったモモタロスとD電王ライナーがオーラライナーに乗り、《電車斬り》を決める。

・仮面ライダーキバ

《キバエンペラー》に変身。

メビセイバーを《ザンバットソード》に変化させる。

・必殺技

《エンペラーアローフアング》

《サンバットソード》に変化したメビセイバーが《キバアロー》に変化。矢を最大限にひくと鑢部分がザンバットソードに変化。そのまま、敵を貫く！

・仮面ライダーディケイド

《ディメンションメビウスシュート》

ディケイド《メビウスフォーム》の前に、各ライダーの最終形態が描かれた3D状のカードが出現。それを通過するとそのライダーに変身。最後にディケイドに戻り、エネルギーの刀身が伸びたメビセイバーで切り裂くか、キックで決める！

お知らせ「新フォーム！」（後書き）

闇先生、そしていろいろな案を提供して下さいだった皆様、本当にありがとうございます！

不採用になったものも、違う形で出させていただきます！

第九話 『空我』 (前書き)

前の次回予告とは違うものになってしまいました。
おまけに短いです。

スイマセン……

前話の次回予告は修正しました。
よかったら見ておいて下さい。

第九話 『空我』

「クウガの世界……」

頭を抱え、うずくまった司はそう呟いた。

司の異変に気付いたルリと聡は、慌てて司に駆け寄る。

「司さん！？どうしたんですか！？」

「しっかりしろ！！司君！！」

四つの手が、司の身体を揺さ振る。

と、そのとき。

司達のいる部屋にあるテレビが突然点き、そのテレビ局のニュースが流れた。

『——ここで、臨時ニュースです。えー、先程都内に、未確認生命体が現れました。只今、未確認生命体第四号と戦闘しているようです』

「未確認生命体……？」

「第四号……？」

ニュースを聞いたルリと聡は、揃って首を傾げる。

未確認生命体——そんなものはルリ達がいた《BLACK—RX》の世界では聞いたことがなかった。ということは、つまり。

「もう次の世界に来たってことなのか？」

顔をあげた司は、そう呟いた。気付けば、外からパトカーのサイレンの音が部屋の中に飛び込んでいた。

「……行かなきゃ」

そう言って立ち上がる司。迷わず、診療所の出口に向かって歩出す。

それに、慌てて続くルリ。

「あ、あ、ちよっと司さん!？」

床にある何かに躓きながら、診療所を出ていった司に追い付き――

「ぷにゃっ!？」

立ち止まった司の背中に思いきりぶつかった。背丈が低いので、顔がまともに背中に当たり、ルリは鼻の頭を赤くする。

「くくっ!？ちよっと、司さん!!急に止まらない、でえ……?」

顔を手で抑えて司を睨むが、彼の恰好を見て驚きの表情に変える。本人も相当驚いているようだ。自分の身恰好を見ながら、その場でぐるぐる回っている。

「な、なんだコリヤ……?」

司の服装は先程のラフな物からきっちりした制服に変貌していた。頭には独特な形をした帽子が乗り、片に掛かる紐には無線機が取り付けられている。さらに極め付けは、腰に提げているホルスター。これはもう《警官》としか言いようが無い。

「つ、司さん。そ、その恰好、どうしたんですか?」

「いや、こっちが聞きたいぐらいだ……」

二人が、門の前で途方に暮れていると、診療所から聡の声が聞こえてきた。

「おい! ニュースやってるぞ!」

「え? ホント? ち、ちよっと待って!」

「お、おい。ちよっと待て……」

司とルリはニュースをしていると聞いて、急いで中に入ろうとする。が、しかし、丁度いいタイミングで司の無線機に音が入った。『未確認生命体出現! パトロール中の付近の警官は直ちに急行せよ! 繰り返し! 未確認生命体出現! パトロール中の付近の警官は直ちに急行せよ!』

けたたましい若い声が、無線機から響く。

「……場所は？」

しかし、肝心なところを忘れて無線機の声の主は消え去った。

「おいおい……世話が焼けるな」

司は顔に手を当て、溜息を着いた。

「とりあえず……」

司はいつのまにか隣にある自転車に跨がり、

「あっちだな」

パトカーが走り去った方向へ、ペダルを踏み締めた。のろのろとしたスピードで、現場に向かう。

「――ちょっと司さん！何やってるの！中継やってますよ！中継！」

司が過ぎ去った玄関に、ルリがもういない人を呼びながらでてきた。

「ってあれ？司さん！？司さん！！」

しかし、当然その場所には誰もいない。ルリは困惑した様子で司を探した。

「……どこ行ったのよ」

悲しい呟きが、ポツリと辺りの通りに響いた。

「ウガああアア!!」

古い工場の廃屋に、一匹（一人？）のグロンギが叫び声をあげながら暴れ回っていた。積み上げられたコンテナや錆び付いて今にも倒れそうなフェンスを薙ぎ払っていく。

「ゾボザ、クウガ!!」

今の人類には全く理解不能な言語《グロンギ語》を叫んでいる。

やがて、中に飽きたのかそのグロンギー―ズ・ザイン・ダは廃屋の外へ飛び出した。

すると、ちょうどいいタイミングで警察のパトカーがそこに入ってきた。先頭の一台から女性刑事が出て来て部下達に、指令を出す。

「包囲しろお!!」

その一喝で、後からきた警官や特殊部隊がズ・ザイン・ダを包囲する。

女性刑事は、それを見て一度車に戻り、無線を入れる。

「未確認生命体7号確認、雄介、聞こえる？」

すると、ガガッという音がして相手から返事が返ってくる。

『聞こえてる。今、そっちに向かってる所だ』

「わかった。なるべく急いでくれ。興奮しているようだ」

『OK! 5分で着く!』

そう言い残して、無線はブツツと切れた。

「……よし」

女性刑事は、ホルスターから拳銃をぬくとパトカーから出て銃口をグロンギに向ける。

「撃てェ!!」

同じ車に乗っていた上司の刑事から、合図が掛かりその場にいた全ての人間がズ・ザイン・ダに向けて引き金を引いた。

ズキュウン、という破裂音が10秒程続き、鉛の弾がズ・ザイン・ダの身体に埋め込まれていく。その衝撃でグロンギは一本二歩、後ろに後ずさる。

「ウウ……ボザガギギ…ズンザキゼボ、リント!!」

しかし、彼が叫ぶと同時に銃弾は身体の外に吐き出され、傷一つ負っていなかった。上司らしき警官が忌ま忌ましく舌打ちをする。

「ちっ、やはりだめか……どうする、如月？」

上司の刑事は、銃口をグロンギに向けたまま、目線だけを女性刑事——如月桜子に向ける。

「……このまま包囲して、少しでもいいから足止めを。いずれ彼が来ます」

「よおし……撃てェ!!」

桜子の返事に納得して、男性刑事は更に合図をかける。

破裂音がいくつも響いて、その数だけズ・ザイン・ダの身体に銃弾が埋まる。

「……」

その痒みにいい加減、我慢の限界が来たのかズ・ザイン・ダは拳を振り上げると、そのまま駆け出し一番近くにいた警官を殴り付ける。

「ウガアアッ!!」

拳が警官の肋骨を砕き、辺りにメキメキと軋む音が響く。

「ぐ……ボハアッ!!」

そのまま警官は後ろに吹っ飛ばされ、パトカーの上に乗っかり気を失った。

「ひ、ひい!？」

その警官の隣にいた特殊部隊員は、今度はこいつかと言わんばかりに近づいて来たグロンギから後ずさり——

「ウガアアッ!!」

「ひっ!？」

グロンギの拳が当たる、と誰もが思った、その時、

ブウウウウウウン——!

「うおおりゃああ!!」

けたたましいエンジン音と共に一台のバイクとそのライダーが、前輪をグロンギの後ろからヒットさせた。そのまま、吹き飛ばしてドリフトして急停止する。

「……………」

そして、バイクに乗った青年は桜子に向かって頷く。

「……よし、撤退だ！！一度、作戦を立て直す！！後退しろお！！」

男にも勝る大声で、部下に指示を出す桜子。その様子を見て、

（ひえ〜おっかねえ！）

ライダーは、ヘルメットの内で冷や汗をかく。

「如月！お前も早く！」

桜子は同期の刑事に引っ張られるが、その手を上司が止める。

「ほら、後退って言われただろ。さっさと行くぞ」

そう言って、部下を引きずっていく。

「え、でも如月が！」

「あいつはいいんだよ。少しでも側にいたいだろうしな」

顔だけ桜子に向けて、小さくウィンクする。それを見て、桜子は

フツと微笑む。

「恩に着ります、先輩……」

「ウガアアアッ！！」

「どおわあああっ！？」

先程のライダー——荻野雄介はズ・ザイン・ダにボコボコにやられていた。

「つてえ〜……こんの〜、いい加減頭きたぞ！！」

立ち上がった雄介は、両手を腰に当てた。すると、フオオオという音と共に雄介の腰に銀のベルト《アークル》が出現した。ぱつ、と右手を前に突き出し薬指と中指を若干曲げる。左手は右手と同じ

形をとってベルトの上に添える。

「ビガラザ：クウガ!？」

その様子をみたズ・ザイン・ダは、驚いたように目を見張る。

と、その時、別の所から警官姿の司が現れた。

「確かこの辺……ん？」

雄介達をみつけると、彼等を凝視する。すると、遅れて司と同じ所から、桜子が姿を現す。

「お前、何やってんだ! 後退しろといっただろう!？」

司の姿を見つけると、怒ったように詰め寄ってくる。

「い、いや、俺はさっき来たばかりで……」

「しかも、何だこのカメラは!？ 私物は持ち込まないのが原則だろう!？ お前はそれでも警察か!？」

司の言い訳も聞かず、一氣にまくし立てる桜子。ふと、司は桜子の台詞に疑問を持った。

(カメラ……?)

そんなもの、持ってたっけ? と司は自分を見下ろす。すると、首からマゼンタ色の古いカメラが提げてあった。

(いつの間に……)

手にとって、しげしげとそれを見つめる。

「だいたいお前はなあ……っておい! 人の話を聞いているのか!」

司がカメラに夢中になっているのをみて、桜子はますます怒りだした。

「……あんた、女のくせにおっかねえな」

「な!？」

しかし、反撃と言わんばかりに司に痛い所を突かれ、一瞬怯む桜子。それを見てニヤリと笑う司。形勢逆転したかに見えたその時――

「変、身!！」

雄介が叫び、ベルトのスイッチをカチリと押して両腕をばっと開く。アマダムが回り、雄介の身体を赤い鎧が包んでいく。

最後に、黄金の角が形成され、雄介が立っていた場所に《仮面ライダークウガ》が現れた。

「やはりクウガか……」

司は呟きながら、その後ろ姿をパチリと撮る。

「あ、お前！何撮ってんだ！」

それを見た桜子は、急いでカメラを取り上げようとする。司はヒョイツとそれをかわすと、今度は桜子にカメラを向け、ピントを合わせる。

「はいはい……ところで一枚」

そのままシャッターを切り、桜子の怒った顔を写す。

「！……はあ」

桜子は、諦めたように肩を落とす。

しかし、次の瞬間はっとして、辺りを見回す。

「雄介……！」

見るとクウガは、廃屋の中に入り、グロンギと戦闘を開始していた。いつのまにか、もう一体グロンギが増えている。

「第三号までいる……っ雄介！」

クウガは二体のグロンギに苦戦を強いられていた。

「ふっ、クウツ！こいつらあ！」

先程から攻撃しようにも、一体に集中するともう一体が隙を狙って攻撃してくるので、なかなか攻撃が決まらない。

その様子を見て、桜子は大声でアドバイスを出す。

「惑わされるな！武器を使い！」

「言われなくても、っと！」

返事を返しながら、攻撃んかわし後ろに受け流す。

「ウウ……ガアアアッ！」

「キイエエエッ！」

「だまらっしゃい！」

体勢を整えると、変身の時と同じ構えをとる。

「超変身！」

雄介が叫ぶと、アマダムが青色に変わり回転し始める。鎧もそれと同色になり、肩のアーマーは無くなり、装甲は薄くスマートになった。

「……仮面ライダークウガ」

すると、いつの間にか桜子の後ろにいた司がカメラを構えながら、誰も聞いていない説明を始めた。

「戦闘に合わせてフォームチェンジ、周囲の物体を武器に出来る……よくできてやがる」

そして、立て続けに二枚、パチリパチリと撮る。

「まだいたのか……」

桜子は、もう呆れ果ててもものも言えない。かつて、こんなに言うことを聞かない部下がいただろうか？

「……………」

その部下は黙ってクウガを見つめている。

「はあ……………」

桜子は、本日二度目の深い溜め息を、深く深く吐き出した。

次回、仮面ライダーディケイド
New Legend!

「俺はグロンギじゃない！」

「あんたは悪魔なんかじゃない……俺はそう思うよ」

「助けに来てやったぜ、感謝しな♪」

【SWORD VENT.】

「さ、桜子さん……？」

第十話 『宿命』

全ての力を解き放て————！

第九話 『空我』 (後書き)

ありがとうございました！

第十話 『宿命』（前書き）

スイマセン！

前回の次回予告の一部を一話分先延ばしにさせていただきます！
申し訳ありません！（――；）

今回は、劉子 文先生のオリジナルライダーが出てきます。

第十話 『宿命』

「ふん、だあぁっ!!」

「ウギイ、ガハアッ!？」

とある廃工場の中で、青色の戦士と茶色の怪人二人が激闘を繰り広げていた。優勢なのは、青色の戦士——クウガ《ドラゴンフォーム》だ。手に持った杖型の武器ドラゴンロッドを操り、怪人——グロンギ達に強烈な一撃を叩き込んでいた。

「ウグウ……」

「ヌウウ……ゴボセ、クウガ!!」

苦しそうに呻くグロンギ達。鋼鉄のロッドに打ち抜かれるのは生半可な痛みではない。痛みにキレたサイ型のグロンギは飛び上がって、クウガに襲い掛かる。

「ギイヤアアッ!!」

右の拳を、超スピードでクウガに繰り出す。

「つとお!？」

それを間一髪でかわし、クウガはロッドを構える。

「だああぁぁっ!!」

それを前に突き出し、サイグロンギに今までで一番強力な一撃を打ち込む。ドグォッ!という鈍い音が響く。

「ギヤアアアッ!!」

その一撃——《スプラッシュドラゴン》を打ち込まれたグロンギは、2m程吹き飛び、ヒット部分に封印の紋章が浮かび、ベルトに向かって亀裂が走る。そのまま、バックル部分が割れ、グロンギ

は爆死した。

「ふう……次はお前か」

クウガは、少し力を抜きリラックスしながらもう一体の蝙蝠グロンギに向き直る。その手でドラゴンロッドをくるくる弄んでいる。

「ウウ……ギヤアアッ!!」

すると、蝙蝠グロンギは急に飛び上がると、クウガに向かって飛んだ。

「っ!？」

咄嗟に身構えるクウガ。

だがしかし、グロンギはクウガに襲い掛かる手前で軌道を上に向け、そのまま、工場の天窓を突き破って逃げて行った。

「って逃げんのかよ!？」

思わず大声を上げてしまうクウガ。このままでは、あのグロンギが街にいつて、人を襲いかねない。

と、そこに、一丁の銃が飛んで来た。クウガは慌ててそれをキャッチする。

「おとと……」

「雄介!」

雄介、と呼ばれたクウガは声がした方向に振り向く。そこには、薄いベージュのコートを着た女性と若い警官が立っていてこちらの様子を見ていた。女性は知っているが、あの警官は見たことが無い。

「それ、使え!」

女性は、その綺麗な顔に似合わない男らしい口調で叫ぶ。

「サンキュー、桜子さん!」

クウガは、それに応えると青い身体を一気に跳躍させ、天井の向こうに消える。

「桜子……?」

若い警官は、先程クウガが言った名前を呟き、前にいる女性を見つめた。

「——よっと！」

驚異的な脚力で屋上に踊り出たクウガは、辺りを見回しながら合図の言葉をかける。

「超変身！」

すると、腰のベルトに付いている靈石——アマダムが緑色に変わり、彼の身体や大きな複眼も同色に変わる。右手に持った銃は、翡翠色のボウガン——《ペガサスボウガン》に変形し、ここに超感覚の戦士が完成した。

「—————！！」

クウガ・ペガサスフォームは感覚を研ぎ澄ませて辺りを見回すと北の空200m辺りに、羽ばたいているグロンギを見つけた。

「ヌウ！」

ボウガンの矢を引き、弓の部分を絞る。銃口をグロンギの進行方向の少し先に狙いを定め、引き金に指をかける。そして——

「！！！」

ガチッ、と引き金を引く。その瞬間に矢を引っ張っていた手も離し、ドギュウと疾風の矢が打ち出される。

それはもの凄いスピードでグロンギに追い付くと、そのまま身体にブスリと刺さり、封印の紋章を刻み込む。グロンギは、断末魔の叫びをあげながら、爆発死した。

「…………ふう」

クウガはそれを見届けた後、変身をときもとの《荻野雄介》に戻

る。そこへ、先程の女性がやってきた。

「雄介！」

その女性——如月桜子は雄介のもとにやってくると心配そうに彼を見つめる。

「雄介、怪我は！？」

「ないない。全く問題なし！」

雄介はそれに笑顔で答える。が、口から何か流れ出る感触を感じて、手の甲で拭うとそこに真っ赤な血糊が広がっていた。

「怪我してるじゃない！」

それを見て慌てて駆け寄る桜子。コートのポケットからハンカチを取り出して、雄介の口元に押し付ける。

「いってえ！？ちよっ、桜子さん！もっと優しく！」

その余りの力加減に思わず叫びをあげて身を引く雄介。だが、そんな雄介にお構いなく、桜子は白い布切れを突き出して迫ってくる。

「嘘ついた罰よ！じっとしてなさい！」

「いや、俺もさっき気付いたんだって！あいつらなんか力強えなあとは思ってたけど、まさか内臓やられるとは思わなくてさ……」

だか、そんな雄介の必死の抵抗虚しく、いや、むしろ先程よりも激しい面構えになって雄介を追い掛ける。

「な、内臓！？ますますダメじゃない！ほら、さっさと病院に行く！」

その台詞を聞いた雄介は、顔を真っ青にして屋上の隅っこに走って縮こまった。

「びよ、病院だけはやめてくれ！あんなところもう二度とごめんだ！」

その危機迫る様子に、桜子は何事かと首を傾げる。

「なんでそんなに嫌なの？」

その桜子の言葉に、雄介はブルツと震えた。

「だってよお……あの、猿渡って先生があ……」

「ああ、なるほど……確かに彼は変わってるけど、医者としては腕

「がいのよ？」

納得したように頷いた桜子は、それでも諭すように雄介に話し掛ける。

「そりゃ、わかってるけどさ……あの人、俺を見るときの目つきがなんかいやらしいっていうか、悍ましいっていうか……」

ぶるるっ、とさっきよりも激しく震えると更に縮こまり、抵抗の意を見せる。

「とにかく、俺はあそこに行くなんて、ぜえ〜つたいに嫌だからな！」

雄介の頑としてもここから動かない様子に、桜子は呆れた息を吐き出した。

「小学生か、お前は……」

と、ここで桜子は何かを思い出したように顔をあげ、辺りをクルリと見渡した。屋上の入口を見つけ、そこをじっと見つめる。

「あいつ、どこ行った……？」

「へくしっ！！っあゝ、風邪か？」

その頃、桜子の言う《あいつ》こと司は、自転車をゆっくりこいでルリ達がいる診療所に帰っていた。

都合悪く赤信号に引っ掛かり、一旦停止すると、首に提げているマゼンタ色の古いカメラを手にとって、眺め回す。

(写真を撮ったのはいいが……ちゃんと撮れてるのか?)

なにせ、司は記憶が無いので以前にカメラを扱った事があるかどうかもわからない。先程撮った時も、手が勝手に動いたので苦労はなかったが、もしかしたらピンボケしているかも知れない。

(しかし、このカメラ……フィルムとかちゃんと入ってるのか?)

どうにもわからないことだらけで、もはややした気持ちが湧いてくる。司は改めて実感した。これが、記憶を失うという事なのかと。(いつか俺も、記憶を取り戻して、あの『司』のように、楽しく旅をすることが出来るのだろうか……)

BLACK-RXの世界で出会った、自分と同じ名前で、自分と同じ『宿命』を背負う存在。また会えると言ってくれた数少ない《仲間》であり《戦友》。彼と彼を囲む仲間のように、いつか自分は心の底から笑えるようになれるのだろうか。

(……俺は、一体どうすればいい?)

答えを返してくれる者など、誰もいない。

司は急に寂しくなった。いつかルリ達も自分から離れていってしまうのではないか。自分は破壊者だ。可能性はある。

(……くそっ)

司はかぶりを振り、その思考を強制的に振り払う。

顔を上げ、青信号になっていることを確認して、自転車を漕ぎ出す。

急いで帰ろう。

ただそれだけを思い、司はペダルを踏み締めた。

司が診療所につき、ドアをガチャリとあけると中からドタバタと慌ただしく、聡が出迎えに来た。

「司君！大変だ！ルリが、ルリが！」

「お、落ち着いて！一体、どうしたんです！？」

聡の慌てように、何やらただ事ではないと悟った司。自身も心を落ち着かせながら、聡を宥める。

「ルリが…ルリが倒れた！」

その言葉に、司は床が抜ける思いがした。あまりの出来事に、司は暫く何も喋れなかった。口をなんとかぱくぱくさせたあと、ようやく言葉を口に出す。

「倒れた、って……どうということだ？」

「わからない……ニュースを見てた時にルリが司君を呼びに行って、暫くたっても帰ってこないから、心配になって、外に、出てみたら、ルリが倒れてて……」

聡は何とか平常心を保っているようで、何とか喋れている。だが、相当参っているらしく、顔に疲労の色が浮かんでいる。

「息は……してるのか」

「ああ……寝てるって感じた」

それを聞いて、司はほっとした。あまりにも深刻になっていたから、ルリが危篤状態なのかと思っていたのだから、違ってなによりだった。

「ルリは、どこですか？」

ようやく落ち着いた雰囲気になり、司は安心してルリに会いに行くことにした。

聡から、ベッドで寝ていると聞いて、すぐにそこに向かう。

そこには、静かな寝息を立てて眠るルリがいた。

（やれやれ……心配しすぎだ）

司は、一気に体の力をぬくとそのまま椅子に腰掛けた。

ふっ、と息をつき、ルリをじっと見つめる。

（必ず守って見せる……必ず）

ルリは何も無い荒野に立っていた。

荒々しい大地が唸り、無数の断崖絶壁が孤高に立ちはだかっている。

（ここは……？）

辺りをキョロキョロ見渡しながら、ここが何処なのか確認する。

しかし、ルリにはこの場所が何なのかわからなかった。

と、そこに――。

「――はあああああ――！」

独特の構えをしながら、蝙蝠を腰のベルトに付けた吸血鬼のような《仮面ライダー》が、ルリの前を走り去った。ルリは、そのライダーに見覚えがあった。そう、それは――

（渡さん……？）

かつて自分の世界に現れ、司を導き、世界の崩壊を食い止めた青年、紅渡が変身する仮面ライダーキバだった。

（でも、今の声、女の人だったような……）

しかし、ルリが聞いた声は、紅渡のそれではなくもっと高い、女の声だった。

彼女（？）が向かった先にいたのは――。

（司さん………！）

ルリが視線を向けた先に立っていたのは、マゼンタ色のライダー《ディケイド》だった。しかし、その目は怒りに歪み、プレートの手端は紫色に光り輝いている。

そこに、キバが渾身の右フックを繰り出す。

「ハッ!!」

ディケイドは、その数瞬の間にカードを装填し、発動させる。

【ATTACK RIDE. INVISIBLE!】

「なっ!？」

ディケイドは姿を消し、キバは攻撃を交わされその場でよろめく。

「くっ……どこだ？」

ディケイドを探し、辺りを警戒して見回す。と――

【ATTACK RIDE. CHARGE-BLAST!】

どこからともなく、大きなマゼンタの銃弾が飛び出して来て、キバに降り注ぐ。

「うっ!？」

とっさに腕でガードするキバ。しかし、次の瞬間、赤い無数の斬撃によって銃弾は全て弾かれた。

【Three:Two:One…】

【Time Out.】

電子音声と共に、高速の世界から帰って来たのは、仮面ライダー

《ファイズ》。赤い目をした《アクセルフォーム》となり、先程の斬撃を、その右手に握る《ファイズエッジ》で切り弾いたのだ。

【Reformation】

《ファイズフォン》に差し込むメモリを入れ替え、元の姿に戻る。
「そこか!!」

キバは、銃弾が来た方向からディケイドの現在位置を推定し、攻撃を仕掛ける。そのために選んだのは――

「バッシュァーマグナム!!」

緑色のファンガイア《バッシュァー》から力を借りる《バッシュァーマグナム》を持つフォーム、《バッシュァーフォーム》だ。

銃口を、先程の位置に向け、トリガーを引く。エメラルド色の銃弾が、ディケイドを襲う。

ドガアアアン、と爆発し、辺りに煙幕が立ち込める。キバとファイズは警戒しながらそちらに近づいていく。と――

【FINAL ATTACK RIDE DE DE DED ECADE!】

電子音声の後、ファイズの前に3D状のカードが並び、そこをディケイドが通過していく。

「なあっ!？」

もちろん、ファイズはかわせる余裕もなく、辛うじてファイズエ

ッジで防いだもののそれは直ぐに碎かれ、ファイズの胸へディケイドの蹴りが炸裂する。

「うわあああああああ!？」

激しい爆発と共に、ファイズはその姿を消す。そして、後に残ったのは消え去った彼自身のカードだけだった。

「……………」

ディケイドはそれを掴むと、ゆっくりとキバを振り返り、新たなカードをライドブッカードから取り出す。

「……司……どうして……?」

キバは悲しげにディケイドに話し掛けるが、それに動揺した様子もなくディケイドは攻撃に移る。

【FINAL ATTACK RIDE. DE DE DE DE
ECADE!】

ディケイドの前に3D状のカードが並び、それに向かってライドブッカード銃口を向ける。狙いは、もちろんキバ。

「くっ……!」

キバは、無駄なあがきとはわかってはいるが、少しでもディケイドが元に戻るようと身構える。

そして、ディケイドが引き金を引いた。

銃弾がカードを通過する度に威力を増し、巨大なマゼンタの塊となってキバに襲い掛かる。

「…………っ!」

絶体絶命のキバ。と、そこに――。

【FINAL ATTACK RIDE. DE DE DE DE

CIDE!】

紫の銃弾が、ディケイドの攻撃を相殺してキバの身を守った。

「な……………!?!」

「……………」

キバは、何かと辺りを見渡し、ディケイドは銃弾がとんできた方向に邪悪な瞳を向ける。そこに立っていたのは、全てのライダーを引き連れた闇の《支配者》——ディサイドだった。

「……ディケイド…お前を倒す……」

「許さない……貴方だけは!」

「司の敵は、私の敵……覚悟しなさい、ディケイド!」

「世界は、僕たちの力で守ってみせる!」

ディサイドに続くように、クウガ、ディフェンド、そして、もう一人のキバがディケイドに向かって叫ぶ。

その直後、後ろからディケイドは邪悪な気配を感じ取り、その方向に振り返る。そこにいたのは——

「フウウ——フウウ——!」

黒い鎧に黄金のライン。四つ股にわかれたクワガタのような角。そして黒い瞳——究極の闇が、そこに立っていた。

「はああああ——!?!」

アルティメットクウガは、右腕に破壊の力を込め、その拳に炎を宿す。

「……………!」

ディケイドも破壊する光を右腕に宿し、アルティメットクウガと対峙する。

「——っ破あ!?!」

「……………っ！！！！」

「きゃああああ——」

やがて、二つの拳が混じり合い、世界を破壊する《大戦》の火ぶたが切って落とされた。

……………

……………

……………

「ルリ！」

「！！」

大声を耳元で感じて、ルリは悪夢から一気に解放され意識を取り戻した。先程の声の主——海原聡が心配そうに、ルリの瞳を覗き込む。その瞳には、子に対する親が向けるような眼差しがあった。

「ルリ……大丈夫か？ ひどく、うなされてたみたいけど……」

聡の問い掛けにルリは答える気力すらなく、再びベッドに横になり目をつむる。

しかし、何かに気付いたように再び目をあけると部屋を見渡す。

「司……さんは？」

その言葉に、快復したと思ったのか聡は安心させるような口調でルリに応える。

「司君ならまた出て行ったよ。やるべきことがある、とか何とか言

って」

「……………そうですか」

ルリはそれだけを言うと、寝返りを打って聡に背を向ける。後ろで聡が溜息をつくのを感じながら、ルリは布団の中に顔を埋める。

（さっきの夢……司さんが皆の敵になってた……）

先程、ルリがみた夢。

果てしない荒野に佇む司の姿は、どこか悲しげで、しかし、憎しみに燃えているようだった。これからの旅で、司は《破壊者》を受け入れるようになってしまふのだろうか。そしていつか、自分のことも忘れて、ただ殺戮を繰り返していく存在になってしまうのだろうか。

（……………嫌）

胸の中で、呟く言葉。

それは、誰にも届くはずのない心の叫び。

（……………嫌……司さんが……私の事、忘れるなんて……そんなの……絶
対に嫌！）

だって、私は貴方の事が――。

ルリは、布団を噛み締めながら静かに泣いた。

「ふう……疲れた」

その頃、司は山奥にある辛うじて舗装された道を自転車で突き進んでいた。ママチャリの錆びたチェーンがギシギシと軋む音が聞こえる。

「この辺りか……」

そう呟いて、ブレーキをかける司。実は、つい30分前にたまた無線が入ったのだ。内容は、二体のグロンギが診療所の近くにあるダムで暴れているというものだった。正直、ルリの事が心配だったが、聡が司の背中を押したのだ。

『君はこの世界の仮面ライダーってやつを探さなきゃいけないんだろ？大丈夫、ルリは私がちゃんとしてるからさ』

わはは、と笑う聡に負い目を感じながらも司はルリを置いて、出て来たのだ。

（……：しょうがない。今は俺ができることをしていくしかない）
考えながら自転車のスタンドを立てる。

「それで……グロンギはどこだ？」

答えが反らない質問をしながら、司は辺りを見回す。

そこは、長いトンネルを抜けた場所だった。辺りを雑木林が囲み、まだ昼だというのにそこだけ何となく薄暗い。と――。

「――！」

ガサガサッと何かがうごめき林が揺れ、気配を感じ取った司は身構える。懐に隠したディケイドライバーに手を延ばす。

「……それで隠れているつもりか？」

司が林に向かって声をかけると、そこから二体のグロンギが姿を現した。

『……貴様、一体何者だ？』

『空我では無いようだが……：新手的リントか？』

二人が喋っているのは、普通の人間では理解不能なリント語。しかし、司はなぜかその不可解な言語を理解する事ができた。

『悪いが、俺はあんたらの探してるクウガじゃない。俺は……：ディ

ケイドだ』

しかも、司の口から発せられるのはグロンギが話しているそれと同じものだ。意外にも、司はその事に驚かない。

『フン、悪魔か……ならば、早めに消しておいたほうがいいな』

『覚悟しろ、ディケイド!』

そう言った二体のグロンギは司に向かって拳を振り上げ襲い掛かってくる。

「おいおい、短気は損気だぜ……変身!」

【K A M E N R I D E . D E C A D E !】

司はバックルにカードを装填し、九つのライダークレストに包まれてマゼンタ色の仮面ライダーディケイドに変身。一人目の攻撃を交わし、二人目にカウンター気味のパンチを食らわす。

「ふっ!」

「ウグッ!？」

グロンギは、数メートルほど吹き飛び、殴られた箇所を押さえてうずくまる。

「うう……ガアアアッ!」

攻撃を交わされたグロンギは、怒りをあらわにしてディケイドに再び襲い掛かる。司——ディケイドは振り返り際にライドブツカーをソードモードにして抜き取り、居合抜きの要領でグロンギに刃を切り付ける。

「ハッ!」

「ウギギィッ!？」

鋭く切り付いた攻撃に、グロンギはよろめきディケイドを睨み付ける。

「——はああっ!」

ディケイドは、再びライドブッカードを構え、グロンギに向かって駆け出す。

「ふっ、てやああっ！」

「ヌアアアッ!？」

とどめの二撃をグロンギに刻み込む。刻まれたディケイドの紋章がやがて封印の紋章に変化して、グロンギの体に亀裂がはしる。

「ぐ……ギ………ウオオオワアア!!」

断末魔をあげて、四散するグロンギ。

「残るは、お前一人か……」

「ウギギ………」

ディケイドは、残る一人のグロンギに向かって視線を向ける。そして、新たなカードをライドブッカードに装填する。

【FINAL ATTACK RIDE. DE DE DE D
ECADE!】

電子音の後、ディケイドとグロンギの間に十枚のディケイドの紋章が描かれた黄色い3D状のカードが並ぶ。

「はあっ!!」

ディケイドが飛び上がると、それにあわせてカードが移動。狙いはグロンギに定めたままだ。

「ふっ！」

キックを繰り出し、カードを通過していく度にディケイドのスピードが増していく。

「ギギッ!？」

目の前にある巨大なカードが邪魔でグロンギはディケイドをみることができない。身構えるが、その程度で防げる技ではない。

「あああああ———!!」

やがて、刻一刻と迫る最後のカード。グロンギの命もあと僅かである。

そして――――。

「ハアアアアッ!!!!」

「ヌアアアアアッ!!!」

最後のカードを通過して、グロンギに《ディメンションキック》を打ち込む。ディケイドは、コンクリートの地面にスタツと着地。蹴った足をパンパンと振り払う。

グロンギは、ディケイドの技が決まったと同時に爆発。後に残るのは、めらめらと燃え盛る炎だけだった。

「やれやれ。やっと終わったか」

立ち上がり、変身を解かないまま溜息をつく司。そのまま辺りを見渡し、帰るかと自転車に向かおうとした、その時。

ブウウウウウン――――。

けたたましいエンジン音と共にやって来たのは、金の装飾を施されたバイク《トライチェイサー2000》と、そのライダーである荻野雄介。

雄介はヘルメットを取り、ディケイドである司を睨む。

「……お前が、第十号か!」

「は?」

雄介の言ったことに司はキョトンとして声をあげるが、雄介は気に入った様子もなく、銀のベルト《アークル》を呼び出し、変身の構えに入っている。

「変、身!」

そして、彼は赤い鎧に身を包む、赤い複眼と黄金の角の戦士――《仮面ライダークウガ》にへと変身した。

「はあっ!」

「うおっ!」

クウガに殴られて、後ろによろめくディケイド。しかし、直ぐさま体勢を立て直すと、クウガに向かって叫ぶ。

「待て待て！俺はグロンギじゃない！」

「うおりゃっ！」

しかし、全く聞く耳を持たうとしないクウガ。そのまま、ディケイドに向かって攻撃を続ける。

「って聞けっての！」

次々と来る蹴りや拳を交わしながら、懸命に叫ぶ司。だが、クウガは攻撃をやめる気配が一行にない。

と、クウガの鋭いパンチがディケイドの胸に決まった。

「がっはあ！？」

かなりの距離を飛ぶディケイド。ごろごろと地面を転がり、止まった所で俯せになる。

「くっ……仕方ねえ」

そう行って立ち上がるディケイド。その右手はライドブッカーを開いていた。

「口で言ってもわからねえなら、拳でわからせてやるよ」

言いながら一枚のカードを取り出す。そこに描かれているのは黒いライダーだ。それをバックルに装填して、発動させる

「……変身！」

【K A M E N R I D E . B L A C K !】

電子音の後に、バックルが明るく発光。ディケイドの身体を黒色のメタリックボディが包み込む。やがてそこに現れたのは、真っ赤に燃える愛の戦士《仮面ライダーBLACK》だった。

「姿が！？」

クウガは姿が変わったことに、とても驚く。

BLACKに変身したディケイドは、掌をパンパンと打つと薬指と小指を曲げた右手をクウガに向かって突き出す。

「行くぜ?……ダアアッ!」

「うわっ!」

油断していた時を突かれ、思わずのけ反るクウガ。D-BLACKは次々と、パンチやチョップを繰り出す。

「ふっ、はあっ!」

「うわっ、ととっ!」

それらを、すれすれで避けるクウガ。しかし、徐々にD-BLACKの攻撃が、クウガに当たるようになってきた。

「くそっ……超変身!」

クウガはこの危機から脱する為に、新たな力を呼び起こす。アマダムが赤から紫に変わり、彼の姿も、同色のがっちりした鎧に変わる。そこに現れたのは、大地の力を宿した紫のクウガ《タイタンフォーム》だった。

「だりゃッ!」

「うおおっ!」

D-BLACKの攻撃を自慢の怪力で押し戻すクウガ。そのまま、トライチェイサー2000のグリップを引き抜き、《タイタンソード》にへと変化させる。

「はああ——だああ!」

上段に構えてD-BLACKに斬り掛かるクウガ。しかし、それは突然に現れた銀色の壁に弾かれてしまった。

「な、何だコレ!」

体勢を立て直しながらクウガは、両者の間に立つ巨大な壁を叩く。

「これ……は」

ディケイドは、元の姿に戻ると銀色の壁に目を向ける。この壁は、前の世界——《BLACK-RX》の世界で現れた壁と同じものだった。

「ということは、つまり——」

やがて、その壁がはれると三人の人影がその場所に立っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

綺麗に立ち並んでいるエージェントのような恰好をし、黒いサングラスをかけている男達がディケイドとクウガの間に立っている。

「な、何だコイツら……？」

「……………」

微動だにしない三人を見て、首を傾げるディケイドとクウガ。すると、中心に立っていた男が懐から何かを取り出した。それは――

「な、あれは……！」

その男が取り出したのは、九つの紋章が描かれていない《ディケイドライバー》そっくりのものだった。

他の二人も同じものを取り出すと、腰に装着しサイドハンドルを開く。そして、ディケイドに似た物が描かれたカードを取り出し、顔の前で構える。

「……変身」

真ん中の男が呟き、カードをバックルに装填する。

【KAMEN RIDE】

他の二人も後に続くように、カードを裏返し、《D》と書かれたほうを表にしてバックルに装填する。

【KAMEN RIDE】

そして、三人同時に開いていたサイドハンドルを閉じ、カードを発動させる。

【:D!】

すると、三人の前にそれぞれ一つのライダークレストが現れ、スーッ化して男達を包む。バックルから九枚のプレートが突き出し、顔面に突き刺さる。しかし、ディケイドのように真ん中のプレートの先端は光らず、スーッにも色が走らないモノクロのディケイドが出来上がった。しかも、ディケイドなら左腰に提げてある筈のライダーブッカーを彼らは持っていない。

「:っしや行くぞお!!」

真ん中のリーダーらしき男が声を上げると、脇の二人は武器を取り出す。右の奴が持っているのは、朱く細長い刀身の《ファイズエッジ》。左が持っているのは、青い薙刀の《ストームハルバート》。そして、最後に真ん中の男が取り出したのは、先に赤い鬼石のついた《音撃棒・烈火》。

「――っはあ!」

「たあっ!」

「でいやああっ!」

三人は、それぞれの武器を構えてディケイドとクウガに襲い掛かる。

《音撃棒・烈火》と《ファイズエッジ》を持った二人がディケイド。《ストームハルバート》を持った一人の《D》が、クウガに襲い掛かる。

「っ!?!くっ!」

「って!?!ぬあっ!」

攻撃を受ける二人は、交わしたり武器で受け流したりしている。が、クウガは力に対し相性の悪い速さの攻撃なので、防ぎきれないでいる。ディケイドも、一対二という不利な戦況の上、相手の連携攻撃により一方的な戦いになっている。

「くっ、何なんだお前！超変身！」

クウガはこの危機から脱する為に、悪態をつきながらその身を速さ重視に置いた青の戦士に姿を変える。それと、同時にタイタンソードだったものがドラゴンロッドに変わる。

「ふん！！はあっ！！」

「てやっ！！うおりやっ！！」

お互い、速さで勝負しているので互角の戦いを繰り広げている。

一方、ディケイドは一人を相手にするともう一人が攻撃してくるという無限ループに嵌まっていた。ファイズエッジを持ったDを攻撃すると、背後から《鬼棒術・烈火弾》が飛んでくるのだ。

「はあ、はあ……くそっ、二人相手は流石にキツイか」

そう呟くディケイド。

すると、彼の横に先程現れた銀色の壁が現れ、その向こうから一人のライダーが現れた。

「……よう、ディケイドさん」

手を上げて、ディケイドに声をかける謎のライダー。ディケイドは突然、現れた謎の人物に怪しむような視線を向ける。

「……何だ、貴様は？」

謎のライダー出現に、二人のDは攻撃をやめ、そのライダーに視線を向ける。

そのライダー……全体的に丸みを帯び、顔に象のような牙が着いていて、腰に象の紋章がついたカードデッキを納めている青いライダーは、二人に向き直り楽しそうに口を開く。

「俺の名前は、零野剛……」
れいのつよし

ぱっと、両腕を斜めに開き、己の名を口にする。

「仮面ライダー、エルバだ！！」

そう高らかに名乗った後、エルバというライダーは拳をぐっと握りガッツポーズをとる。

「っしやあ、決まったあゝ！！俺、今チヨーかっこよくね？なあ、かっこいいだろ？な！？」

調子に乗って、周りに聞きまくるエルバの様子に、二人のDとデイクイドはただただ呆然としていた。

「お、お前、一体何しに……」

そのようやく口を開いたデイクイドの言葉に、エルバははっとして頭を叩く。

「つとイケネ。危うく、何もせずに帰っちゃまうところだった（笑）」

笑い事じゃねえだろ……とデイクイドはため息をつく。そんなデイクイドに、エルバは勝ち誇ったように胸を反らす。

「安心しな。助けに来てやったぜ！」

またしても偉そうなエルバに、デイクイドは呆れ果てていた。

そんなことは知ってか知らずか、エルバは二人のDに再び向き直り、右手の人差し指を二人に向ける。

「俺様が着いたからには、もう好きなようにはさせねえぜ！！」

そういうと、腰のカードデッキから一枚カードを抜き出し、籠手に装填する。

【SWORD VENT.】

すると、どこからか長方形の剣エレファンソードが飛んできて、エルバの右手に柄が収まる。

「っしやあ……行くぜえ……！！」

「ああ……はあああ！！」

デイクイドとエルバは、頷きあいそれぞれの武器を構えて、敵に対峙する。

「…………ちっ」

「…………ふん」

二人のDも、ファイズエッジと音撃棒・烈火を構えて戦闘の体勢に移る。

やがて、四人同時に地面を蹴る。

「やあああああ！」

「はあああああ！」

「ウオオオオ！」

「ダアアア！」

そして、刃刃が混じり合い、四人のライダーバトルが始まった――。

次回、仮面ライダーディケイド New Legend!

「あんたは悪魔なんかじゃない……何となくそんな気がするんだ」

「やっぱ俺最強〜〜♪」

「桜子さん!?!」

「こいつは大切な人の為なら命を懸けることが出来る……それは、お前がしようとしていることよりずっと偉大で栄光あるものだ!」

全ての力を、解き放て———!

第十話 『宿命』（後書き）

どうも！。

遅すぎる更新申し訳ありません！サバイブです！

今回は、ちょっとルリの夢の下りがちょっとグダグダ……読みにくいという事がございましたらご連絡下さい。サバイブは24時間（は流石に無理か……）、年中無休で受け付けております！

さあ、今回も闇先生のディサイドに出ていただきました。さらにさらに、新たなオリジナルライダー、エルバにも出ていただきますます盛り上がって参りました！劉子 文先生、ありがとうございます！

今回出て来た《D》は、仮面ライダーではありません。ディケイド以外のライダーの武器を持つ、SUPER-BADANの兵士みたいなものですね。性能は、ディケイドよりも下ですが機動性に優れています。以外と重要な敵キャラなので、皆さん覚えて下さい！

受験シーズン真っ只中！

全ての受験生に幸あれ！

サバイブでした！

第十一話 『破壊』（前書き）

スイマセン！

本当、スイマセン！

ようやくの更新です！

サバイブです！

久しぶりだと言うのに文章グダグダで：ホントもう頭下がりがりっぱなしです！

お詫びと言っては何ですが、今回から後書きに超スピノフまがいの事をやっていきたいと思います。
よかったら読んで見てください！

第十一話 『破壊』

「ふんっ！はあぁっ！」

「だぁっ！しゃあぁっ！」

二人のライダー、ディケイドとエルバ、そして二人の刺客《D》達の戦いは熾烈を極めていた。ライドブッカーとエレファンソード、音撃棒・烈火とファイズエッジが刃を交える度、彼等の間に戦慄が走る。

「はっ！うおりゃっ！」

「っ！ふっ！」

クウガともう一人の《D》も、同じ蒼土士の武器で一進一退の攻防を繰り返していた。巧みな技と技とがぶつかり合い、お互い、一歩も譲らない。

「はっ！」

「だはっ！？」

とここでディケイドがファイズエッジを持った《D》に、一撃を入れられた。ごろごろと転がって受け身をとったあと、ライドブッカーの刃を地面に突き刺し支えにして立ち上がる。

「ちっ、やれやれ……仕方ない。お前等に王子の力を見せてやる……！」

言いながら、ディケイドはライドブッカーから新たなカードを取り出す。それは前の世界のライダー……《南光太郎》が変身するライダーの力を宿したカードだ。

「変身！」

それを、ディケイドライダーに装填してサイドハンドルを閉じる！

【KAMEN-RIDE. BLACK-RX!】

ドライバーから電子音声が流れると、ドライバーの中心が青白く光り輝き、ディケイドの身体を黒と緑のボディが包み込む。その複眼は大きい真っ赤な瞳に変わり、額からは二本の触角が伸びている。それは、光の王子仮面ライダー《BLACK-RX》！

「え！？す、姿が変わった！？っと！」

攻撃を交わしながら、クウガはディケイドの新たな『変身』を見て、驚きの声を上げる。まさか、自分以外に姿をかえられる奴がいたとは思わなかったのだ。

「さて、手始めに……」

それを気にした様子もなく、ディケイドBLACK-RXはライダーブッカードにある次のカードを掴む。

「これだ……！」

抜き出した後、すぐにバツクルに装填する。

【ATTACK-RIDE. OREWATAIYOUNOKO
!】

「……俺は太陽の子……！」

そして、敵全体を示すように腕を突き出し、《南光太郎》がするそれと同じようにポーズを決める。

「仮面ライダーBLACK!RX!」

「……………」

「……………」

「……………」

三人の《D》は嘩然とし、攻撃する手が止まる。

「え……あ、今がチャンス！」

エルバは、一瞬ディケイドの奇行に動きが止まったが、相手も同じように固まっているのを見て、チャンスとばかりにカードをデッキから取り出し、箆手に装填する。

【FINAL VENT.】

「ブウオオオオオオオオ！！！！」

すると、音撃棒・烈火を持ったDの後ろにエルバの契約している象型モンスター《エレファード》が出現して、その巨大な足踏みで大地を揺らす。

「なっ！？くあっ！！」

その揺れに、Dはバランスを崩し前によろめく。そこに、飛び上がったエルバがDの胸目掛けてキックを繰り出す。

「でいやあああああ！！！！」

エルバの蹴りをまともに喰らったDは、そのままエレファードの足元まで吹き飛び、痛みに苦しみもがく。

「が……は……っ！？」

「バオオオオオオオオオ！！！！」 その上に、エレファードの巨大な足が襲来。Dの身体を何度も何度も踏み付ける。

「バオッ！！バオッ！！バオッ！！！！」 「がっ！？ぐあっ！！オゴオっ！？」

踏み付けられるたびに、苦しげな声を上げるD。重量のあるエレファードの足は、その分、破壊力も尋常なく高いのだ。

そして、とどめの大きな一撃が、烈火を持ったDを襲う！

「ブオオオオオオオアア！！！！」

「ぬあああああ！！？」

Dは悲鳴を上げながら跡形もなく碎け散った。

技を放ったエルバはその様子を見届けると、右拳を握り高く振り上げ勝利のガッツポーズを決める。

「うおっしゃあ！！見たか、俺の必殺クラッシャープレスウ！！！！」
歓喜の雄叫びを上げながら、その場で跳びはねるエルバ。

残りのDは、一人がやられたことにはっと目覚め、エルバとディケイドBLACK-RXを睨む。

「おのれえ……よくも仲間を！」

「こうなったら、一人ずつ潰してゆくのみ……！！」

そう言って、二人は一人のライダーに集中して攻撃を仕掛ける作戦に変更。

狙いは……クウガ。

「はああああっ！！」

「やああああっ！！」

「うわっ、何だよ！？」

クウガは、突然自分に攻撃が集中してきた事に驚き、しかし、自慢の速さをもってファイズエッジとストームハルバードの刃をかわしていく。

「でええいつ！！」

「らああっ！！」

しかし、いくらかわしても赤と黄金の刃はとどまる事を知らない。クウガは、それらを必死にかわしたり、ドラゴンロッドで受け流す。
「くっ、このっ、うおっ！！？」

段々と追い詰められていくクウガ。敵の刃が青龍の装甲を掠め始める。と——

「はああっ！！」

「なっ!!!?」

突然、ストームハルバードを扱うDが飛び上がり、獲物を縦一線に振り下ろしてきた。思わず、ロッドを横に構えて攻撃を受け止める。何とか、受け切ったものの、上段に受けてしまったため、身体前方ががら空きになってしまった。

「ふっ、馬鹿め……!!」

そのがら空きになった懷に、ファイズエッジを構えたDが飛び込んでくる。

（しまっ——）

後悔先に立たず。

クウガが死を覚悟したその瞬間。

【ATTACK—RIDE. OREWA—I KARIN—OU
JI!】

【STRIKE VENT.】

襲われていたクウガの身体を、空中を移動するスライムのようなものがさらい、ファイズエッジで攻撃していたDの身体を、長い槍が横から貫く。

「なにっ!?!」

「ぐうわああああ!?!」

槍——《エレファング》に貫かれたDは爆死。残った最後のDは、クウガとそれを包み込むスライムを目で追う。

スライムは、クウガを投擲のポーズから戻るエルバの隣へゆつく

りと着地させる。

「おっとと……」

そして、自身はクウガの前で元の姿に戻る。クウガに背を向けて立っているのは、蒼い身体に、怒りに燃える真っ赤な瞳のライダー。

「俺は怒りの王子……RX！VAIO—RIDER！」

そう、Dバイオリライダーだった。

クウガは、その後ろ姿を見てひっそりと呟いた。

「あんた……俺を助けてくれたのか？」

しかし、それはDバイオリライダーに聞こえてしまったようで、少しふりむくと再び前を見詰めてそのまま答える。

「俺は破壊者だ。俺の敵は全て破壊する……それだけだ」

Dバイオリライダーの言葉は素っ気ない。だが、クウガはそれが彼の照れ隠しだということが直感的に分かった。

（こいつ……案外いいやつなのかも）

悪い奴なら、危機に瀕している知らない奴を助けようなんてしない。クウガ——荻野雄介にはそれが分かっているのだ。

「さっすがディケイド！俺様との連携もばっちりじゃ〜ん♪」

エルバは、ディケイドの肩をぽんぽんと叩く。と、何かに気付いたように顔をあげると、うなだれたようにがっくりと肩を落とした。
「ありゃ〜、もう時間切れか……ま、あんたら二人なら大丈夫だよな♪」

そういうとエルバは、突如後ろに現れた銀色のカーテンに向かって下がり始めた。

「あばよ！ライダーズートップ！」

そう言い残して、エルバは完全に姿を消した。

「ちっ……覚えてろ！」

残り一人のDも、腕を上げて銀色のカーテンを出現させると、その向こう側に消えて行った。

「………何だったんだ、今のは……」

クウガは変身を維持したまま、腑に落ちない様子で呟く。

「……さあな」

ディケイド——水野司は変身を解きながら、その眩きを風に乗せて飛ばした。

「で、何でお前がここに居るんだ？」

苛々した様子で、椅子に深く座る司を睨み付けているのは桜子。

あれから、司は雄介に誘われて、桜子と一応、司が勤めている警察のグロンギ対策本部までやって来ていた。

「雄介……」

「は、はいっ!？」

桜子に睨まれた雄介は、その瞳の鋭さに思わず背筋を伸ばし、肩を狭くする。

「何でコイツをここに連れてきた……?」

「え、だ、だってこの人、警察なんだろう? だから連れてきたんだけど……」

「……ここは刑事しか配属されていない。所轄が配属されるとしたら、それは雑用ぐらいなもの。よってこいつはこの場に相応しい人間ではない。消えろ」

そう言い捨て、司に向かってシッシッと手を振る。その桜子の態度に、雄介は怒ったように机を叩く。

「そりゃあないよ桜子さん! この人はさっきグロンギに襲われそうになったのを助けてくれたんだから! な、そうだよな!？」

雄介は司の顔を覗き込みながら、尋ねる。

司は、鬱陶しそうに顔をしかめると頬杖をついていた手で雄介の顔を指差す。

「さっきからこの人この人って……俺の名前は水野司だ。覚えておけ」

「お、おう。ワリイワリイ——まあ、そんなわけで！」

しかし、雄介は司の迷惑そうな態度も気にした様子もなく、司の肩をバンツと叩くとグイツと桜子のほうに向ける。

「司が俺の命の危機を救ってくれたんだ。ちっちゃいことは気にすんなよお。ねえ、桜子さくん」

何故か司の肩を揺すりながら桜子に懇願する。がくがくと司の首が振り子のように揺れる。

そんな雄介と司を見て、桜子は未だに牙を剥いて警戒している。まだ司の事を信じ切れないようだ。

と、司はそろそろ我慢の限界なのか、雄介の手を肩から振り払ってあきれたように口を開く。

「正確に言えば、さっき襲って来たのはグロンギじゃなく、俺に送られた刺客だ」

「刺客、だと……？」

司の説明に、桜子は訝しむように声の主を見つめる。

「俺は全ての破壊者だからな……この世界にとって、俺は悪魔みたいなもんだ」

淡々と述べる司。その顔からは何の感情も読み取れない。

それを黙って聞いていた桜子は、激昂してテーブルをバンツと平手打ちして立ち上がる。

「ならば早く此処から出て行ったらどうだ！？ここはお前のような奴が——」

「違うッ！！」

それを、桜子に勝る大声で遮る雄介。そのあまりの迫力に桜子は大きく目を見開き、司も少し驚いたようで、雄介の顔をじっと見詰

める。

雄介は、堪えていたものを吐き出すように、泣きそうな顔で二人に語りかけた。

「あんたは悪魔なんかじゃない……っ！」

「どうしてそう言い切れる？俺とお前は、ついさっきあったばかりだろ？」

「……なんとなく、そんな気がするんだ……」

その雄介の言葉に桜子は「なんとなく……」と溜息をついた。雄介はそのまま続ける。

「だって、その人が良い奴か悪い奴かを決めるのに、理由なんていないだろ？それに、司は俺を助けてくれた。司が本当に悪魔なら、そんなこと絶対にしない」

真剣な顔できっぱり言う雄介に、桜子は一度驚いたように目を見開くと直ぐにフツと微笑み、優しい顔になった。

「ま、雄介がそう言うならそうなのかも。でも——」

そう言って、司に顔を向けると今度は不敵な笑みを浮かべる。

「まだ、認めたわけじゃないわよ、新米くん？」

対する司も、口の端を少し上げて皮肉を返す。

「同じ事を何度も言わせるな。俺の名前は水野司……それに、俺を新米扱いするんじゃない！」

「ははは……」

あまり雰囲気がよくしくない二人に雄介は苦笑を漏らす。と、そこに一人の女性警官が慌てた様子で駆け込んで来た。

「た、たたたたた大変です！」

「ちょ、ちよっと落ち着いて！一体どうした！？」

彼女はよほど慌てているのか、呂律が上手く回っていない。それを雄介が何とかなだめると、その女性警官はようやくともに喋れるようになった。そして、彼女の次の一言にその場にいた人間全員の顔に緊張の色が走る。

「お、大通りに、み、み、み、未確認が現れました！」

「なにっ!!」

「しかも、見ただけで二十体以上はいるかと……」

その言葉に唯一涼しげな顔をしていた司も、眉根を寄せる。

「ど、どうしてそんなに……」

立ち上がり辺りを歩き回る雄介。そんな彼は、動揺を隠し切れない。が、そんな彼に対し桜子は至って冷静。直ぐに伝令に来た女性に指示を出す。

「あなた、直ぐに榎木田^{えのきだ}さんの所に行つて、今起きていることが古代文献に記録されていないか確認してきて。場所はわかるわよね？」

「は、はいっ」

そして、慌てて会議室から出ていく。

雄介もそれに続いて飛び出し、それを桜子が制す。

「ちよっ、雄介！待ちなさい、つて！」

「離してくれ桜子さん！俺は、皆の笑顔を守らなくちゃ——！」

「あっ……」

しなやかな手を振りほどこき、青年は静かな部屋を騒がしくでていった。

「……どうして、私はいつも、こんな役立たずなの……？」

桜子はそう呟くと、拳をぎゅっと握りしめる。いつもいつも、自分の無力さで雄介を危険な目に逢わせている。そもそも、彼が戦士クウガになるきっかけを与えたのも自分だった。

彼は、突如現れた未確認に襲われそうになった見ず知らずの桜子^を、発掘されたベルトを腰に巻き付けて庇ってくれたのだ。

それから、彼への恩返しという名目で二人一緒に行動するようになった。思ってみれば、あの時一目惚れしたのかもしれない。自分を守る大きな背中が、傷つきながらも立ち上がるその姿が、彼女の中に強い衝撃を与えた。

「雄介……私、何もできないの……？」

「……やれやれ。どいつもこいつも世話が焼けるな」

そう言つて急に立ち上がる司。その瞳は真っ直ぐ桜子を貫いてい

る。

「あんたはホントに、自分が役立たずだと思っているのか？」

「え……………」

司の、思いがけない問いかけに彼女は驚愕する。だって、今のこの自分が雄介の足手まといになっているほか、考えようがなかったから。

自らを犠牲にして戦い続ける雄介に対し、自分は支えることすら出来ていない。これが、彼の役に立っていると云えるのだろうか。

「俺が見る限り、あんたは相当あいつの支えになっている」

しかし、桜子のそんな想いはこの司の言葉によって打ち砕かれた。

「私が……雄介の、支えに……？」

震える声で目の前の男に尋ねる。

「……ここに入ったとき、雄介はあんたの顔を見た途端に笑顔を浮かべた……決して他のやつには見せないような、最高の《笑顔》を、な」

そう言って、小さな笑みを浮かべる。まるで、なにもかも見透かしているかのように。

「あんた、あいつの事が好きなんだろう？なら、もっと支えてやれよ。雄介があんたの支えになってるように、あんたも、雄介の支えになってるんだから」

その言葉に、桜子はハッと顔を上げて司の顔を見つめる。

司は、その視線を受け止めると、部屋の出口に向かって歩き出す。

「……どこへ、行くの？」

その男の背中に声をかける桜子。しかし、彼は振り返らずに首だけを僅かに動かして、彼女を見遣る。

「あいつにはどっかの誰かさんから弁護してもらった貸しがあるからな。その恩返しだ」

司の答えを聞いて、桜子は申し訳なさそうに顔を伏せる。

「謝るこたあねえよ」

クスリ、と小さく笑い、肩ごしに手をわずかに振りながら司は部

屋を出ていった。

後に残された桜子は、暫く呆然と椅子に座っていたが、両の掌で頬をパンパンと叩くと勢いよく立ち上がった。

「私も……行かなくちゃ」

その小さな呟きの後、その部屋には誰もいなくなった。

同じ頃、桜子達がいた警察署からそう遠くない大通りには黄土色や灰色をした怪人、グロンギ達が街の人々を襲っていた。

ある者は殴り殺され、ある者はビルから突き落とされる。今、この空間には殺戮しか行われていない、残酷な光景が広がっていた。

「きゃあああ!!」

「うわああああ!!」

「た、助けてくれえ!!」

響き渡る悲鳴。

助けを求める声。

そんな彼らを救おうと、グロンギ対策本部の刑事達は必死の応戦を繰り返していた。

「撃てっ、撃てえっ!!」

「畜生、何て数だ!!」

「撃っても撃ってもきりがねえっ!!」

しかし、大量発生したグロンギに対し、彼らの抵抗は蟻の攻撃にも及ばぬものだった。

「対未確認特殊弾、残弾数残り百!!」

「ライフルの弾も底を尽きかけています!」

部下達の最悪の報告に、上司の刑事は苦しげに顔を歪める。

「クソッ……ここまであつ!」

このままでは、皆の命が危ない。

彼は無線機をつかみ取り、皆に撤退の指示を出そうとした、その時――

ブオオオオオオオオオ――

「だありゃああああああ!!」

けたたましいエンジン音と共に、群がるグロンギ達の中心に一台のバイクとそのライダーが突っ込んで来た。そのバイク、《トライチェイサー2000》に跨がっているのは、真紅の瞳に黄金のクロスホーンを携えた古代の戦士。世間では《未確認生命体第四号》として知られ、未だ敵か味方か解らない存在。しかし、あらゆる並行世界を見たときに彼はこう名乗る事ができる。

仮面ライダー、クウガと――。

「うおおっ!!」

未確認生命体第四号――クウガは、トライチェイサーの前輪を持ち上げて突っ込み、グロンギの群れを蹴散らすと、ドリフトをして急停止。倒れている人達や警官を介抱する。

「大丈夫ですか!？」

「う：あ、ああ大丈夫。ありが――」

クウガに介抱してもらった市民はすぐに気がつき彼に礼を言うが、それが未確認だときづくと怖がって後ずさった。

「ひ、ひええ、未確認だあ！」

その脅えきった声を聞いてクウガ「――――荻野雄介は伸ばしていた手を途中で止めてしまった。

わかつている事だった。今更、傷つく理由もない。

自分が未確認生命体第四号と呼ばれ、沢山の人達から恐れられていることも。

例え、グロンギを倒しても笑顔が戻る人の数が少ないことも。

それでも自分は、戦い続ける道を選んだ。

自分に怯えてもいい。孤独でもいい。自分だけが一人になったって、それでも構わなかった。

雄介は、人の数だけある笑顔をもっともって見ていたかった。

そして、一番大切な人の最高の笑顔がずっと見ていたかった。

あの笑顔を守るために、自分は戦士になったのだ。

だから、こんな所で立ち止まっている訳には行かない。

(：だめだ、だめだ。しっかりしろ、俺！)

自分に喝を入れて立ち上がる雄介、否、戦士クウガ。その赤い瞳でグロンギ達を睨み付ける。

「俺は戦う！皆の笑顔を守るために！」

そう高らかに宣言するクウガ。それに応えるかのようにグロンギ達から咆哮が轟く。

「ギィヤアアッ！！」

「ウオオオオオオオ！！」

そして、あつという間にクウガの周りを大量のグロンギが囲む。

これで全てのグロンギがクウガに集中した。

「皆さん、今のうちに逃げて下さい！」

クウガは、この場にいる人間達に大声で呼び掛ける。

「ここは俺が引き付けます！だから、皆さんは早く！」

その声を聞いて一般市民が慌てて逃げ出し、刑事達は彼に敬礼を送って撤退していった。

それを後ろ目で見ながら、クウガはゆっくりと構えに入る。左手

を腰のベルトに添えて、薬指と小指を少し曲げた右手を相手に突き出す。

全ての準備は整った。後はどちらかが動くのみ。

「……………」

そして、その時はやってきた。

『ギャアアアア!!』

「うおおりゃああああ!!」

拳と拳が互いの体にぶつかり合う。ボグッ、という生々しい音を立ててグロンギの一体が後方に吹き飛ぶ。クウガは右にいたグロンギを掴むとそれを支えにして後ろに蹴りを放つ。

「だぁっ!!」

「ウゴォッ!!」

すっかり油断していたグロンギは勢いよく吹き飛ぶ。そして、クウガは掴んでいたグロンギを持ち上げ、固まっている集団に向かって投げ飛ばす。

「そぉらっ!!」

『ウギャアアッ!!』

その攻撃で、多くのグロンギが横に薙ぎ倒される。

「うっしゅ!! まだまだ行くぜえっ!!」

拳を掌に打ち付けて、気合いを入れ直すクウガ。

と、そこに―――。

ブロロロロロ―――。

一台のマゼンタ色をしたバイクが、乱入してきた。ニケツをして走るバイクは、グロンギ達に体当たりをかましつつ、クウガの横に止まる。その瞬間、後ろに乗っていた女性が運転しているライダーの頭を叩く。

「ちょっと！もう少ししまともな運転ができないの！？」

「知るかよ：俺はこれが初めてなんだ！」

「ってそれ道路交通法違反じゃない！逮捕します」

「お、おい！マジで手錠はめんなよ！な：おい：これっ、ちょっと：マジで：外れねえっ」

「それと、このバイクは没収です！反省しなさい！」

戦場に全く緊張感のないコントが展開する。クウガは呆然としてそのやり取りを見つめていたが、すぐに我に返りその二人の顔を見た。

「司！それに桜子さん！一体どうして！？」

その言葉に桜子はキツと仮面の下にある雄介の瞳を睨む。

「何って、あんたを助けに来たに決まってるじゃない！」

桜子の叫びに雄介は驚いて彼女の肩を掴む。

「駄目だよ桜子さん！こんな危険な所にいたら、桜子さん死んじやうかもしれない——」

「私はっ！！」

雄介の説得を桜子は大声で遮る。その瞳は今にも泣きそうなほど潤み、顔は真っ赤に染まっている。

「私は雄介の支えになりたいの！雄介が皆の笑顔を守りたいのと同じくらい、私も雄介の笑顔を守りたいの！あんたと一緒にいたいので、だから：だからっ！」

桜子はクウガの真紅の胸の中に飛び込む。雄介は仮面の下で頬を真っ赤にする。

「傍に：いさせてよお：」

雄介は突然の桜子の告白に驚きながらも、そのしなやかな身体を優しく抱きしめる。

「ああ、わかった：」

そして、彼女の耳元で小さく囁きかける。

「：一緒に行こう：」

その優しい声に桜子は子供のように頷く。

「…うん…」

「おーい、あんたら俺のこと忘れててねえか？」

若干、落ち込んだ声が聞こえ、二人が聞こえて来たほうに振り返るとバイクに跨がった司がグロンギに囲まれながら手錠を外すのに四苦八苦していた。

「…：あんだ、何やってんの？」

気味悪そうに呟く桜子。

その彼女の他人行儀な台詞に、司はどうとうキレた。

「何、ってお前がやったんだろうがお前が！雄介！お前もボサツとしないで、早くこいつらなんとかしろ！」

「お、おう！」

司の余りの憤りっぷりに雄介は尻込み、素直に彼の言うことを聞く。

「ちっ、どいつもこいつもふざけやがって…：おい、桜子！鍵寄越せよ！！鍵！！」

司は元凶である女性にみつともなく叫ぶ。すると彼女は洩々といった感じで、司に鍵を渡す。

「ほれっ！」

「うわわっ！？」

突然、投げ渡された司はあわてふためくも見事な反射神経でキャッチ。「投げんなよ…」とぶちぶち垂れながら手錠を外してバイクから下りる。

「やれやれ…ようやく主役の出番だな」

そして、どこからともなく取り出した白いバックル、《ディケイドライダー》を腰に装着。横に現れた《ライドブッカー》から破壊者の描かれたカードを取り出す。

その様子を見ていた桜子は、怪訝そうな顔をして司を見つめる。

「あなた…一体何者…？」

それに応えるように司は一瞬、桜子に一瞥をくれると直ぐに前に向き直り、手に持ったカードを構える。

「通りすがりの仮面ライダーだ：覚えておけ！」
声と共にカードを裏返し、バックルに装填。サイドハンドルをガ
シンと閉じて、カードのデータを読み込ませる。
「変身！」

【KAMEN—RIDE. DECADE!】

瞬間、司の周りに九つのライダービジョンが出現。それらは司の
身体に集約して、パキーンという音に合わせて緑色の複眼のスーツ
を形成する。その直後、ディケイドライバーの中心から七枚のプレ
ートが飛び出し、顔面に突き刺さる。中心のプレートの先端が黄色
く光るとスーツにマゼンタ色が走っていく。

そして司は「仮面ライダーディケイド」にへと変身した。

次回、仮面ライダーディケイド New Legend!

「我が名は『究極の闇』……」

「さ、桜子さん…何で…?」

「うおあああああああ!」

「莢!？」

「司を……守る!」

「お前は、笑顔を守りたいんだろ！あの人の分まで！」

第十二話 『青空』

全ての力を解き放て———！

第十一話 『破壊』（後書き）

ここは、とある世界にあるとある都内某所。そこに一人のオッサンがふらふらと歩いて来た。

????

「……はああ」

しきりに給料明細書をみて嘆いている彼の名は、細川豆夫。細かい設定は…この際無視だ。
落ち込んでいる彼の背中を、通りすがった一つの影がぼんぽんと叩く！

豆夫

「ん？うおっ……な、何だあんたは！？」

ディケイド（水野司）

「通りすがりの仮面ライダーだ…一体どうした？」

豆夫

「そ、それが、この――」

ディケイド

「だぁいたい分かった！」

豆夫

「え、まだ何も……」

ディケイド

「そんなときは…仮面ライダー二号に変身だ！」

豆夫

「ええ！？」

『ポーズレスン…仮面ライダー二号！』

ディケイド

「まずはお手本だ……お見せしよう、俺の変身！」

豆夫

「は、はあ……」

ディケイド

「ムウン……変ん、身っ!!」

「…次はあんたの番だ」

豆夫

「私？」

ディケイド

「ポイント?…ベルトをかつこよく見せよう♪」

「まず仮面ライダー二号と言えば、始めにベルトを見せるのが肝心だ。お前ちようどファスナーの服を着てるな……そのファスナーを全部下ろして、前をかつこよくばっ!、と開くんだ!」

豆夫

「え!?!こ、ここですか!?!」

ディケイド

「そうだ、かつこよくだぞ。そこにお前のベルトが眠っている……ここで忘れてはいけけないのが開く前に『お見せしよう……』ときざったらしくいうことだ。さあ、早くやれ!」

豆夫

「ええ……え、お、おほん…」

「お見せしよう……」

ジーッ、バツ！

豆夫

「ほ、ホントにベルトがあった……」

ディケイド

「うむ、掴みはOKだ。次に移るぞ……ポイント？…ゆっくりと滑らかに♪」

「次は変身の第一段階……まずは、両手をまっすぐ横に突き出す！」

豆夫

「ほわっ!？」

ディケイド

「そしてゆっくり、円を描くように持ち上げて……」

豆夫

「うぬぬぬぬ……」

ディケイド

「……一気に反対側におろすっ！」

豆夫

「ではあっ!？」

ディケイド

「コラ、そんなにカクカクするな。変身はスムーズさが命。時間を取られると怪人達にやられてしまうぞ!」

豆夫

「はあ……すいませんm（　　）m」

ディケイド

「まあ、いい。動きは大体そんな感じだ。後は細かい動作だから……ポイント?…降ろした腕は90度♪」

「両腕を降ろしたときは、左腕は90度に曲げ、右拳を左腕関節に重なるようにする。この時注意するのが、両拳とも強く握っておくこと!力の二号はパンチが命!拳を強く握らなければ真の二号には変身できない!……さあ、見せてみる細川豆夫!お前のライダー魂を

「！」

豆夫

「は、はいっ！よ、よおし……！」

「……お見せしよう！」

ジーッ、バツ！

「ムウン！」

バツ！

グララララン……

「変ん…身…！」

カシヤツ！

「トオツ…！」

キュイイイイイイイイ——

ディケイド

「あれ、あいつどこ行った……まあ、いいか」

「君もやってみよう♪」

二号

「……はっ！」

【T o b e c o n t i n u e d …】

第十二話 『青空』（前書き）

はい、遅れてすみません！

ようやくKUGA!の世界も終わります！

よろしくお願いします！

第十二話 『青空』

クウガとディケイドが大通りでグロンギ達を相手にしていた頃、その様子を別の世界で見ていた一人の男がいた。大きなモニターに映し出されるディケイドとクウガを見詰めながら、独特の仮面を着けている黄金の男は、クックと喉の奥で笑う。

「クック：ついに始まったか：ディケイドの旅が」

椅子にもたれ掛かった身体を起こし、指をパチンと鳴らすとモニターの光がプツンと消えた。そして、今まで暗かったその空間が、白く光った。

「我々、《B A D A N》も準備をしなければならない：まずは、《^{ゼクロス}村雨良》と我がスサノオの精神の交換を果たさなければ：」

その眩きと共に、《スサノオ》と名乗る黄金の男はこの空間から突如として消えた。

後には、だだっ広い空虚な空間に、一人のスサノオに酷似した仮面を被った立体映像が現れた。

（スサノオ：いや、J U D O。^{ジュドー}お前の計画、必ずや、我が《ツクヨミ》が防ぐ…）

やがて、彼の身体に激しいノイズが起こり、乱れてその場から姿を消した。

同刻、司が寝泊りしている海原診療所では、主である海原聡と、司と同じく居候である一条ルリがちょっとしたパニックに陥っていた。

「うちにこんなものあったっけ？」

「：覚えてる限りでは、無いと思いますけど：」

「じゃ、これは一体何だ？」

二人は今、突如として現れたある物を前にして首をかしげていた。「こんな大きな垂れ幕、誰かに貰ったら覚えてるしなあ：」

そう、今二人の目の前にあるのは、写真などをとるときに使う大きな背景ロールだった。ちなみに、今描かれているのは雪の中に立つ禍々しき黒い人影——それが、この世界にいる仮面ライダー、クウガを描いていることは、二人は知る由も無い。

「どうしよう：これ、相当邪魔になるよなあ。でも、外し方もわからないし：」

聡はしきりにブツブツ呟くと、幕の周りを忙しくウロウロしている。ルリはその様子を心配そうに見詰めている。と、そこに——

「：それは、世界と世界を繋ぐ扉のようなもの。外してしまえば、この《クウガ》の世界から出られなくなる」

「てやつ！！はあっ！！」

「ふっ！！おりゃっ！！」

「ウガアッ！！」

『クウガの世界』にあるとある大通りは、今、戦場と化していた。マゼンタ色をした全てを破壊するライダー、ディケイドと、笑顔

を守るために戦う戦士クウガが、多量に現れたグロンギと熾烈な戦いを繰り広げていた。

ディケイドは、腰に提げていたライドブッカードをソードモードに、クウガは己の拳を武器にグロンギ達に立ち向かってゆく。

「ていやっ!! せいっ!!」

「グアアア!？」

「ギニャアアッ!？」

ライドブッカードモードを振り回し、グロンギを縦横無尽に切り裂いていくディケイド。しかし、いくら敵を斬りつけても、奴らの数が減る気配が一向にない。

「ちっ、面倒くせえ…まとめて撃ち抜いてやる!!」

そう言ってディケイドは、即座にライドブッカードをガンモードに切り替えると一枚のカードをディケイドライバーに装填する。

【ATTACK—RIDE. BLAST!】

「はあああああああ!!」

引き金をひくと、ライドブッカードの銃口が分裂していくつもの銃弾を一度に撃ちだし、辺りのグロンギたちを一掃していく。

「よし、俺も行くぞお…はっ!!」

それを見ていたクウガは、一気に跳躍するとバイクの側でスタッと着地し、ハンドルのグリップを抜き取る。

「超変身!!」

そして、力の戦士タイタンフォームに変身。警棒となっていたグリップが紫の大剣に変化する。

「だああああああっ!!」

その巨大な大剣を、巨大な力で振り回し群がるグロンギを切り裂いていく!

「ウガアアアッ!!」

「グアアアアッ!!」

斬撃を刻まれたグロンギの体には、それと同時に封印の紋章が浮かび上がる。そこから体に亀裂が入り、グロンギは爆発して死んでいく。

「ふっ…なかなかやるな…」

「いやいやあ、司のあの攻撃には敵わないよお」

「…おだてても何も出んぞ」

辺りのグロンギ達を一掃し、ほっと一息つくディケイド達。そのあまりの緩みっぷりに見兼ねた桜子が二人に喝を入れる。

「ちょっと二人とも! まだ終わってないんだから油断しない!!」

「はっ、はい!! すいませんっ!!」

「ったくいちいち偉そうだな、この男女——ってえ!？」

ボソリと呟いた司は、すぐに頭に衝撃が来て思わず仮面の上からそこを押さえる。見ると、恐ろしい笑顔を携えた桜子が握りこぶしをちらつかせながら、司を睨んでいる。

「んん? 何か言ったかな? 水野司くん」

「…何でもないです」

（こいつ…素手で殴ってよく平気だな…）

（ひええ…恐ろしい）

司は仮面の下で、半ば感心、半ば呆れ、雄介はブルルツと体を震わせた。

しばし、穏やかな空気が流れる。

が、それはほんの一瞬だった。

「……待ち侘びたぞ…クウガ……」

重々しい邪悪な声が辺りに響き、ディケイドとクウガは、はつと身構え声の主を探す。桜子も、ホルスターから拳銃を抜き警戒態勢に入る。

やがて、『彼』は三人の前に姿を現した。

クウガのような黄金のクロスホーン、つりあがった黒い瞳、雪のような白い肉体…。

『彼』から感じさせる殺気は、今までのグロンギ達とは違う圧倒的な何かを持っていた。

「…何だ、お前。俺にケンカ売ろうとはいいい度胸してるな」

その威圧感に押されながらも 強気な言葉を吐くディケイド。しかし、全てを見透かしたかのようにその怪人はディケイドを嘲笑った。

「ふっ、その塵のような強がりが何時まで続くかな？」

その軽い挑発に、心の余裕のないディケイドは簡単にそれに乗っってしまう。

「ちっ、鬱陶しい奴だな…大体、俺の質問に答えてないだろ!! お前は一体、何者だ!!」

その焦っている様子にも感じられるディケイド達の様子に、白い怪人はクックと喉の奥で笑う。

「まことに愉快的な連中だ…我を楽しませた褒美に、我が名を教えてやろう…我が名は『究極の闇』…」

「『究極の闇』…」

クウガがその名をボソリと呟く。

それを聞いた『究極の闇』と名乗る怪人は、顔を向け面白いといったような声を出す。

「久しぶりだな、リントの戦士クウガ…：我が同志よ」

その言葉に、桜子とディケイドはクウガの顔を見詰める。

「は？ ゆ、雄介があんたの同志？ んな、バカな話が…」

「…ち。わらわらとうるさい蠅だ。少し黙ってろ」

非難の声を上げる桜子に『究極の闇』は手をかざし力を込める。次の瞬間、炎の塊が桜子を襲い、細い身体をいとも簡単に吹き飛ばす。

「桜子さん!!」

クウガが悲鳴を上げる。

吹き飛んだ彼女は、そのままビルの壁を打ち破り、崩れた瓦礫の中に身を沈める。

「桜子さん!!」

クウガは助けに行こうと彼女の元に走り出す。

「逃がしはせん…」

その背中に狙いを定める『究極の闇』。

「させるかよっ!」

その攻撃を阻止しようとを振りかぶるディケイド。しかし――。

「はああっ!――な、何っ!?!」

あろうことか『究極の闇』は、ライドブッカーの刃を手で掴み止めたのだ。

「…この程度か」

そして、本来クウガにぶつける筈だった力をディケイドに向かって放つ。

「死ね」

「があああああああっ!?!」

ゼロ距離でその攻撃を食らったディケイドは声を上げながら数十メートル吹き飛び、地面に伏してそのまま動かなくなった。受け止められたライドブッカーの刃が盾となり、わずかに威力を相殺し、変身が解けなかったのは不幸中の幸いだろう。

しかし、『究極の闇』は再びクウガを見据えると、右手を銃のような形にしてその指先にエネルギーを集める。狙うのは、クウガの心臓。

「私の役に立たん存在は、排除するまで…」

白い光が『究極の闇』の指先で迸る。

それに気づいていないクウガは、桜子の埋もれている瓦礫をどかすのに必死になっていた。

「桜子さん! 桜子さん! くっ…こんのおおおおっ!!」

そして、一番大きなコンクリートの塊をどかすと、仰向けに横た

わる桜子を見つけた。頭と口から血が流れ、頭から伝う血が左の目を潰していた。

「桜子さん！起きて、桜子さん！」

その肩を揺するクウガ。すると、桜子は意識を取り戻したのか伏せていた目をうつとりと開く。

「ゆ…スケ…」

「桜子さん！早くここから逃げよう！」

そういつて彼女の方を担ごうとするクウガ。桜子は、彼の肩越しに向こうの景色を見ると、その瞳を大きくしてクウガを突き飛ばす。

「っ！！雄介！！」

「えっ、うわあっ!？」

予想以上の力に、思わず尻餅をつくクウガ。
と、次の瞬間。

ドブツ———。

桜子の胸に、鮮やかな朱の液体が飛び散った。反対側の背中の部分から同じ赤が溢れ出す。

「かはっ———」

桜子は、一つ咳込むと大量の血の塊吐き出す。そして、起こしていた体をゆっくりと地面に横たえた。

「あ……え……はっ」

クウガ、否、雄介は未だに状況を掴めずに、尻餅をついたまま茫然としている。

ゆっくりと首だけをひねると、構えたまま苦々しげに舌打ちをする『究極の闇』の姿が赤い瞳に映った。

「リントの女め……余計なことをしてくれる」

それを見た後、再び真っ赤に染まって横たわる桜子を見る。彼女の口がわずかに動く。

ユウスケ――

雄介の中で何かが終わった。

――ここは……。

司は真っ暗闇の空間に佇んでいた。
周りにはなんの気配も感じない孤独な空間。

――俺は確か…雄介と一緒に『究極の闇』と戦って…吹き飛ばされたのか……。

今の状況を思い出す司。と、すぐ傍に現れた気配を感じ取り、そちらに振り返る。

そこには、司そっくりの少年が立っていた。

――誰だ……。

訝しむ司。すると、その司そっくりの少年はうつすらと笑みを携

えた。

「俺は、お前だよ…司」

そして、少年はその身をディケイドの姿に変える。その瞳はまがまがしく歪み、額のゼロシグナルは紫色だ。

「力を貸すよ…司…」

司に手を伸ばすディケイド。

それを避けようとする司。しかし、

———体が…動かないっ………！

何かに縛られたように、動きを封じられた司。

「逃げようとしてもムダさ……さあ、一緒に破壊しよう、司………」

ゆっくりと近づいてくる、もう一人の自分。

司は直感的に、彼が自分と一体になろうとしていることがわかった。このディケイドが本当の自分だから…。

———やめろ…やめてくれ…！

徐々に距離を詰めてくるディケイド。
それから必死に逃れようとする司。

「さあ、司………」

———やめてくれ………

そして、ディケイドの手が司の中に――。

ドギユウン――。

しかし、それは一発の銃声と共に動きが止まった。覚悟を決め、目をつぶっていた司は恐る恐る目を見開く。

――なんだ…？

ドギユウン、ともう一発銃声が響く。それと共に、空間の中に一つの穴が生まれ、そこから白い光が差し込んできた。

「ち…あの女か…」

ディケイド・激情態の姿から、元の司そっくりの人間へと戻った少年は苦々しげに舌打ちをすると、光が差し込む穴を見遣る。

「どうやら時間切れのようだな…司」

名前を呼び、司に向き直る『司』。

「また会おう――」

司の身体を、光が包んだ。

「——うっ……く」

意識を取り戻した司——ディケイドはゆっくりと目を開けると手について上半身を起こす。前に立っているのは華奢な身体に戦闘員のような服を身につける長髪の女の子、海東莢。手に持っているディエンドライバーの銃口は、真っ直ぐ『究極の闇』に向けられ、ついさっき撃ったのか煙が僅かに立ち上っている。

「さ………や？」

ダメージを受けすぎてまともに立ち上がることができない司は、それでも何とか顔を上げ目の前の少女の名前を呼ぶ。呼ばれた少女、莢は僅かに振り返ると、司にだけ見えるように微笑んだ。

「司……名前、覚えててくれた」

僅かに頬を赤らめながら、はにかんでいるように笑う莢。

「ち、女風情共が…我に盾突きおって……！」

銃弾を浴びた腕を庇いながら、『究極の闇』は恨めしげに悪態をつく。

が、次の瞬間にはそれが嘲りの笑いに変わる。

「ふん…まあいい。戦士クウガもついにあるべき姿に戻った…我と同じ、『究極の闇』の姿になったのだ！」

その言葉にディケイドは『究極の闇』の奥にいるクウガの姿を探した。しかし、そこにいたのは——。

「アアッ……ガアッ……ウオアアアアッ！！」

黒いオーラと電撃に身を包まれながら闇の鎧を身に纏い暴れ回るクウガの姿だった。辺り構わず、自然発火能力で炎を生み出し、破壊の限りを尽くしていく。

「…っ……雄、介っ……！」

ディケイドは必死に立ち上がりクウガを止めようとする。だが、それは目の前にいる少女の腕によって遮られた。

「……莢、何を……？」

「司はまだ動ける身体じゃない。だから、そこで暫く休んで。大丈夫、アイツは私が止める……」

そう言っ、腰の横にあるカードホルダーから一枚、仮面ライダーが描かれたものを取り出しディエンドライバーに装填。

【KAMEN—RIDE.】

ゆっくりと上に持ち上げていく。

「まっ、待て莢っ!？」

「……………変身!」

【DI—END!】

司の制止な声を振り切り、トリガーに指をかけ「仮面ライダーディエンド」に変身する莢。

その状態から、更に二枚のカードを取り出し、

「クワガタにはクワガタ、か……」

取り出したカードを順々にディエンドライバーに装填する。

【KAMEN—RIDE. GATACK!】

【KAMEN—RIDE. GYAREN!】

カードに封印されていたライダーが解放たれ、二人の『究極の闇』の姿をした者の前に二人のライダーが現れる。

「よし……行くぜ野郎共!？」

「BOARDのエースを甘く見るなよ……?」

青い装甲に橙色の瞳のメタリックなクワガタライダー、ガタツクと同じく、クワガタがモチーフの赤いダイヤのライダー、ギャレン。

二人はそれぞれの武器を構えると、ガタツクはクウガにギャレンは『究極の闇』に向かって走り出す。

「うおおおおおおお!!」

「はああああああ!!」

ガタツクは両肩に装備されたガタツクカリバー、ギャレンはギャレンラウザーでそれぞれの標的に攻撃を仕掛ける。

「らああっ!!」

「グアッ!!ガアア!!」

「フンッ!!」

「ぬああっ!?!ちっ、何だ貴様らは!?!」

二対の青い刃に刻まれるクウガと、赤い銃から放たれる黄金の銃弾に怒る『究極の闇』。

そして、それを見つめるディエンドは、更に新たなカードをディエンドライバーに装填する。

【ATTACK—RIDE. CROSS—ATTACK!】

【Rider Kick!】

【BURNING SMASH!】

カードの効果により、二人のライダーの奥義が発動。

「だああっ!!」

ライダーキックを発動したガタックは飛び上がり、延髄蹴りの要領でクウガに雷撃の一撃を浴びせる。

「グワアアアアアッ!」

タキシオン粒子が変換されたパワーをもろに喰らったクウガは、黒い胸から煙を吹き上がらせながら地面に伏す。

「ハアアアア!」

飛び上がったギャレンは空中で身を捻り、炎を宿した両足を『究極の闇』へ振り落とそうとする。

「ちいい!!」

『究極の闇』は、それを防ごうと右腕に力を集め、ギャレンに一気に放つ。だが――。――。

「な、何!」

『究極の闇』の攻撃が当たる直前、ギャレンはなんと空中で分裂し攻撃をかわしたのだ。もちろん、ギャレンの勢いが止まることはなく、二つの炎が『究極の闇』を襲う。

「があああああッ!!」

成す術もなく奥義を浴び、爆風で吹き飛び、ごろごろと地面を転がる白い怪人。辛うじて意識は保っているのか、動きが止まったところで立ち上がろうと手をつく。

「ウ、ヌ……クッ!」

しかし、先程の一撃が効いているのか中々立ち上がれないでいる。一方のクウガも、同じクワガタライダーであるガタックの強烈な一撃を喰らい、究極の姿をしていながらも苦しそうに悶えた。

そこに、巨大な青のハサミを構えたガタックが仁王立ちしている。「トドメだぜ…ライダーカッティング!」

【Rider Cutting!】

双剣ガタツクダブルカリバーを交差させた鋏の間に黄色い稲妻が走る。その武器を振りかぶり、狙いを定める。その先にあるのは、クウガの黒い左胸。

「ア……ア……」

黒い瞳が青い装甲の戦士ガタツクを見詰める。それは命乞いというよりも早く殺して欲しいという懇願。

「……けっ、ならお望み通りにしてやらあ!!」

そして、蒼の鋏がアルティメットクウガの心臓に向かって振り下ろされ――。

ガキイイインッ!

刹那、鋏と化したガタツクダブルカリバーを縫い付けるようにして動きを止めたのは刀身の伸びたライドブッカー。勢いが余っており、そのままガタツクダブルカリバーを主の手から離させる。

「くっ…ディケイドでめえっ!!」

ガタツクは怒りを露にして、邪魔をしてきた人物に向かって振り返る。しかし、それは少しばかり遅すぎた。

【FINAL—ATTACK—RIDE. DE DE DE DE
ECAD E!】

「たあああああああっ!!」

既にディケイドは3D状のカードを通過している最中。狙いはび

ったりとガタツクに定まっている。

「な、何ッ——うわあああッ!？」

成す術もなく、ディメンションキックを浴び爆死するガタツク。燃え盛る炎の中にスタツと着地したディケイドは、クウガの傍に駆け寄る。

「雄介、大丈夫か、雄介!？」

横たわる闇のクウガを揺するディケイド。しかし、雄介はまだ正気を取り戻していなかった。

「ウ、ウ……アアアアアッ!!」

「どうわあああッ!？」

目を覚ましたクウガは、いつの間にか右腕に宿していた炎をディケイドに向けて放つ。

それを、又してもゼロ距離で受けたディケイドはとうとう耐え切れなくなり、変身が解けてしまう。

「グ、アッ……ゆ、ゆうすけっ……!」

元の姿に戻った司は、それでも必死に立ち上がりクウガに向かって手を伸ばす。口からは溢れている血が地面に滴り落ちていた。

「お前はっ……お前は笑顔を守りたいんだろ!あの人の分まで!それなのに、こんな所で自分を見失ってどうするんだよ!?!あの人が無駄にしてくれた命を無駄にするんじゃないやねえ!」

「!!!!!!」

司の叫びに、思わず立ちすくむクウガ。彼の中にあつた何かに、再び火が宿った。

（—————そうだ。俺は何をしてるんだ。こんなじゃ、桜子さんに会わせる顔がないな……）

—————雄介。

すると突然、雄介の耳に聞き覚えのある女性の声が聞こえた。
一番、大切な人の声が。

——雄介……ありがとう。

その瞬間、クウガの黒い瞳から一筋の涙が零れた。

そして、黒い鎧が徐々に形を崩していき、「荻野雄介」の姿へと戻っていった。瞳からとめどなく、涙を流しながら。

「……俺は戦うよ、司……桜子さん。これ以上、涙のない、悲しみのない未来を守る為に！」

君がくれた笑顔だけ、ポケットにしまって。

「雄介……」

司と雄介は向き合い、互いに微笑みあった。
言葉はいらない。

それでも、解るものがある。

二人は、「仲間」だから……。

「ふん。人間ごときが、図に乗るな！」

突如、辺りに声が渡り、二人は声のしたほうへ振り返ると、満身創痍ながらも、しっかりと二本足で立っている『究極の闇』の姿があった。

ギャレンとディエンドの姿が見当たらない。ギャレンはおそらくこの怪人が倒し、ディエンドは……やる事がなくなったので帰ったのだろう。「結局はお前達、仮面ライダーとやらも我が『究極の闇』の前に平伏することになるのだ。偉大なるこの、ン・ダグバ・ゼ

バの前になあ！」

そして勝ち誇ったように笑い声を上げる『究極の闇』——ン・ダグバ・ゼバ。

しかし、二人は怯むことなく白い怪人を睨み据える。

「……違うな！」

声をあげたのは、司。

口の端を上げて、それでもなお目はン・ダグバ・ゼバを見据えている。

「こいつは大切な人の笑顔の為なら命を懸けることができる……それは、お前がしようとしていることよりもずっと偉大で栄光ありものだ！」

雄介を指しながら、誇らしく叫ぶ。

そして、微笑むと隣にいる『仲間』を見つめる。

「知ってるか？こいつの笑顔も……悪くない」

その言葉に、思わず雄介も笑い返す。

「ちい……一体、貴様は何者だ！？」

忌ま忌ましげに、舌打ちするン・ダグバ・ゼバ。

司は応えるように、ディケイドライバーを取り出し腰に装着。カードをライドブッカードから抜き出し、見せ付けるように前に突き出す。

「通りすがりの仮面ライダーだ……覚えておけ！」

「変身！」

【KAMEN—RIDE. DECADE!】

九つのライダークレストに包まれて、「仮面ライダーディケイド」に変身。と、腰に提げたライドブッカードから三枚のカードがディケ

イドの顔の前に飛び出した。

「雄介：行くぞ」

それらを手に取りながら、隣にいる青年に声をかけるディケイド。青年、雄介は頷くと腰に手を当て、古代のベルト《アークル》を出現させる。

「————変身！」

アークルのスイッチが押され、アマダム霊石が回り鎧を形成していく。

やがて、現れたのは真紅の鎧に身を包んだ《青空》の戦士——クウガ。

「よっしゃあ！覚悟しろよ！この白達磨！」

淡呵を吐きながら、いつもの構えをとるクウガ。

隣に立つディケイドは、先程飛び出たカードの中の一枚を取り出しながら、クウガの背後に廻る。

「気合いが入ってるとこを悪いが……」

言いながら、カードをバツクルに装填。

【FINAL—FORM—RIDE. KU KU KU KU
GA!】

「ちょっとくすぐったいぞ!？」

「え？」

ディケイドが放った言葉に意味もわからず、小首を傾げるクウガが、次の瞬間。

「ぐうおわっ!？」

なんとも言えない奇妙な感覚に陥るクウガ。

後ろではディケイドがクウガの中に手をつっ込み、背中を開いて

中からクワガタの背中のようなものを引きずり出していた。

それと同時に、人の形をしていたクウガがみるみる内に変形していく。

「あ……ああ……？」

やがてそこに出来たのは、重厚な鎧を身に纏う機械クワガタ、ゴウラムを模したファイナルフォームライド——《クウガゴウラム》であった。

ブウウンという、羽音が辺りに響き渡る。

「これは………？」

クウガゴウラムとなった雄介は、沸き上がってくる力に脅えながら隣に立つディケイドに尋ねる。

しかし、ディケイドはそんな不安を拭い去るように雄介を見た。

「これが…俺とお前の力だ！」

そして、ライドブッカーから更に一枚、黄金のクウガの紋章が描かれたカードを取り出した。

「ちい！この虫けらどもがあ！」

ン・ダグバ・ゼバは怒りに震え、右腕に破壊の炎を宿す。

刹那、ディケイドは取り出したカードをバツクルに装填する。

【FINAL—ATTACK—RIDE. KU KU KU K
UGA!】

すると、クウガゴウラムが一気に加速。巨大な角をン・ダグバ・ゼバに向けて、突撃する。

「うおおおおおおお!!」

「グアアッ!？」

鋼鉄の角がちりホールドされてしまった白い怪人は、そのまま高く運ばれる。

ある程度、高くなった所でクウガゴウラムはＵターン。ディケイドに向かって降下していく。

「あああああ——たあっ！」

ディケイドも、掴まれたン・ダグバ・ゼバに向かって飛び上がりそのまま蹴りを繰り返す。その足に宿るのは、熱い炎。

「「はあああああああああ！！！」」

「ぐうわあああああ！？」

《ディケイドアサルト》をもらに浴びたン・ダグバ・ゼバは燃え上がりながら地上に落ちて行った。

「桜子さん……」

『究極の闇』を倒し、ゲゲルを終わらせた雄介と司は血を流しながら穏やかに眠る桜子の前に立っていた。

彼女の顔は、『笑顔』だった。

「……俺、もっと強くなるよ。桜子さんがいなくても、一人で生きていけるように……」

眠った彼女に話し掛ける雄介。彼の足元には、いくつもの雫のあとが出来ていた。

「……だから、最後まで見てくれよ。俺の…変身」

やがて、聞こえて来たのはパトカーのサイレンの音。司が肩に提げた無線機で、桜子の死を伝えたのだ。

「……邪魔者は消えるぜ」

司はマシンディケイダーに跨がり、エンジンをかける。

そして、無言のままそこを去っていった。

「……………」

何も言わずに言ってしまった友の後ろ姿を見ながら、雄介は涙を流していた。

きっとまた、司の照れ隠しだろう。あいつは肝心な所を言わずに、無愛想な態度ばかりする。だから、多分この先、味方よりも敵の方が多くなるだろう。

雄介にはわかる。

例え、ほんの少しの間にでも共に戦った戦友だから。

「司……………ありがとう……………」

さよなら、友よ。

君の旅路に、幸多からん事を。

そして、海原診療所。

ここにいる二人の住居人、海原聡と一条ルリは、椅子に座って司の帰りを待っていた。

「……………司君、遅いね」

「……………はい……………」

チカチカ、と時計の秒針の刻む音が響き渡る。

あれから、3時間一向に司が帰ってくる気配は現れない。しかも、先程現れた人物に二人は度肝を抜かれた。

「……まさかいきなり」

「莢さんが来るなんて……」

そう、あの時ここを訪れて垂れ幕の説明をしたのは、海東莢。

お馴染みの戦闘員の服を着て、二人の前に推参した莢は垂れ幕をとるな、といったあと何か急いでいるようにここを出て行った。

本人いわく、『司を守る』だそうだが。

その言葉に、ルリは一層不安を掻き立てられた。

(それってつまり、司さんの身に何かあったんじゃない……!)

というわけで今ルリは、司の事が心配で気が気じゃない。と、そこに――――。

「!!?」

ガチャン、と音がして勢いよくドアが開いた。そこに立っていたのは、傷だらけで今にも倒れそうになっている水野司だった。

「っはあ……はあ……」

「司さん! どうしたんですかその傷!？」

慌てて駆け寄るルリと聡。

司は今までの受けたダメージを痩せ我慢していたのだ。すべては、雄介を助けるために。

ふらつきながら、柱に寄り掛かる司。そこにある鎖を思わずグイッと力強く引っ張ってしまう。

「うわわわわ……」

すると、ガラガラという音と共に背景ロールの絵が変わって行った。

そこに描かれているのは、真ん中で真っ二つに割れているバイオリンとそれにとまっている一匹の蝙蝠。

それを見ながら、司は一言呟いた後、意識を手放した。

「キバの……世界か……」

次回、仮面ライダーディケイド New Legend!

「ボクに近寄るな……」

「ガキが……お尻ペンペンしないとわからないみたいだな!」

【KAMEN-RIDE. KUGA!】

【FORM-RIDE. KUGA TAITAN!】

【FORM-RIDE. KUGA DRAGON!】

「ファンガイアの王がない……?」

「お前……雄介か？」

第十三話 『女王・テンション、ピアノッシモ!?!』

全ての力を、解き放て———!

第十二話 『青空』（後書き）

はい、雄介おつかれ。

というわけで！

次回からはいよいよキバの世界に入って参ります！

やっとですね……とうとう一つの世界の物語が終わってしまいました。結局、アルティメットを出してしまいましたが、最終的にマイティに戻るとい……おまけに文章ぐだぐだで申し訳ありません！

さあ、次はいよいよキバですが……果たして！王がいらないとはどういう事なのか！次回予告で、ガキ！とかいつてましたが、本当にKIVA！は子供ライダーなのか！？

全ては次回、明らかに！

読んでいただき、ありがとうございました！

なるべく、更新速度を早くしたいと思うのでよろしくお願いします！

第十三話 『女王・テンション、ピアノッシモ!?!』 (前書き)

長らくお待たせしました……

今回から漸くキバの世界です。

ちよつと設定があやふやなところがありますので気付いたところがあればご指摘お願いします。

では、第十三話お楽しみ下さい！

第十三話 『女王・テンション、ピアノッシモ!?!』

「はぁ……………」

何もない、果てしなく続く荒野にひとつのため息が零れた。荒れた肌を晒す岩肌に腰掛けているのは、いつもの戦闘員のような服を脱ぎ捨て可愛らしい白のワンピースを着ている少女、海東莢だ。その顔は、悔しさと悲しさで溢れ瞳には涙が薄く滲んでいる。

「……司に、悪いことした……」

考えているのは、前に訪れた『クウガ』の世界での事。

『世界の破壊者』水野司の旅の友である海原聡と一条ルリに、世界を渡る術について教え、瀕死の司を助けるべく、その世界の戦場へと向かった。

しかし、出来たことといえば司に邪魔になるようなことばかり。

「……うう……」

自分の無力加減に思わず涙が零れる。

自分には彼との過去の記憶がある。彼と一緒に過ごした様々な思い出が。それを無駄にしないようにと彼を全力でサポートするとあの人に誓ったのに。

「…早く、早く思い出して…司」

九つの世界が終わってしまう、その前に。

「ねえ、お義兄ちゃん」

「どうした、真由」

砂嵐が荒れ狂う砂漠を三人の男女が途方もなく歩いていった。

先頭を歩くのは、『世界の破壊者』にそっくりな少年——名をツカサという。それに続くのは、彼の妹的な存在、水野真由。

「私達、一体何の世界にいるの？」

そんな、真由の言葉にピクリと反応するのはもう一人の旅のお供。

「あ、それ俺も気になってました！！」

大声で叫んだのは、真由の弟子、否、奴隷一号である仲村ハジメ。彼は前まで仮面の下に素顔を隠していたが、このツカサという少年と出会ってからは変身をといていた。

「…お前はイチイチウ・ル・サ・イ・んだよ！！この、奴隷一号が！！破滅しろ！！」

「し、師匠…なにもそこまで言わなくなつて…ヒドイ…」

とても不穏な会話が展開しているが、こんなの日常茶飯事。今は、慣れない環境の中で口数が少ないほどだ。

そんな、二人を苦笑いしながら見てツカサは真由の疑問に答える。

「ここは『ライダー大戦』…門矢士が以前の旅で最後に戦った場所だ…」

彼の呟きと共に、周りの砂の丘から数多の世界のライダーが顔を覗かせた。しかしよく見るとその中には九つの世界の主であるライダーの姿は見当たらない。

「主を失い、当てもなく彷徨い続けているのか…」

そう呟くと、ツカサは懐から黒いディケイドライターを取り出し、腰にあてがった。

「行くぞ真由、ハジメ…」

すると二人も自分達のツールを取り出し、各々の構えを取る。

「私、お義兄ちゃんのためなら何だって出来る…変身」

「俺との差、激しくないっすか！？変身っ！」

【H E N S H I N !】

「遅れるなよ、奴隷…キャストオフ」

【C a s t O f f !】

【C h a n g e B E E T L E !】

「無理ですよ〜クロックアップについていくなんてえ」

「アクセルベントがあるだろうが！この、グズ！」

会話だけ聞けばチームワークなんてかけらも感じられないが、いざ戦闘となると彼らは思わぬ力を発揮する。

「普段が仲いいと、もっといいんだけどな…」

その呟きは、この場にいる誰の耳にも聞こえなかった。

「さあて、俺も行くか…」

変身———。

「はあああああ！」

「てやああああああ！」

崖に囲まれた大地。そこには無数の戦士達が一人の標的を倒すために己の技を駆使して、暴れまわっていた。赤や青、黄色などの銃弾や衝撃波が様々な方向から一点に向かって集中される。そこにいるのは、一人の『破壊者』。

【ATTACK—RIDE. CLOCK—UP!】

【Clock Up!】

【ATTACK—RIDE. SWORD—VENT!】

【SWORD VENT.】

彼はカブトライダー共通の能力、クロックアップを使い様々な攻撃を交わして、龍騎ライダーズの中でも最強の戦士オーディンの武器、ゴルドセイバーを呼び出して反撃した。

「はあああああっ!!」

「ぐおおっ!?!」

「がはああっ!?!」

攻撃をまともに受けたのは、最前線で戦っている二人のライダー。赤い龍のような騎士、龍騎と青いスピードのライダー、ブレイド。

「く、くうっ!」

「くそっ…強え!」

斬られた箇所を抑えながら、痛みに苦しむ龍騎とブレイド。だが彼らの苦しむ姿を見ても、今の『破壊者』——ディケイドは何も

感じない。

寧ろ沸き上がってくるのは、彼らを破壊したいという強い欲望。証拠に彼の緑色の瞳は鋭く歪んでいる。

「…口ほどにも無いな。世界を守る仮面ライダーが、聞いて呆れる」

【ATTACK—RIDE. SHARP—SLASH!】

ディケイドはライドブッカーをソードモードに変形。その瞬間に、刃により《鋭い》エネルギーの刀身が伸びる。

「……お別れだ」

そして、二人のライダーに無情にもマゼンタの光が振り下ろされた。

「……あ…」

夢から覚めたルリは、カーテンからさす陽の光に目を細めた。

（また、あの夢……）

先程まで見ていた破滅の夢。この前見た夢よりも内容が酷くなっていた。

やはりこのまま旅を続けると司は最後にはあなってしまうのか。（もしそうになったら、私が司さんを止めるしか……でも、どうやって？ 私にはライダーの力なんてないし……）

そんなことを考えていると、診療室のドアがあく音がして誰かの足音が聞こえてきた。

ルリはベットをおりて診療所のほうへむかうとそこには司がいた。「ん？ おお、ルリ。おはよう。いや、おそょうか？」

ルリに気付くと微笑んで挨拶をする司。そんな司にルリは僅かな

安堵感を感じながら挨拶に応える。

「おはようございます、司さん。もう起きても大丈夫なんですか？」

「ああ、すっかり良くなった。ありがとな、ルリ」

「当然の事をしたままですよ」

他愛ない会話をしながら、ルリはふと司のいつもと違うところに気付く。

「司さん、その格好……」

「ああ、また変わったんだ」

司は自分の服装を見ながら、苦笑いする。

今、司が着ているのは白いカッターシャツの上に胸の辺りが開いた黒いスーツ、首元には結んである黒の蝶ネクタイ……そう、紛れもない『執事服』である。

「つまり、この格好から見れば司さんはこの世界で誰かの執事をする、って事ですか？」

そう言われて、司は頷くと一枚の紙切れを取り出した。

「実はもう行く場所は分かってるんだ」

「ちょっと飛ばすからしっかり捕まってるよ！」

「は、はい！」

あれから司とルリは、以前『クウガの世界』で司が乗って帰って来たディケイダーである場所を目指していた。

ちなみに聡は……未だに寝ているらしい。

それから30分、バイクを走らせていると二人の視界に最上階が巨大な龍となっている高層ビルが見えた。

「あれが……『王宮』……」

後ろに乗り、司の腰に腕を回しているルリはビルを見てボソリと呟いた。

ビルの駐車場にバイクを留め、司とルリはエレベーターを使って最上階まで上がっていた。ちなみに今のルリの服装はメイド服。『王宮』に行くのに普通の私服はまずいだろう、ということでこの服に着替えたのだが、

(…何で診療所にメイド服が…)

なんとこの服、どこから調達したわけでもなく診療所に置いてあったのを着て来たのだ。

自分が診療所に初めて行った時からメイド服はあった、とルリの証言がある。

(まさか海原さんに…そんな趣味が…)

悔しさと喪失感で胸がいっぱいになった司は思わず唇を噛んだ。その様子を見ていたルリは不思議そうに首を傾げる。

「司さん、どうしたんですか？」

「え？あ、いや。な、なんでも——」

その瞬間、エレベーターのドアがチン、と横に開き奥に続く空間が姿を現した。

シックな木造の空間に赤い絨毯が敷き詰められており、二人の数メートル先には重々しい木のドアがある。

「着きましたね」

「ああ…行くか」

二人は足を踏み出し、やがてそのドアを開けた。そこは『王宮』と呼ばれるに相応しい場所だった。

入口から伸びるレッドカーペット…王の歩く道。それは部屋の奥の真ん中にある王座に続いている。周りには四つの椅子があり、そこには同じ数の『人間』座っている。

「ねえねえ、しりとりしようよしりとり！」

一番左端に座るセーラー服を来た少年が他の三人に話し掛ける。

「しりとり？……もう少し趣のある遊びは思い付かないのか、と私は嘆く」

それに、反対側に座るタキシードを着崩したクールな口調の青年が答える。

「いちいちうるっさいなあ、子狼は。ねえ、リュウ？」

セーラー服を着た少年は子狼、と呼ばれたタキシードの青年の左に座る燕尾服を着た筋肉隆々の男に話し掛ける。

「しりとり：面白い：リュウ：やる…」

たどたどしい日本語を使いながら、しかし、その体型に似合わない満面の笑顔でセーラー服の少年に答える。

「ほらあ！リュウもやりたいって言ってるよ！」

どうだと言わんばかりに子狼に向かって胸を張る少年。しかし、その勢いは直ぐに弱まった。

「：静かにせんか、見苦しい。音伽様おとぎさまもあの世で悲しんでおられるぞ」

彼を窘めたのはその隣に腰掛ける壮年の男。いかにも貴族の人間という雰囲気滲ませている。

「う……分かったよ、汰牙じい」

汰牙、というらしい男性に諫められた少年はしゅんとなって大人しく椅子に座り直す。汰牙は「じいはやめろ、じいは…」と疲れたように呟いていた。

（あいつらが王の部下、といったところか…）

（何だか変わった人達ですね…）

（…俺達が言えたことじゃないと思うが）

（え？何ですか？）

司とルリは、ひそひそと彼らを見ながら会話を交わす。

と、そこに―――。

「君が新しく雇われた執事くん、とメイドさん、だね？」

一人の爽やかな雰囲気ふんいきの青年が二人に声をかけてきた。

「私は王宮警護官の風谷蒼司。今日から君達の面倒を見させてもらう者だ」

風谷蒼司と名乗る青年は、そう言って恭しく頭を下げた。

次に、王座の周りに座る四人を指し示すと、

「彼らが王の側近である、左からヨハン、音石汰牙、子狼、リュウだ」

蒼司に呼ばれた四人は、ヨハンというセーラー服の少年は元気よく二人に向かって手を振り、それ以外の三人は軽く会釈をした。

「あ、ああ……」

「よ、よろしく願います……」

司とルリは若干引き気味に（主にヨハンに）、挨拶を返す。

蒼司は四人の紹介が済むと司とルリに向き直り、感じのいい笑みを浮かべる。

「それで済まないが、早速仕事に取り掛かってもらいたい」

その言葉に司は気怠そうにため息をつき、ルリは顔を引き締めて蒼司を見る。

「では、内容だが――」

「次期王位継承者を、連れ戻してくれ」

そして司とルリは又してもディケイダーに乗り、街を奔走していた。先程、蒼司に伝えられた仕事のためだ。

『次期王位継承者を連れ戻す』という任務。蒼司の話では次にファンガイアの王となる人物はまだ十四、五歳の子供だという。前王

である紅音伽のたった一人の子供で、その若さ故にか未だ王位を受け継ぐという自分の運命を受け入れる事が出来ないのだ。

そのため、王宮を抜け出すことは珍しいことでは無いそうだ。

「要するに先ずは雑用から、ってことか」

バイクを運転しながら、司はさも呆れたように呟く。

「でも、なんで王様になるのが嫌なんですかね？私だったら喜んで王様になるのに……」

司に続いて後部座席に乗るルリが声を上げる。心底不思議だ、というような声色に司もわからないといったように肩を竦める。

「さあな。そんなもん俺の知った事じゃない——っと、留まるぞルリ」

すると司は急にハンドルを切って、道の一角にマシン・ディケイダーを留める。エンジンを切り、シートから下りる司を見て、ルリも慌てて座席から下りようとする。

「ちよっ、司さん！？どうしたんですか急に！？」

スタスタと歩いていく司の背中に向かって叫ぶルリ。彼は振り返ることもせず、右手をルリに向かってちよいちよいと振りながら進む。

「人助けた」

そう言う司の視線の先には、ステンドグラスの模様が入った怪物、『ファンガイア』に詰め寄られている女性と、ハンチング帽を被った子供の姿が見えた。

女性のほうはかなり怯えていて、それを子供が守るようにしてファンガイアを睨んでいる。

「おい、坊主。そこをどかねえか」

邪魔をされて苛立っているのか、低い声で唸るファンガイア。

少年のほうも『坊主』という言葉が気に入らなかつたらしくますます鋭い目で怪物を睨む。

「……ボクは『坊主』じゃない。渉あゆむって名前があるんだ！」

堂々と自分の名前を怒鳴り散らす渉、という名の『少年』。

ファンガイアは面白そうにクスクスと笑うと再び二人を見据える。
「じゃあ、渉。もう一回言うがそこを退け。その『女』は掟を破り
禁忌を犯した。粛清するのは当然だろう？」

そう言われて言葉に詰まる渉。渉の後ろに隠れている女性はまだ
ぶるぶると震え目から涙を流している。

と、そこに―――。

「女子供をカツアゲとは、趣味が悪いぜ……」

挑発するような声をかけたのは執事服を着た青年、水野司。突然
の登場にそこにいる三人は驚く。

「なんだあ、キサマはあ……」

フシユウウ、と荒い息を吐きながらファンガイアは司を睨む。

対する司は至って冷静に、ディケイドライバーを取り出しながら
ファンガイアに応える。

「通りすがりの……今は執事、かな」

気障ったらしく応える司に、ファンガイアはムカつきながら彼に
歩み寄っていく。

「嘗めやがって……死ねやあ!!」

司に襲い掛かるファンガイア。司は素早く腰にドライバーを装着
するとカードを取り出す。

「変身!」

そのカードをドライバーに装填。サイドハンドルをガシン、と閉
じる。

【KAMEN-RIDE. DECADE!】

九つのライダークレストに包まれ、『仮面ライダーディケイド』

に変身した司。

左腰に装着されたライドブッカードをソードモードにして、ファンガイアに斬り掛かる。

「てやああっ!!」

「うぐあああっ!!」

カウンター気味に決まった一斬で、ファンガイアは大きく後退。その隙にディケイドはライドブッカードをカチャツ、と開き中からもう一枚カードを取り出す。

「粉々に砕け散れ：ガラスだけにな!」

【ATTACK—RIDE. SLASH!】

カードを装填するとライドブッカードの刃が光り輝く。

「ふっ、はああっ!!」

「う……ぐああああっ!!」

二度斬り付け、深い傷を与えられたファンガイアはそのままガラスが割れるように砕け散った。

「やれやれ、だな…」

疲れたように呟いて、ライドブッカードの刃を撫でるディケイド。

その様子を見ていた渉は、そばにいた女性を逃がしてディケイドの前に飛び出した。

「その姿：お前はディケイド!？」

「ん？ ああ、まあそうだな：強いて言うなら、通りすがりの——」
司が悠長にそんなことを言っている最中、渉は手を空に伸ばしあ
る『名前』を叫んだ。

「キバット!」

呼ばれたのは黄色い体に赤い目をした一匹の『蝙蝠』——『キバ
ットバット三世』だ。

「渉！こいつ、キバーラとキバーレが警告していたアイツか！？」
そして、キバットは渉の手に収まり、渉はそれを自分の左手に噛ませる。

「ガブッ！」

キバットが噛み付いた左手からステンドグラスのような模様が渉の身体に走り、顔まで行き渡る。キバットからは怪しい笛の音が漏れ、渉の腰に鎖が巻き付き一瞬にしてベルトに変わる。

「変身っ……！」

掛け声を言った後、キバットをベルトのバックル部分に逆さまに装着する。

するとキバットから波紋が広がり渉の体を吸血鬼のようなガラスの鎧が包み込む。それが弾けると同型の赤い胸、黄色い複眼の鎧が姿を晒す。

その名は仮面ライダー、『キバ』。

「なあるほど。『王』じゃなくて『王子』ってわけか」
遊びたい盛りだからなあ、とディケイドはため息をつきながら肩を落とす。

一方の変身したキバは『王子』という言葉にぷちっとキレた。

「……ボクは……じゃない」

「ん？何かいったか？」

キバの呟きは余りにも小さく聞き取るだけで精一杯だったので、途中の部分は聞き取れなかった。仕方なしにもう一度聞き直すディケイドだが、キバは軽く舌打ちを返しただけで次にはディケイドに向かって叫んでいた。

「噂は聞いている……悪魔！」

キバの言葉を聞いて呆れながらもディケイドはライドブツカー・ソードモードを構え直す。

「やれやれ、またか……話を聞け！」

その言葉と共にディケイドはダンッと踏み出し、キバに向かって鋼の刃を振りかぶる。

対するキバは落ち着いた動きで腰のベルトに着いているいくつものフェッスルのなかから一つ、緑色のものを取り出し、キバットに吹かせる。

「バッシュァーマグナム！」

すると、遥かにそびえ立つビルの最上階、キャッスルドランの王宮の中にいた一人のアームズモンスター、ヨハンがスクツと立ち上がった。

「ねえねえ、僕呼ばれたよ〜♪」

うれしそうに皆に告げるヨハン。次の瞬間、彼の姿は一つの緑色の銃のようなものになり、キャッスルドランの口から吐き出され、キバの元へ飛んでいく。

やってきたヨハン、もとい、その正体であるアームズモンスター、バッシュァーが銃に擬態化した姿、バッシュァーマグナムをキャッチしたキバ。するとその右腕に鎖が巻き付き、それが弾けた後には銃と同色の鎧が付けられている。更に瞳も緑色になり、ここにキバ『バッシュァーフォーム』が完成した。

「はっ!!！」

直ぐさまマグナムでディケイドに発砲するキバ。

「ぐあっ!？」

肩に当たったディケイドは撃たれた箇所を押さえて跪ずき、今のキバと同じ色をした瞳でキバを睨み付ける。

「ガキが…お尻ペンペンしないとわからねえみたいだな!!？」

悪態をつき、ライドブッカーから一枚の『戦士』が描かれたカードを取り出し、バックルに装填する。

「変身！」

【KAMEN-RIDE. KUGA!】

電子音声と共に、ディケイドのマゼンタの鎧はみるみるうちに赤いものになる。やがてそこに現れたのは、超古代の伝説の英雄、仮面ライダークウガ！

元の姿と唯一違うところは、腰につけたベルトとライドブッカーだ。

「ふっ！！」

クウガに変身したディケイドは一気にキバの所まで駆け寄るとその胸に右拳の強烈な一撃を叩き込む。

「りゃあっ！！」

「がはっ！！」

思い一撃に大きく後退するキバ。そして何か思いついたのか新たなフエッスルを取り出す。その色は、紫。

「頼む、リュウ！」

その新たなフエッスルを、また新たにキバットに吹かせた。

「ドッガハンマー！」

キバットの声と共に呼び出されたのは紫色の巨大な鎚、^{ハンマー}『ドッガハンマー』。キバの手の中に収まると同時にその鎧は紫と銀にかわり、瞳も美しいパープルに染まる。これが力を宿すキバ『ドッガフォーム』。

「ふううう——」

重い鎚を腰だめに構え、力をためるキバ。

Dクウガはそれを止めようと拳を振り上げて飛び上がる。

「させるかよっ！」

振り上げた腕を一気に振り下ろすDクウガ。が、それは一瞬キバの攻撃に追い付かなかった。

「でえええいっ！！」

「なっ、があああっ!?!」

Dクウガより僅かに速かったキバのカウンター気味の一発は相当な威力でDクウガを吹き飛ばす。

「ぐっ……やるぜあのガキ……」

鎚で打たれ煙を上げる胸を押さえながらDクウガはヨロツと立ち上がる。

しかし、それはあまりにもろすぎた。

「はあっ!」

「な、何っ!?!」

既にキバはDクウガの懐に入り、ドッガハンマーを構えていたのだ。かわす余裕もなくDクウガは紫色の鎚に腹を打たれ、吹き飛んでいく。

「がっ……ぐ、この野郎!」

彼は手を着きながら立ち上がり、ライドブッカーから新たなカードを取り出す。それは、大地の力を宿した戦士の写されたカード。

【FORM—RIDE. KUUGA TITAN!】

ドライバーに装填し発動させると、赤かったDクウガの鎧が銀と紫の重鎮な装甲に変わる。

「ああああっ!?!」

それに構わずキバはその腕で巨大なハンマーを振り上げDクウガに襲い掛かる。

「てやああっ!?!——っ!?!」

しかし、それは不発に終わった。なんとDクウガはキバの動きを力づくで止めてしまったのだ。

「こっちの力も負けてないぜ……うらあっ!?!」

「ぐっ、き、貴様!?!」

Dクウガは掴んだハンマーを捻るとキバの手から奪う。すると、拳の形をしていたハンマーはみるみる内に細くなり、やがて鎚とは似ても似つかない一つの剣に姿を変えた。

「どらっ!!」

「きゃあっ!?!」

手に掴んだ剣でキバを斬り返すDクウガ。更に切り掛かろうとするが、その男にしては甲高い声の悲鳴を聞いて思わず手を止めてしまう。

(今の声…こいつ、まさか?)

しかし、司が考える隙も与えずキバは鋭い瞳で彼を睨む。

「……次郎!」

続いて取り出したのは青い装飾を施されたフェッスル。それをキバットの口元に導き、吹かせる。

「ガルルセイバー!」

華麗なラッパの音と、狼の遠吠えと共にキバの手に収まったのは、青い柄に銀色の刃の「ガルルセイバー」。キバの鎧と瞳も、合わせて青色のものに変わる。

「……面白え。いくらでも相手になるぜ?」

【FORM—RIDE. KUUGA DRAGON!】

対するDクウガも新たなカードを発動。重厚な鎧をキバと同じ青色のスマートなものに変えたドラゴンフォームにへと姿を変える。

それと同時に彼の剣も同色の長いロッドに変形した。

「俺はお前らを助けただけだ……なのに何故俺を襲う?」

右手でロッドをくるくると弄びながらDクウガはキバに近づいて

いく。

キバは未だ警戒を解かないまま、曲線を描くガルルセイバーをきつく構える。

「――黙れえ!!」

剣を振りかぶりDクウガに襲い掛かるクウガ。

Dクウガはロッドで斬撃を受け流し、反撃の一撃を打ち込む。

「ふっ――やあっ!」

「はっ!」

その一撃をキバはバックステップでかわし、先ほどより一段力を込めて銀の閃光を放つ。

「あああ――らあっ!」

対するDクウガもその高い跳躍力で飛び上がり、ロッドを突き出すようにして必殺の一撃を繰り出す。

「うおりゃあっ!」

すれ違う銀と青。

それらは互いの身体に刻み込まれ、相当のダメージを両者に与えた。

「ぐあああっ!?!」

「がはあああっ!?!」

キバとディケイドはお互いの強烈な一撃に、強化変身の力が解けた元のマゼンタと赤の鎧に戻ってしまった。

だが、それで彼等の戦いが終わった訳ではない。

二人のライダーは己の拳を握り締めて、地面を足で蹴った。

「ふっ――ああああっ!」

「これで――終わりだっ!」

ぶつかろうとする拳と拳。まさにライダー同士の戦いである。

そして、拳同士はお互いの左胸に炸裂――

「ストオオオオオオオ――ップ!!!!!!」

しかし、二人の攻撃は両者の間に一人の青年が割って入り、彼らに一撃が浴びせられる事はなかった。

「ちょ、二人ともやめろ、やめろ——やめろって!」

必死に二人のライダーを引き離す青年。

ディケイドこと司は彼に押されながら彼の顔を見てあることに気がついた。

そう、彼は前の世界で共に闇を葬った友人であり戦友。司は彼に向かつて呟いた。

「お前……雄介か?」

次回、仮面ライダーディケイド New Legend!

「ボクは……王になんてなりたくない!」

「莪さん……恋敵^{ライバル}、出現かもです……」

「姫は——私が守る！」

「変身！」

【F I — S — T O — N !】

「音石汰河……参る！」

「変ん…身！」

【H E N — S H I N .】

「キバは女、か……」

第十四話 『渉・王の鎖』

全ての力を、解き放て——！

第十三話 『女王・テンション、ピアノッシモ!?!』 (後書き)

どうも！

ふたたびまたたびサバイブです！

気になった方も多いと思いますが、キバに変身する渉！

この子の名前の読み方は「あゆむ」というちょっと特殊な読み方をします。普通は「わたる」って読むんですね、この漢字。間違わないようにお願いします！

読んでいただきありがとうございます！

今の所、New Legendのトリロジーを製作予定中です！
波に乗りたいと思います！

サバイブでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8062h/>

仮面ライダーディケイド New Legend

2010年10月10日16時58分発行